

蘭陀や瑞西でも被征服を防禦するだけの軍備はしてゐる。白耳義の如きは、永久中立國中でも最も多く軍備に苦心してゐたに拘らず、なほ不足であつたが爲めに、今回の戦争で全國を蹂躪されてしまつた。空想家等は云ふだらう、それは蹂躪した獨逸が悪いのであつて、若し獨逸を初め、英、露、伊は愚か、世界中の國々が皆白耳義のやうな中立國になればいいのだ。さうなれば國と國との衝突がなくなる。否、別々な國家の組織が間違つてゐるから戦争も起り、人民の負擔も重り、もつと他方面に發展すべき人間の力を制限することになると、と。然し、こんな呑氣な世界主義の世がよしんば實現したと想像して見ても、なほ人種の差に於いて競争はないか？宗教の別に於いて衝突はないか？否、人種や宗教も無事に外面は融和したとしても、個人々々の資性に於いてまた到底戦争と同様のいきさつが脱しられるか？征服でなければ被征服に終はる僕等の資性は、以上の疑問すべてに對して『否』と答へないではゐられないのである。

人類と云ふものが据ゑ置きになる固定物ならいざ知らず、刹那に活動する個人であつて見ると、その個人には弱者を吸収征服する意氣と信仰とがある。その意氣と信仰とには人種若しくは民族の歴史の流入が背景となり、舞臺となる。そしてまたその人種若しくは民族を統一確立させるものは國家である。國家は個人が幾多の弱者を吸収征服しつつある生活の最も確かな姿だ。この最後の道理はなほあとで述べることにするが、國家の制限力があるのは人間の自由な働きを縮少するやうに見える

けれども、實は、却つて征服的個人（そして何人も征服者になりたくない者はない）の意志を成るべく無制限に伸張せしめる所以である。かの社會主義者の連中でも、獨逸並に佛蘭西のは今回の戦争に接して、既にこの理を悟つたと見え、國に従つて反對の態度を取るやうに別れた。が、白國が英國に征服されてゐても、それをただ『物質』上のことだとして、餘り大事件にもしてゐないやうな空虚な精神家タゴルをもその一人に數へられる世界主義者等の間では、——わが國に於いてこの傾向ある人々をも含めて——まだそこまで自省することを知らないやうだ。たとへば、僕の『警戒すべき世界主義』（日本主義第九號）に於いて攻撃を受けた一人は、僕に答へるつもりでハガキをよこし、今日のこと云ふのからして、僕等が見れば、下たらぬ制限で、將來も同じだが（征服的國家組織は個人生活を暗殺してゐると云ひ、將來の國家は征服でなくて良知または愛であるといつた）

個人生活を國家が暗殺するどころか、非國家の状態に於けるよりも一層伸張させることは、前項の理由で分る筈だ。征服的國家が愛を體現しないかどうかに就いては、ここに少し述べる必要があらう。先づ、愛とは何ぞ？かの耶蘇教の外部的にくどくどしい愛の説明などの必要はなく、それをまた印度的にもじつて見たアナンド説を聞くにも及ばぬほど、別な然し眞實な意見を僕はこれに就いて『半獸主義』著述以來發表して來た。僕の知つてゐる一人の老婆はその可愛がつた貫ひ子に死なれて悲觀の餘り、その子の焼かれて來た遺骨をほりく／＼と喰つてしまつた。不養生は不養生であつたにして

も、甕に入れて地中に葬むるよりもどんなに愛情の極であつたことだか？ 生きた子をでも、若し出来ることなら、なめるよりも鬼子母神のやうに喰つた方が満足だらう。ただ出来ないことになつてるので、それだけの燃焼力を以つて養育に盡し、子の成長を見つづいても物足りぬ心持ちを懐いて泣くのだ。愛は、すべて斯うした力だ。殊に、男女間のは熱烈で、その刹那に飽くまで吸収征服しないでは置かぬ。如何に鬼子母神でも子を喰つたあとでは甚だしい寂しみがあつたらう。征服ののちは必らず寂寥の感が來たるのも豫想されるが、この豫想の爲めに燃焼力をゆるめては眞の愛にならぬ。

國家の征服過程は愛の大燃焼である。そして國家は大燃焼愛の體現だ。世界主義はこの事實をも知らず、國家を否認若しくは逸脱して人類の愛を稀薄な空氣の中に求め、實は愛でも何でもない物を、あはれにも、俗習的に愛と見做してゐるのである。

三 國家主義の諸弊害

變化と進歩との小やみも無い事實を忘れて人類の平等を空想する天賦人權論者、——權威は個人から出て個人の生活を伸張してゐるのであることが理解出來ぬ社會主義者やサンヂカリスト、——個人間にも軍備があり弱肉強食があり征服の事實があつて、この征服が却つて人間の親愛を最もよく體現

してゐるのであることを洞察出來ぬ世界主義者——これ等の支持する個人主義では各個人を見ること
がさながら濱の砂の如くで、素然として孤立無聯絡である。渠等の平等と云ひ、自由と云ひ、また愛
と云ふのは、砂の一つぶ毎の情性を認めてそれをもツと廣いところ、深いところに置かうとしてゐる
やうなものだ。廣い若しくは深いところへ投げられても砂は散亂こそすれ、その重みには少しも變は
りはない。それを、然し、かかる個人主義者等はこの重みと散亂との間に何か新しい關係が出来る
かの如く思ひ做して、そこに『有機的』と云ふ科學的形容詞をこち付けたに過ぎぬ。

かかる素然たる個人主義に正反對を表して立つのは現今一般の國の主義である。どうも砂ばかりで
は纏まりが付かぬ。砂の全體を容れてる濱があつてまとまつてゐるのだ。容れ物は容れられた物とは全
く別物だが、後者の總和とは云へると。乃ち、國家は素然たる各個人の總和だと云ふのだ。かかる國
家主義はその對照物たる各個人の解釋に既に間違ひがあるので、その總和にも亦同じ間違ひが這入つ
てることが分ると思ふ。この間違ひ若しくは空想から生ずる國家主義の諸弊害をここに擧げて見よう
が、先づ國家は個人を超越すると云ふ考への事だ。これ、昔はプラトン以來の、そして今は上杉博士
一派の持説ではあるが、超越とはその實無關係無聯絡になることである。たとへば、印度的習俗の考
へでは、生死を超越若しくは解脱すると云ふと、如何にも高尚のやうに聽えるが、それを卑しむべき
譬へではなく、實際經驗として見ると、思想上から云つても、實生活から云つても、人間でなくなつ

たことである。人間でないものが人間であるのは若しくは人間の言葉を使ふのは既にあり得べからざることだ。かの故高山樗牛が『すべからく現代を超越すべし』など云つて無思慮な學者並に感傷的な青年に喜ばれたが、果して人が眞に現代を超越したなら、若しくは超越しようとしてゐたなら、現代は愚かなこと將來のことさへ本當に分つてゐないのである。親になつてしまへば子の心が分らぬ如く、死んでしまへば生きてゐる者の生活に聯絡がない如く、現代を充實させる現代的努力をしないで先づその努力を傍觀しようとするやうなものに現代の内部が理解出来るものではない。樗牛が文明批評家としても思索家としてもまことに淺薄であつたのは、それが爲めだ。

同じ理由で國家が個人を超越してしまへば、個人その物の征服的生活(乃ち、個人の内部生活)と關係を結ぶことが出来なくなる。そんな國家によしんば統一力があつたとしても、國家と無關係なものを統一してゐるのであつて、——丁度、濱の砂を散亂せしめないやうに濱が濱の形に取り押さへてゐるのだ。砂自身には少しも進んで取り押さへられる傾向がない。國家がその傾向のないものを無理にその形にして見たとしても、その状態は眞の統一ではなく、外部からの——今一つ譬へて云へば、前後左右の四面からの——束縛に過ぎぬ。その中に圍まれた各個人をそのままに据え置きにして、國家を少しも動かさないうで置くなら、その國だけは兎も角無事だらうが、一たびどツちかへ動かさうとすれば、底がないので、個人はわけもなく抜けてしまふ。ところが眞の國家は空の如き、無の如き、ま

た理想家の所謂極致遍在の唯一靈の如き固定物ではない。刹那々々にも個人に脊負はれて動いてゐるのだ。乃ち、この事實は個人超越論者等の豫想し若しくは定義するやうな國家の意義と相容れないのである。

超越的國家主義者等はこの弱點を蔽ひ隠す爲め——若しくはそれとは自覺しないでも——きつと辻つまの合はぬ『權威』と云ふ物を借りて來る。渠等は國家を固定的に置き据えて見てゐるので、この散亂的情性ある分子(乃ち、正當に解釋されてゐない個人)が斯うしつかりまとまつてゐるには、何か特別な力があつて外部から然らしめてゐるのでなければならぬ——それは國家に於いて有する權威だと。丁度、かの炭だわらを縛つてゐる繩のやうな物だ。たわらだけでも中の炭は一時をさまつてゐることは納まつてゐるが、そつくり持ち運ぼうとするとたださへ散亂性ある炭のことだから、はみ出たりこぼれ落ちたりする恐れがある。それにちやんと云ふことを聽かせようとするには、更らに繩の力を借りる。超越的國家がわけもなく個人に犠牲を強いるのはこれだ——國家の權威を以つて無理にも汝等に服従を命ずると。

斯うなると、服従の意志若しくは傾向のない個人もうわつつらでは止むを得ず國家の命令と稱するものに従ふが、その代り、吉野博士が論じた通り、『個人の生活はその國家の一分子としての生活を以つて全然終つたものと云ふことは許されない』と云ふやうな抜け道が生ずる。そして如何にも尤もら

しく聽える。なぜかと云ふに、間違つた超越國家論に對する間違つた惰性的個人論を報ひてゐるからである。個人を惰性ばかりと見、國家をただ外部からそんな個人を威壓してゐるものと見れば、その底が抜けてゐることは既に述べた。その底を防ぎ、その抜け道を封じ、僅かに引きまとめたところの外、部權威的團體は出來たとしても、まとめられた分子の總和に過ぎぬ。ほんの分量的な關係を有してゐるだけだ。内部から生じた權威の體現、乃ち、統一がない點から云へば、全體と分子とは無關係だ。こんな状態で分子が全體の犠牲になれるわけがないが、若しなつたとしても、國家論者等の解釋するやうな愛國心からではない、氣まぐれな強制の爲めだ。

僕等は國家の爲めに死ぬのも、——また生きるのも、——共に自我心の満足若しくは發揮だと主張して來た。上杉氏も吉野氏もこれに類したことは云はないではないが、決して徹底的な發想ではなかつた。僕としては實に個人の解釋からして攻めなければならなかつた。個人は決して超越的國家論者や惰性的個人主義者等の相争ふやうな砂の如き、炭の如き總和以上に出でぬものではない。今、炭を例に取るのが一番便利のやうに思へるが、炭の一つひとつは燃える物である。この一つに火がつくと、次ぎ／＼をも燃やさないでは置かぬ。早く燃えたのは滅び、長く燃えるのは全體を生かしてゐる。これを條件として燃えるのが炭である。その全體を縛るたわらや繩も焼き盡されてしまうのだ。國家と個人との本質的關係はこれだ。個人は國家の分子では無く、本質である。國家は個人の總和ではな

く、個性の擴張である。人類の生活とは心意の燃燒だ。この燃燒力が個人の權威で、この權威が征服的に燃えあがつたのが、國家である。して見ると、後者の權威若しくは制限力も個人の生活以外にはない。生活は征服だ。國家はこの状態を本質として成立するのであるから、外存的または固定的な觀念ではない。服従と命令、征服と被征服とは、各個人の間で既に行はれ、——それを世界主義者の如くいやに思ふなら、死んでしまふより外に道がない——そのうちの優強個人の生活が燃え廣がりつつ國家として動く。従つて、國家は内的な成立であると同時に、いつも自然に過程的なものだ。

それを置き据ゑるものと見て、無洞察の政事家等は政策をめぐらすので民愚主義ともなる。また、それに過大の後ろ楯を得たやうに思ふから、不自然な干渉ともなる。この二件も一般國家主義者等の通弊ではあるが、單純なことだからここに詳しく論ずるまでもなからう。

四 個人主義的國家主義

以上で一般の個人主義や國家主義の空想と弊害とを可なり詳しく論じ得たつもりだ、そしてその間に僕は個人に對する國家、國家に對する個人を二つながら肯定してある。が、この兩者を部分と全體との分量的關係に見たり、兩者を對立的に固定させたりしてはない。なほ、僕が兩者を論ずるに征服と燃燒と云ふ言葉で以つて云ひ現はしたところに注意を拂つて貰ひたい。これは他の諸論者に影だも

ないところの問題である。そこに僕獨得の個人主義的國家主義の哲理が根據を得てゐるのである。氣の早いものがこの僕の哲理を單に命名の仕かたから想像して、ほんの折衷的なものとはばかり思ひ取つてはならぬ——個人主義にも一理がある、國家主義にも別な道理がある、それは詰り兩者から取つて組み合はせたのだらうなどは。蓋し僕は何びとも力説しなかつた征服的生活の燃焼状態を以て、個人並に國家に關する在來の觀念を一新したのである。個人といふも、國家といふも、その在來の觀念とは全く違つてゐる。

上杉氏も世人が考へてたほど頑迷な學者ではないらしく、渠の『國家の根本義』(日本評論八月號)を見ると、『人間が國家を成すは手段でもなく、又、目的でもない。國家を成すと云ふこと、それ自身が實に人間の本性である。〇〇即ち、個人の内には國家があるのである。個人それ自らが國家である』とまでは云つた。が、然し、國家の犠牲的精神を、ヤツと『結合の鞏固』と云ふことに持つて行つたのでは、まだ一般國家主義の外的制限のおもかげが残つてゐる。まして『個人な』國家はあり得ず、主權者だけで國家があり得る筈はない』と云ふ意味では、個人をも、國家をも、ただ分量的、また固定的に考へてゐるに過ぎぬ。従つて、渠の國家哲理は、如何に強辯しても、空虚な超越的傾向を脱してゐない。

吉野氏に至つては殆ど定見ある哲學がない。兩主義をただほんの政策上の研究として發表したに過

ぎぬ。そしてこれも一理、かれも一理と云ふやうなふら／＼した態度で、それでもどツちかと云へば一般の個人主義者であることを見せた。そしてそこに超越國家の空虚に報いるに惰性的個人の空虚を以つてしたこと、既に僕の指摘した通りだ。渠は個人を肉體に、國家を精神に譬へ、『未だ十分に肉體の休養を終らないのに、早く已に精神的活動に従はねばならぬ必要に迫らるる』のはよくないやうに云つた。が、精神の肉體、乃ち、國家と個人とは燃焼状態に於いて時の前後、場所の相違のあらう筈がない。健全であれば勿論のこと、虚弱若しくは不鞏固であつても、同時同所にさうなのである。否、同一物としてさうだ。で、ヘーゲルが個人の目的として見た國家も、吉野氏が國家を『また一つの方便』に過ぎぬとすると云ふ美術、哲學、宗教に於ける個人も、實際當面の状態物とは違つてゐるで、見當外れの議論をしてゐることにならう。蓋し同一物が美術となり、哲學となり、宗教となり、また國家となつても、矢ツ張り同一物であつて、手段と目的とは分れてゐない。

それをわざ／＼二つの道に分けてどツちかに片づけてしまはうとして相反する立脚地に在る上杉氏と吉野氏とが、殆ど同じやうなことを云つてゐるのは不思議でないか？

上杉氏、『故に國家の爲めに個人ありと云はざるべからざる所以であり、同時にそれが即ち個人の爲めに國家ある所以となる。』

吉野氏、『詳しく云へば、國家の爲めになすところの一切の施設は必ず個人の爲めになり、また個人

の爲めに爲すところの一切の施設は必ず國家の爲めになるのである。』

云ひ現はし方に哲理的と政策的との區別があるにしても、相異なつた方向に行く兩人が同じやうなところに來たるのはそこに或一致點があつて、互ひにそれを理解しないのだらう。僕はそこに僕の主義を割り込ませる権利があると思ふ。國家と個人とは分量的關係でなく、部分が全體に成る表象的理法に據つて、同一であるのである。個人が背負つてゐる國家、國家として動く個人だが、この個人は燃焼状態に表象化された物であるから、惰性的に存在すると思はれてるやうな散漫な個人ではない。いつも實際の生存競争に於いて弱者を吸收征服しつゝある。僕はこれを『優强者』若しくは『優強個人』と命名した。これはその本質上その時、その場所に唯だ一つ實現するものであるから、『獨存自我』とも稱する。勞働者若しくは資本家と云つたやうな團體もこれで動く。一般の社會もこれで動く。國家の如き大組織になれば、また、他のすべてを吸収して、それだけ大きくこれで動く。

人生の過程に於いて——そして過程以外に人生はないが、——この優强者の存在を何びとも拒むことは出來ぬ。その代り、渠は人生の過程が刹那的である如く刹那に起滅してゐる。寸時を各方面の徳若しくは實力に於いて油斷すればそれだけ緊張の度は減して、直ちに他の優强者が現はれる。然しそのまた優强者も出て來ないではない。斯くして最大優强者が國家である。國家の主權者である。そして他の小優强者若しくは弱者どもは渠に全く被征服的に吸收されてゐるのが渠等の本質でもあり、

存立でもあり、また幸福でもある。然しまた主權者はその實力が少しでもなくなると、それだけ部分的になるし、また全く衰退すると、いやでも應でも他の主權者と代らねばならぬ。國家若しくは國家の組織にこれ以上の鞏固を望むのは、空想であると同時に、國家を例の固定、乃ち、無活動物にしてしまふことだ。

たとへ傳統的に主權者が確立する國家としても、鞏固なのはその傳統の形式だけであつて、——形式だけでも占有するのは一種の優强者として生れた所以だが、——その實力は本人の緊張如何に従つて増減を免れない。十分緊張してゐる時はその形式までが充實し燃焼するので、外的威壓若しくは束縛を呈しないが、緊張が減すると減ただけ、燃焼を離れた輪廓が見えて來る。乃ち、悪い固定化の現象で、これがひどくなるほど、國家の内容が貧弱を加へるのだが、それでもそんな國が若し隆盛進歩の状態にあるとすれば、この空虚を滿たしてゐる補佐若しくは代理の優强者が別にあつて實力的に働いてるに相違ない。そしてこれが、傳統的主權者の國家に於いても、主權者と衝突しない所以は、主權者と同一になつて主權者の形式を生かす方になるからである。この微妙な眞理は僕の『古神道大義』に於いて詳述してあるから、ここにはこれ以上に云はぬことにする。が、他にこれほど帝王の學としてふさはしいものはなく、これほどわが國體とわが民族性とに適した哲理はないと、僕は思つてゐる。

五 實際政治に於ける適用

然らば、個人主義並に國家主義の獨斷的區別を撤廢したこの僕の哲理を政治上の實際にあてはめて見せてから、この論文を結びたい。

吉野氏がデモクラシの英語を民主主義と民本主義とに分譯してから、この英語の意味する政治は人民の『爲めの』であるとか、人民『に依つての』であるとか云ふ説が諸方に多く現はれた。が、政治の實際は、民政の場合に於いても、決して人民全體に依つて行はれるものではない。希臘の貝殼投票とか、今のレフアレンダムとか云ふ制度は人民の一般意志を問ふ傾きであるけれども、實は、そこにも部分が全體を表象化する働らきが働らく。吉野氏はこの消息を或程度まで知つてたかどうだか、民本主義を解して、『この關係を政治的に見れば、多數の意嚮が國家を支配するものであるけれども、之を精神的に見れば少數の賢者が國を指導するのである』と云つた。

『政治的機會均等主義』(新小説三月號)を論じた大山都夫氏も亦云つた、『近代デモクラシの下に於ては、一般民衆をして國政の樞機に參與せしむことは要求する所でない。只一般民衆の推戴すべき偉人を自ら定むることと、斯くして定めた偉人に……政治的機會均等主義を實現若しくは維持せんことを要求するものである』と。

以上、政治的、精神的と云ひ、參與、實現と云ふ區別が一般輪廓の意味しか選ばぬと同様に、また賢者と云ひ、偉人と云ふのも別に特別な意味には進んでゐない。が、この傾向をもつと哲理的に又具體的に推し詰めて行けば、平民のでもなく、部分的英雄のでもなく、つまり、僕の云ふ優强者の政治になるのである。そして優强者の意義さへ分つてれば、すべての説明はこの一天張りで済む。民政は個人の爲めとか、人民に依つてとか云ふ論争の必要がなくなり、また美濃部博士と上杉博士との間に於ける如き天皇機關説とか、天皇主權主體説とかのいがみ合ひも消えよう。乃ち、刹那々々にも起滅を争ふその場、その時の優强者の國家、優强者の政府、優强者の議院、優强者の生活である。

この生活に於いて、征服するものと征服されかけるものとの間に大して實力の相違がない時は、その征服作用は最も熾烈を極はめるのである。この理を以つて、一國政治の最も盛んに振ふべきは二大政黨の對立の時である。今日のわが國の如く第三黨や第四黨が生ずるのは、わが國の政治が緊張してゐないことを表す。この點に就いては、十月の二雜誌が別々に正反對の意見を發表した。一は上杉氏流の憲法論に同する加藤扶桑氏の意見で(世界)、歐洲大陸諸國が小政黨分立の状態であるばかりか、憲政の本場たる英國でも今日ではかつきり二大政黨制にはなつてゐないと云ひ、わが國は殊に『政權を握る政黨のみが大黨となり、之に對立する一大政黨はわが政界に存立すること能はず』とある。それは然しわが國民緊張の度が足りなかつたからではないか?そして英國に於ける愛蘭士黨の如きは、

地方的利益に依つて結ばれた團體に過ぎぬ。他の一つは大山郁夫氏ので(新小説)、わが國でも時勢の要求は『政黨内閣的基礎の上に立たざるべからざる必要を切實に感ずるに至つた』とし、『政黨内閣制は外に障害がなければ自然に二大政黨對立制に歸着する傾向を有する』ので、いろんな障害——たとへば、地方的、政體論的、徹底理論的、社會主義的等の——がある佛蘭西政黨界でも、『近年、黨際聯盟(BLOCK SYSTEM)が發達して、二大政黨に似たるものを現出するに至つた』と。

加藤氏は政黨をも國定的、外部的に見て、政黨が如何に内容的に動いてゐるかを忘れてゐる。そして大山氏はこの動的方面をよく勘定に入れた。ただその黨際聯盟と云ひ、障害の徹廢と云ふのが、僕の所謂國家的征服の實現過程であることを疎外してはならぬのである。たとへ表面で三黨、四黨、若しくは小黨分裂があつても、それが征服と被征服との關係に於いては——吸收作用の爲めに——おのづから二大分派になつて来る。そして二大分派の自覺が強烈になればなるほど、その間に國民の興味も生活も全體的に統一されて行く。が、部分的の小分裂の外形だけに固定的興味がある間は、その國民は振つてゐず、若しその興味さへ出ないのでは、政治的にと同時に人間的に死んでゐるのだ。そして二大政黨の一つが征服を了する時に、その黨の優強者が最大優強者(立君國なら、君主)と同等ではなく、同一になる。これは洞察力なき手合ひにはただ精神上のことのみ解せられ易いけれども、精神と肉體とが無礙に融通してゐること、否、合致してゐることを知るものは、ただの理論ではなく、現實的

幻影として實際の事實だ。(幻影が事實となる表象哲學は僕の幾多の著書中に云つてある。)

以上は一國家の流動事實的政治状態であるが、國際上に於いても、飽くまで征服作用は行はれる。そして一國家が世界を全く征服してしまつたとしても、——但し、そんなことは實際には無からうが、——矢ツ張り、世界主義者等の最後の希望には反して、その國家の組織は變化しないのである。蓋し征服を遂行するほどの最大親愛心は、他に喰ひ物がなければ自分を喰はないではゐられぬからである。(大正五年九月八日)

個人主義に關する三誤想

ここに最近に現はれた實例に依つて、個人主義に關する三種の誤解を論じて見る。

第一は、平塚明子氏の告白『子を育てた一年間』(婦人公論掲載)で、今その掲載雑誌が手もとになりから記憶だけで云ふが、個人主義を單に利己主義と解して愛他主義の反對とし、かの女は子を産み子の愛をおぼへてから前者の非を悟り、後者の眞理を知つたと云ふのだ。かの女に多少でも思索家たる分子を豫期してゐたものから見れば、まことにこれはかの女の、あつけない、たわいもない變説若しくは改宗である。こんな風に容易に變改できる考へを持つてゐたのを若し新思想の婦人として置くなら、新婦人と舊式婦人との相違は殆どないと云つてもいい。甲は一たび利己主義を是認してゐた

が、乙は初めから否認してゐたに過ぎなからう。そして個人主義の眞意を知らなかつたに於いては兩者とも同じことだ。

第二に、中村孤月氏の『人間は如何に生活すべきか』(讀賣新聞掲載)に於ける發想である。渠が『自由の本質は人間の個人的要求である』とするのはいいが、そこに起る『人間の争闘を絶たうとする』には『單に限りない物質の私有を僅かに制限する』に依つてできると云ふのは、個人主義を専ら偏物的理智の打算ばかりで考へたのである。社會を全的に見れば、個人的要求やその結果なる争闘に『一定の制限を置くこと』ができぬのみならず、寧ろ置いてならぬのだ。否、わざとならぬ制限とは個人個人の分量的制限ではなく、弱者に對する優强者の實質的、獨存的征服である。そこに自然の責任もあり、制限も生じ、法律もでき、優強個人の國家的制限にもなる。そして弱者は征服されてゐながら(これは性質上止むを得ないことにして)洞察的には優强者の生活を分有する。ここに極端な個人主義と極端な國家主義とが一致し、利己主義と愛他主義とは征服愛の純化的功利熱にその區別が撤廢されるのである。

第三に、阿部次郎氏の『思想上の民族主義』(思潮掲載)に於ける民族人と世界人との區別である。中村氏は一社會に於ける個人を誤つて分量的に見たのであるが、阿部氏のはまた國若しくは民族に制限されぬ個人性があると誤想したのだ。渠の言では、自國を愛するのは自己の『自然的衝動に基いて

ゐる』が別にまた自己の『本質ならぬものに服従すべき』でないところの『一つの道』(人道だらう)がある。そして渠の個人主義はこの人道を『民族の間に生かすこと』に於いてのみ民族とは關係を保つのだと。渠の所謂本質とは個人の普遍的要求であるに於いて自然的衝動に對立させられてゐるが、若しその要求が本質的に個人に存在してゐるなら、この衝動と結局同じでないのか？否、渠の要求と衝動、普遍的と自然的の區別はほんの先入的假定に過ぎぬ。實際の個人にはこの區別はない。たとへば、シクラテスが毒を仰いだのも、ガリレオが殺されたのも、その國その時代の民族的功利精神が個人の本質、乃ち、衝動となつてできたことだから、深い個人主義からの解釋としては、補正成の忠死や乃木大將の自殺と決して何等の相違もない。

つまり阿部氏の如く國家的、民族的並びに世界的に分けて云へる個人は架空の個人である。眞の個的存在はその民族性を緊張充實して、身づから國家的制限を産みこすれ、決して緩漫空虚な世界主義には流れない。(大正七年七月)

誤られた國家主義

明治年代の而も事大主義的傾向に育つた舊人の頭腦の粗大とその馬鹿さ加減とを代表するに近來最も好適例であるのは、慶應義塾長としての貴族院議員鎌田榮吉氏が讀賣新聞(大正七年七月二十六日)

に發表した議論である。『亞細亞主義の誤謬と國粹主義の偏見』は寧ろ渠に在ると思はれる。

(一)、渠は『國家が對世界の史上で覇者たる……には國家主義ではいけない』と云つた。が、その反對なる渠の所謂進歩主義、世界主義とは『我の長を保ち之を他國にも及ぼし……他の長を探り我の短を補ふこと』ではないか、よしんば、さう云ふのをコスモポリタニズム、乃ち、世界主義と云へるかどうかは別問題としても、かかる保長補短主義は少しも國家主義なり日本主義なりとは衝突しない。

(二)、然し、『國策を樹立するに國境を設けず利害一致するものと協力するの思想は將來に發展せんとする國家の採るべき最善の方策であらねばならぬ』と云ふのを分析して見ると、是は進歩した國家主義にも採用できる所の保長補短主義ではなく、全く國家を無力無制限の物と見た概念的人類目的の世界主義である。道理で渠は國家を『唯便宜上定めたものに過ぎない區劃』(僕はこんなことをさへ日本人としては根本的に云へないと思つてゐるのだが)とし、その『中に蟄居することは人類の自由を忘却したもの行爲』だと云つた。が、僕等には國家は便宜上定めた物ではなく、根本的必然的制限力を有してゐる、この力が實は僕等自身力であることなどの新哲理はここに略することにしても、渠が日本人としての人類であることを忘れて無國家の人類として國策を説く態度は、如何に辯解しても空想的な世界主義者のそれである。

で、(一)は決して無國家的でも非國家的でもないか、(二)は直ちに非國家的危険思想であることは、冷靜に考へても、確かに云へることだ。渠は福澤翁以來の傳習により、それでも、英米の國家には立派にそんな思想が存在してゐるではないかなど云ふかも知れぬが、さういふのが、乃ち僕等の國民性と國民の發展とを無にしたことになるのである。

(三)、渠は次に日支親善の意味を以て『亞細亞主義と稱するならば不可はないとしても、特に亞細亞主義の名を附する要があるまい』と云つた。渠にはない筈であらう、極端に云へば、亞細亞どころか、支那も日本もなく、ただ人類と云ふ概念のみが空存する所の世界があるだけであるから。また白人と黄人とをただ表面的な色や氣候や食物の關係やばかり區別してゐるのであるから。従つて、粗大正直にも日支親善には『歐米人でも協同を希望するならば一緒にやるべきだ』としたのだらう。そこに人種や歴史や教養や國民性や國家的制限やの必要な内察を全く缺いてゐる。

(四)、以上の如く渠が人類の概念論を直ちに國家論に持つて來て、國家を以て、單に便宜上の設定と見做したのはルソウ以來の無制限自由の思想が見え、國家の利害を無國家若しくは非國家の人類標準に判じようとしたのは、また、ミルやスペンサの如き英人流の物質的個人主義を脱してゐない。これは何を意味するかと云ふに、ただ舊式な官僚思想に對する矢ツ張り舊式な非官僚思想に過ぎない。間違つた時代後れたるに於ては孰れも共に同一である。

(五)、渠の所謂對世界的進歩主義が空漠で而も間違つてゐる點に於いては、實際に偏狹であつた昔の國粹論や國家論の退嬰主義と好一對ではあらうが、わが國現代の進歩した國家主義は渠の考へ以上の深い根據ある保長補短主義であると同時に、渠の豫想だも爲し得ざる根本必然の制限力を認めてゐる。渠は頻りに利害さへ一致すればといふことに重きを置いたけれども、一國の利害はその國家内の制限力をよそにしては考へられないのである。従つて、歐米人と亞細亞人とは人類としての概念だけは如何に同じでもそれが直ちに利害を同じくするとは云へぬ。そして日支親善の實際に於いて必ず或程度の歐米人排斥を生ずるのは自然の勢ひだ。蓋し日本と支那との親善も或程度のもので、この程度を越えた所は敵對の範圍であるに於いてをや？これが國家存立の對抗意思だ。此重大事を忘れて『對世界政策』も『國策』もあつたものではない。

以上は、『何でも彼でもといふ田舎根性に依るのでもなく、また「徒らに歐米人を排斥する」のでもなしに現代の新思想たり、新國策たる日本主義の主張者として、僕が鎌田氏に注意を願ふのである。』(大正七年七月二十六日)

以上は八月四日の東京朝日新聞に投稿した僕の議論を再録したのである。が、かかる注意を——少くとも一應は——受けるべき人は鎌田氏ばかりではない。これまでに本誌記者が反駁して來たものは皆さうだ。たとへば姉崎正治、吉野作造、新戸渡稻造、谷本富、桑本嚴翼、室伏常信、生田長江、阿

部次郎、野上白川諸氏の如き。

渠等の思想若しくは理論上に於ける誤謬を近頃最もよく代表したのは桑木博士であるから、僕は前號に於いて渠に對する駁論を發表したところ、別項掲載の如きハガキが到着したけれども、僕等の指摘する誤謬は矢ツ張り誤謬だ。渠は東方時論(八月號)に於ても、これを繰り返してゐるのである。『思想の危険性』と云ふ論文だが、そこに云つてゐることは結局フサルの考へと同様思想と實際とは違ふと云ふに過ぎぬ。『思想は如何なるものにも索連するから』どんなに危険視されてもかまはない、『實際問題に應用』の時に慎めばいいと云ふのだ。然しかかる思想は思想でなく、まだ空想である。否、空想を組織するまだ消化しない知識若しくは學得に過ぎない。さきの鎌田氏にかかる學得を舊式のまま國策に應用しようとするのであり、また桑木氏にかかる知識を自己の商賣道具として辯護してゐるのだ。

けれども、無國家思想から國策が生じよう筈がないと同時に、無消化的知識が國民の胃腸を害しないでは置かないのである。桑木氏は『超國家的』を以つて直ちに非國家的と見爲すべからざるを重大な論據としたが僕等の考へでは、事實若しくは實際問題を離れて理想も眞理もない如く、國家(僕等には日本)を超越して國家の利害は考へられないのである。詩人、藝術家、學者、宗教家等の事業も、だから、渠の考へたやうな超國家的な性質のものであつてはならない。如何に他國と共通な思想や人情があつても、それが肯定されるのは共通だからではなく、その國その國の存在に便利と實質とを與

へてゐるからである。共通の故に目が暗んで自國を超越しようとするのは、乃ち、直ちに他國の制限内に同化しようとする事であるを覺らねばならぬ。この論點から云つて、超國家若しくは無國家は乃ち非國家である。そしてこれは個人的な論争若しくは自由競争を許すべき範圍内のことではなく、渠の所謂『根本の事實』である。これを『否定せざる以上、一方のみが(乃ち、國家主義が)國家に對する正當なる思想であると主張するは速斷である』けれども、渠や鎌田氏はこの根本事實を否定してゐるのであるから、危険な非國家論者と云はれても止むを得まい。全體、國家の制限力と云ふ事實をよそにして思想なり國策なりが成立するなど思ふのが渠等の間違ひである。渠等がいまだにそこに目覺めないのは、無消化の知識や他國へ同化の事大主義やに煩はされてゐるからである。(大正七年八月)

國家個人の辨

(一)、個人主義的國家主義と僕等が僕等の主張を稱する所以は、分離した個人主義と國家主義との兩獨斷を排斥して、直ちに僕等の内部必然的な生活を攫むだに在る。獨斷個人主義は國家を手段にし、獨斷國家主義はまた個人を手段視するが、僕等は手段でない個人を以つて手段でない國家と一つ物だとするわけを體得したのである。(詳しくは本誌第一卷の時に僕が連載した議論を讀めば分ることだが)これを簡単に云へば、個人の征服的優強性を認めて行けばその方に國家が實現してゐる。従つて、國家の存在は決して賢愚強弱平等の個人個人の總和などではない。優強者に對する弱者は征服吸收されるものだから、獨立個人としては生存できてゐないのである。それ故國家を『超個人』と云ふのは空想に過ぎないとする。その代り、征服的に對抗しつつある優強個人が國家と實現するのだからその國家は決してその個人の手段ではないことになる。かかる國家は勿論過程的なものであるが、すべて人生にそれでないものがあらうか？

(二)、現世的若しくは功利的と云ふことが一般に卑しまれるが、それこそ却つて無制限論理からの迷信ではないか？合致的な生と肉とを尊んで不致な死と靈とを論外とする僕等は、勢ひ現世主義と功利主義とを國家的制限内に深化純化してゐることが必要である。そしてこの深化純化は同主義を脱却若しくは超越してはできないのだ。従つて、戀愛の場合にも、また愛國心に對しても、これを奉仕的とか犠牲的とか見るのは姑息な手段であつて、實際は個人なり國家なりの自己満足と見做すのである。僕等は愛を『征服の一面に局限』するのではなく、その部面にしか眞の愛は存在しないのだ。乃ち、僕等の戀愛は個人的征服を意味し、僕等の愛國心は對外的征服である。そしてこの征服とは僕等の純化した意味での現世主義的、功利主義的であるのは當り前だ。

(三)、僕等が日本人種と云へば大和民族のことである。歐米では人種や民族が同一であつて、國を

異にしてゐる例はあるが、わが人種若しくは民族にはまだそんな例がない。従つて、人種と云つても、民族と云つても、(はた又國民と云つても)同じことではないか？若し人種と云ふのが『曖昧』や『空虚』に見えるなら、その言葉を特別に気にしなければいけないことだ。それから、國家を支持するのは民族文化の史的展開力であると云ふことには僕も異存がないが、その展開力は優强者獨存の力であることを知らば、民族を統一確立させるものが國家だと云ふ言葉に衝突しないのである。かかる解釋は全人的に出なければできないのだからこれを單に『理論的』と非難するのは恐らく當つてゐまい。

(四)、超個人を生命を信ずるのも心理的であるかも知れないが、僕の知情意合一、乃ち、全人燃焼的にてき上つた哲學を『心理學ぬき』と見做すのでは、その見做す人にどこかにまた無理解か偏見があるのだらうと思はれる。『煩惱を斷ぜずとも涅槃は得られる』と云ふ親鸞の言葉も、僕等の合致的心理學から云へば、優强者の實用眞理説、生々の現世主義並に純化功利論に持つて來ねば本統に解けないのである。これを偏靈的傾向や超脱趣味を以つて解けば、矢ツ張り空想に終はるばかりだらう。

(五)、僕の云ふ獨存は獨尊の意味ではない。また、優強的對抗意志は反對者の云ふ個別的對立とは違ふから、『我執』と受け取られるべきものではない。従つて、自己なり國家なりに無反省の謳歌はしてゐないのである。但し僕等の弱點を矯める爲めに却つて長所をも殺す恐れのある場合には事大主義的

潔癖よりも寧ろ自己に於いて滑濁共に呑むの覺悟が必要であるとする。けれども、木村項の發見の如きは、わが國に稀れな一事件であるのに、これを日本主義證明の實例としたのが何で攘夷的思想であらう？これを外的差別などとけなすのは外的と云ふのに例の偏靈癖があつたからであらう。

(六)、最後に、僕が日本主義的新哲學を新哲學と吹聴するのは決してただ僕の自慢をしてゐるのではない。現今の如き無秩序・無反省の時代には自分でいいと信じたことは自分から主張弘布して行かねば納らない爲めだ。消極的謙遜は必らずしも唯一の徳ではない。自分で自分だけのことを人に注意させつつ、その代り思ひ切つて人の反駁を求めるのも積極的に云へば謙遜の一種であらう。

(以上は開墾に掲載された佐藤新氏への答へである)

九 自由解放とデモクラシ

自由解放とデモクラシの批判

一 空想論の實例

この論文では成るべくくつろいだ云ひかたで物を云ひたいのであるから、先づ、一つの引例を以つて初めるが——或誌上に(これはその誌名も人名も挙げる必要がない)『自覺者の國』と云ふ物を書いた人がある。その云ふところの條件を拾つて見ると、自覺者とは六根を常に内面に向けて、渠自身の本心を自覺し、職業的な自分を超越して、自分自身であることに努力するものである。斯う云ふと、それは如何にも高尚で立派な者らしい。が、その一方に於いてまた斯う云ふことが否定的に説明してある、『自覺者には主義もない、宗教もない、黨派根性もない。また敵もない、味かたもない』と。して見ると、人間の實生活には必らずつき添つてゐるものが少しもないのだから、生活その物もないわけだ。

人間が苟しくも生活してゐる以上は、自然に敵もある、味かたもある。いや、黨派や宗教は——意識的にせよ、無意識的にせよ——必らずある。ましてその人の生活原理としての主義がなければ、人

間は生活者として立つて行けないのである。ところで、それがないと云へば、そんな人間は死人か生きながら死んでる者かであらう。自覺などのありやうもないのだ。かかる空疏な説明に安んじてゐることが出来るには、その提出した條件にも頓馬な箇所があるにきまつてゐる。乃ち、人間の内面的本心と云ふものを石や木にも共通と見做して、全く社會から離れて考へられるやうに思ひ、人間の本質な生活を職業のままに攝取する道を忘れて、無爲に職業を輕蔑してゐることができると考へてゐるのだらう。かかる人間は自覺者どころか、木石や死人も同様であらう。そして死人も同様なくせにそれを自覺者などと云ふのは空理と空論とを以つて單に自分のてらひを樂しんでるに過ぎない。

そんな自覺者を空想したのは、新らしがりの實は舊くさい或佛敎家である。が、また別に耶蘇敎出の或る學士があつて、『平和の道』と云ふ物を書いた。日本人が日本のことを説くのを冷笑して、人間本位の國家となれ、軍隊から解放された時に眞の平和があると云ふのだ。そして僕等が『知慧と神と實在と法悦を捨ててただ日本を説き愚衆に阿ねる』と。

けれども、僕等日本人には日本人としての人間の實在を離れて別に人間本位の國家があらうか? そして世界にいろ／＼國家が對立してゐる以上、そしてこの對立は永久にも不對立にはならぬと思はれる以上、軍隊の用意も、従つて場合によつては防禦的侵略も、飽くまで必要である。これは決して虚偽ではない。國家生活の自然から生ずる本統の要求である。かかる要求を體現することを却つて僕等

として知慧でも、り、法悦でもあつて、決して愚蒙に阿ねつてゐるのではない。

『平和の道は眞理』だと云ふ如きは、矢ッ張り、自覺を空理上で云つてゐると同じだ。自覺若しくは條件があつても無いのと同じなら、鹿爪らしい考へだけが全く餘計に馬鹿々々しくなるやうに、眞理と云ふのは僕等の實生活に觸れてゐないでは、眞の眞理ではない。無國家主義にもなれるところの耶蘇教に於ける神や實在なら、僕等は捨ててゐるが、日本人としての教養の上に現はれる眞理なら、決して一刻も忘れてはゐない。

以上の二思想家に見えた考へかたや論法はただこの二人にばかりとどまつてゐるのではない。今の無思想的なをして日本の教養に乏しい政論家どもには大抵まつはり付いてゐるのである。

二 自由解放の意義

現今の流行語若しくは流行思想ともなつてゐるは、(一)自由解放、(二)デモクラシ、並びに(三)社會主義である。この三つの思想は實に漠然たるものだ。その代り、漠然たるが故にちよつと新らしがりの青年どもは直ちに無條件で這入り込み易い。そして這入つてから、少し反省ができるやうになるとまた俄かにまご付くのである。

昔、まだ社會主義の連中が方々の寄せや耶蘇教會堂を借りて演説をすることを許されてた時、物好

きな青年どもが演説と云ふものをしたい爲めに——ただそれだけの慾望の爲めに——われもわれもと社主義の連中に飛び込んだ。そして段々深入りして行つたものもあつた。十年前の幸徳事件にはかかる程度の彌次馬も大分檢舉されたが、檢事から事件の成り行き以外にも、思想上の結局のところをつき詰めて、いやそんなことまでは考へてゐなかつたと今更らのやうにびつくりして泣き出したさうだ。今の青年はそんな輕はづみの覆轍を踏んで貰つては困る。つまり、まだ理解も曖昧なうちに間違つた方へ這入り込むのがいけないのだ。

先づ、自由解放と云ふことから考へて見ようが、これほど分り切つたやうでまた曖昧に雷同されてゐることも少からう。自由と云へば、解放されることである。而も何からの解放であるかと云ふことをよく考へて見なければならぬ。同時に、また、如何なる程度若しくは如何なる状態にまでの解放であるかをその主張者は用意してゐなければならぬ。或物からの解放は決して絶対のものではない。文壇の一隅には、取り澄まして『絶対の自由を主張する』などと云つたものがあるが、それは文句を弄したに過ぎない。眞の自由は眞の義務と共に存してゐるものである。明治十年代の自由思想におだてられた政治青年は自主自由の權を主張して壓制政治からの解放を叫んだが、義務と云ふことは殆ど全く忘れてゐた。義務を教へられることは束縛を教へられるやうに感じた。思想的に云へば、全く無方針の自由であつた。「板垣死すとも自由は死せず」とは有名な事件であつたが、そんな自由であつたから

板垣伯の死ぬよりもずつと以前に亡んでしまつたのである。つまり、實生活的思想上ではただ五里霧中に彷徨してゐたのだ。だから、その結果はわざと同類と衝突したり、巡査と喧嘩したり、ことさらに法律を破つて見たり、贋造紙幣を拵らへたりした。

それから、文藝上の自然主義が社會的にも一般に廣まつて行つた時、その主張者の一人なる僕などには新建設の方面もあつたにも拘らず、これはまた誤解されて破壊の方面にばかり持つて行かれた。その時の自由解放は形式生活や形式道德のぶちこわしにのみ傾いて行つて、破壊をしたあとへ新しい建設——これも義務だ——をすることが忘れられた。そして徒らに雇はれ人は主人に、弟子は師に、子は親に、女は男に反抗する傾向があつた。その結果の一つとして、婦人界の一隅に雑誌『青鞜』を出して男子に反抗しようとしたものがあつたが、徒らに反抗の爲めの反抗、解放の爲めの解放であつて、義務と建設とを忘れた、そして忘れないでもそれだけの實力の伴はなかつたものであるから、年したの男を亭主に持つ流行を來たした外には殆ど無駄のやうになつて、再び初めから出直さなければならぬやうな始末を見せてしまつた。

僕等に必要なのは新しい建設の伴なつた局面打破である。義務と責任との用意ある自由解放である。それにしても亦、不自然な建設や空想的な義務責任やを用意しての打破若しくは解放であつては困る。僕等の實生活に於いて自然に生ずる實際的要求としての建設や責任の爲めのものでなくてはならぬ。たとへば、僕等は官僚の忠君愛國主義には随分惱まされて來たものだ。けれども、それだからと云つて、忠愛主義から自由になりたいと思ふのは間違つてゐよう。悪いのはこの主義のかけに隠れて官僚どもが徒らにらくに政治なり教育なりを利用しようとしてゐたことだ。僕等はその官僚どもの勢力から解放されさへすればよかつたのであつて、忠愛主義その物は今日でも僕等を不自然に拘束してゐるのではない。

軍閥の軍國主義にも僕等は随分迷惑をかうむつて來た。が、僕等の迷惑は軍閥が軍閥の爲めに軍國主義を利用した範圍に於いて在るのであつて、その主義その物が必らずしも悪いのではなかつた。軍國主義があつた爲めに日清、日露、並びに日獨の戦争に勝利を得て、それが爲めにまた僕等は世界的な一勢力と發展して來たのである。この發展の持續と進歩とを拒まない限り、そして現今に於ける英米の僕等に對する嫉視と威嚇とを見てゐる以上、僕等は今後に於いても軍國主義を是認する最も正當な理由なる國家の反抗意志からは解放されるべきものでない。僕等の自由になりたいのは、この主義を悪用する軍閥のわがままやから意張りからである。國家の對抗意志から自由にならうとするなら無國家主義者と云はれる事を覺悟しなければならぬと同様に、忠君愛國から解放されたくば、先づ自分の首からさきへ提供してかからねばならぬのである。

問題が重大であつて而も直接に僕等の生活に關係があるからである。僕等に取つて國家存立の苦悶

なる對抗意志とか、忠君愛國とかは、日に日に新らたなる創造的關係である。それを何か別に固定してしまつた觀念か何ぞのやうに思つて輕々に附し去つてしまふのは最も間違つた考へだ。諸君はかの十年前の彌次馬的社會主義者どもが檢事の前で自分らの考へをつき詰められてわれながら戰慄したやうな愚を再演したくはあるまい。けれども、なほ、舊式無制限の論理に利口ぶつて新らしがらうとするものらうちには、人類の名によつて國家並びにその法律からの解放を得て、戦争の経滅を夢見てゐる愚者どもがある。然しそれは痴人の夢、愚者の天國に過ぎない。

今日までに無國家的傾向を最も多く有してゐたのは歐米の社會主義者であつた。それにも拘らず、いざ戦争となると、佛蘭西の社會主義者は佛蘭西の爲めに、獨逸のそれはまた獨逸の爲めに立ち別れて各々自國に就いて戦つた。そして獨逸の社會主義が露國に於いて露西亞の國家を解體せしめた餘勢を以つて、獨逸をも共和國にしたけれども、その連中が巴里の講和會議に於いては、調印の時に、クレマンソウが獨逸共和國と云つたに對して『帝國』と云へと命令した。乃ち、社會主義の要求を實行して共和國になつても、なほ且、國家的要求からは自由にされたくないと云ふ自覺を證明したのだ。

社會主義を世界に於いて初めて實行して見た露國の過激派だつて、決して今の状態では落ち付く筈がないのである。そしてつと落ち付いた上でも、たとへ他のことにはすべて成功を擧げたとしても、無國家の社會ではゐられないにきまつてる。若し無國家でゐればそのうちには必らず獨逸なり、

日本なり、英米なりに併呑されてしまふ。この併呑が悪いと如何に空想的に叫んでも、事實、さうなつてしまふのだから仕かたがない。お互ひに人類だから、國家を解體して親しみ合はうと云ふやうな空想的希望がこの場合無制限論理の信奉者どもからは出ようが、たとへ日本と米國とが申し合はせて雙方の國家的制限を解き放つても、米國に於ける排日思想は決して除けない。そして除けないとすれば、いつまでも米人に僕等がいぢめられることを甘んじない限り、それに對抗的團結をしなければならぬ。そしてその團結を最も力づよくまとめて呉れるのは國家への逆戻りである。

兎に角、僕等の人種的、民族的、歴史的、並びに教養的な相違に對する他の人類、乃ち、他國人からの侮蔑を防いで呉れ、また僕等が他國人に同じやうなことを仕返しができるやうにさせて呉れるのは、そして僕等をして世界に安立させるのは、國家のめぐみである。僕等は日本人としての人類である。だから、日本人たることを離れて人類たることだけでもできると思ふのは、自分で自分の身を半切するやうなものだ。けれども、そんなことをしてもいいと思ふ新らしがりがわが國にも少くはない。然しそれは少しも新らしいことではなく、わが國にも外國にもあり振れた舊思想だ。僕等は新時代に相當する日本主義を唱へて、かかる舊思想家どもを撲滅しつつある。撲滅すべきものは、大抵の佛敎思想家、全部の耶穌敎家、並びに社會主義的傾向の外國模倣家どもがそれである。人名を擧げて云へば、吉野作造、新渡戸稻造、姉崎正治、谷本富、桑木嚴翼、湯原元一、浮田和民、生田長江、阿部次

郎、本村久一、武者小路實篤並びにその附隨者諸氏の思想的傾向がそれだ。

斯くの如く國家からの解放は間違つてゐるが、國家を自分どもの爲めに利用してゐた官僚から解放されることは僕等の政治上に必要なことであつたし、また今日でもなほ必要である。さう云ふ意味で概括して僕等はまた固定思想から個性の解放と云ふことは云へよう。親の無理解から子の、主人の無慈悲から雇はれ人の、夫の横暴から妻の解放である。けれども、それも子や妻や雇はれ人の内的責任からまでの解放ではない。たとへば、子が自分の意志で或女と結婚しやうとするのを、親が無理に反對するのは相手にしないでもいい。その代り、子はその結婚の爲めに親に金銭上その他の迷惑をかけることに決心してゐなければならぬ。また妻が夫の不身持ちをおもしろくなくて自由になりたい場合、それには先づ自活の覺悟をして、いよく自活するやうになつても、もとの夫と同じやうなことをしないで獨身をとほすなり、或は無事に再婚をするなりしなければならぬ。自分のすることにはすべて自分の内部からその責任を感じてゐるべきだ。

今一つ、簡條として特に擧げて置きたいのは、理性から本能の解放である。今日の人はあまりに理性に壓迫されてゐる。分り易く云へば、理性の外形化した智識若しくは常識に煩はされ過ぎてゐる。そして本能の力を殆ど無視してゐる。本能を解放すれば、人間でも犬の如く十里、二十里さきのことでも分るやうにならうし、過去、現在、未來を通して直覺若しくは豫言をすることも大して六ヶしいこと

ではない。人間の本來活動は今日の人が考へてゐるよりもツと盲目的なもので、そこに不思議な本能が不思議でなく働らくのである。國家も本能と同様盲目的活動である。それを今日の目的論的な哲學や教育が悪い爲に壓迫してゐる。この壓迫がなければ、人間はもツと強烈にそして肉靈合致的に活動する。このことは僕が既に明治三十九年に著した『半獸主義』に於いて十分の確信を以つて主張してあるが、このころ、法學博士福田徳三氏はこれと似たことをその社會政策論に於いて應用してゐるのだ。

乃ち、今日の經濟行爲は一切『強く慾望化されてゐる』が、慾望化の結果は貨幣評價に終はつてゐる。僕等は是から解放されなければならぬ。それには、本來無目的、盲目的な衝動を本位にすべきだ、と。これをもツと廣く云へば、勞働をも理性の壓迫から解放して、もツと本能的建設の餘地を與へるべきだと云ふことになつて、僕の意見と一致するのだらう。

三 デモクラシの高調者ども

デモクラシと云ふことを直ちに共和政體の要求と見做して、言葉を聞いただけにでも戰慄するのは、或は時代後れの人かも知れない。けれども、デモクラシの結局は矢張り共和政體になるのだと云ふものがあつたらどうする？いや、さう明らかには云はないでも、さう行く考へに従つて物を云ひな

がら、たださし支へがあるから論法をその點だけに鈍らせてゐるものがあつたら、どうする？ 僕等は僕等の日本の生活を裏切られるのであるから、時代後れどころか、時代に先きんじて渠を追窮しなればならぬ。そして僕等がこの追窮のまことにしてゐるものうちに、さし當り、尾崎行雄氏と吉野作造氏とを數へることができる。

尾崎氏のデモクラシ論は三十年餘りも以前に英國流の知識で以つて固まつてしまつたところの考へであつて、時代後れもまた甚だしいものだ。渠は實際の政治界に自分の立ち場が段々あやしくなつて來たのを覺つて、何か知らん自分を盛り返す特別な機會を拵らへようと考へた。そして思ひ付いたのが最近に他の人々も多くし初めた普通選舉論であつたらしい。この論には、然し、渠として別に獨創の意見は見せてゐない。が、渠がその論據とするデモクラシは渠と時代を同じくする英國政治模倣者どもの一般に懷抱して來たところのそれである。さう云つても、今日の青年には何のことか分らないだらうが、つまり、英國流の國體若しくは政體をそっくり眞似ようとするのだ。乃ち、外形は共和政體ではないけれども、君主の大權を國會が奪つてしまふやうにして、成るべく君主を有名無實の位に置いて置かうとするのである。

渠はもと、明治二十三年に國會が開ける以前には、その實際に抱藏する意見から期待されて、その時の無反省だが政治に熱心であつた青年どもから、やがて共和黨を組織するだらうと思はれた人々の一人である。然し、國會が開けて新式の政治が實行されるやうになつて見ると、畏れ多くも君主の位を動かすやうなことはとてもできないと云ふことがあらゆる政治家にも一般世人にも實際的にはつきりと分つて來た。そしてその時から政治は抽象論から實際論に移つた。今日でもなほ君主や國家を手段としか見ないやうな言を吐くところのかの徳富蘇峯氏が、その所謂平民主義を帝國主義に乗り換へるやうになつたのも、それだけ政治を實際的に分つた所以であつた。そして我慢づよい尾崎氏一派に残つた抽象模倣的政治論は英國流にも君主を認めることによつて僅かに反逆論たることを免れて來た。渠が初めて文部大臣になつた時、かの有名な共和演説なるものをして思はず本意を漏らした爲めに、折角の大臣をやめなければならぬやうになつたことはあるが――。

その後、時代は進歩して政治はますます實際的になつたと共に、わが君主と國體とに對する時代の理解もますます深くなつた。たま／＼官僚なるものが君主の大權を擁し、人民に物を云はせないことはあつたが、君主それ身づからはその大權を古來傳統的にも全く人民の生活と發展との爲めに使用してゐることがうなづかれて來た。外國には君主の横暴があり、君位の有名無實があり、また無立君の例があつても、そんな外形はもはや眞似るに及ばなくなつてゐる。僕等は官僚とその思想とからの解放を必要としても、君主からのそれはあり得ない。して見ると、今日となつては、尾崎氏のやうな議論をするのが時代に後れてゐるばかりでなく、今日わが國に共和政體を夢想する學者や青年があらば、

それは少しも先覺的新らしみを有してゐるのではなく、却つて明治二十年代以前に立ち返へらうとしてゐるのである。

國體と政體とは相違があるから、前者に就いて何も觸れなければ後者のことではどんなことを云つてもかまはないと云ふ樂觀説がある。尾崎氏のもそのつもりで君主虚位論をそれとなく云ひまわして發表してゐるのだらう。が、吉野作造氏のデモクラシ論になると、今一步進んでをかしたものである。無論、尾崎氏と同様、渠は直接に國體には少しも觸れてゐない。けれども、普通選挙によれば議會の権力は無制限に擴張できるものと空想して、そこに渠のあらゆる斷定の根據が置かれてゐる。そしてその二大反對思想若しくは二大反對黨の交替執政を旨とするところに於いて、その一方の政黨が共和主義黨であつてもかまはないやうな論法だ。渠は現代にあり振れた抽象學者、机上の空論家であるらしいから、自分の説が實際に行はれた場合のおそろしい事實などには思ひ至らなからう。

よく考へても見給へ。甲なる反對黨が議會に多數を得て、乙なる政黨の組織してゐた時の政府に打つてかはることになつたとして、乙黨が立君主主義であるに對して甲黨が共和主義であつたら、次ぎの内閣は君を廢するであらう。そしてその甲黨を破つて再び乙黨が内閣を乗つ取る場合には、また君を立てるであらう。そんな交替政治が、馬鹿々々しい！實際にあらうと思はれるのか？國體が君主虚位

や共和主義を否定してゐる以上、政體も決して共和主義を容れることはできないのである。吉野氏はその政治論に於いて政治の本體に觸れてゐるのではなく、政治の運用に於けるデモクラシを主張するのだと云つて、自分の危険視されるのを避けてゐる。が、本體と運用とをさう無關係のやうに考へ去るのは、國體と政體とを全く無關係にして取り澄ましてゐるのと同じやうなものだ。かかる胡麻化しの考へかたが流行する所以を僕等は想像できないではない。わが國體や君主の大權を傳統に隨順して内閣することができない爲めに、若しくは内閣しようとも考へたことがないほど外國のことを直接に崇拜模倣してゐるが爲めに、國體や君主や大權をただ敬遠し、輕視し、若しくは殆ど無視してゐるのである。そしてそれをも平氣でゐられるほど渠の神經を麻痺せしめた毒藥は、耶蘇教國にあり振れた散漫な個人主義と個人的多數主義とである。

渠の思想的背景はまことに貧弱で舊式なものだ。耶蘇教的個人主義の如きはとつくの昔かのニイチエによつて打ち破られてゐる。その後になつては、英米の淺薄な常識派を除いての諸思想家どもには、一層有効に打破された。また多數主義でも、單に實質の乏しい多數では少數の實力には及ばないことが、學理の上からも政治の實際からも證明されて來た。然るに、そんな淺薄舊式な政論に隨喜するものが大學生や一般人の間に多いとすれば、今の大學や一般生活のまだまだ——外國の舊文明崇拜の爲めに却つて——後れてゐることを救かずにはゐられないではないか？吉野氏は福田博士と自分との相

違を論じ、福田氏がいつも何國のデモクラシと云つて形容辭つきに論ずるに反して、自分では形容辭なしに直接抽象的にデモクラシの眞意を云爲して來たと説明した。ところで、そのデモクラシは現在にも活存する歴史で傳統の力を忘れて勘定に入れない——それだから、一層抽象的に過ぎないところの——多數説を主張する普選選舉の議會萬能主義にとどまつてゐる。そしてそれが押しつめられると、根本に於いて君主の廢立を要求する共和主義になつてゐるのだ。

吉野氏のデモクラシ論が結局民主主義と譯せられただけではすまず、民主主義、共和主義であることは、僕が度々公けに指摘したところだ。が、いまだにその訂正や答辯を興へられてゐない。渠は浪人會から立ち會ひ演説を要求された時には、その點を曖昧に逃げて無事であつたさうだが、それから反省してゐないとすれば、世界的に新らしく覺めた僕等の日本主義に近いものまでをも『世界の趨勢に逆行する危険なる頑冥思想』などと云つて調子づいてゐるのは、ぬすびと猛々しいと云はなければならぬ。黎川會などと意張つてはゐるが、その連中のうちで、英米の思想や習慣にかぶれてゐることが確かに見える吉野氏や木村久一氏の如きは、そのデモクラシ論に於いて明らかに政治上の危険人物であるばかりでなく、世界の思想には一世紀も後れてゐるのだ。

それに比べると、同じ會の連中でも法學博士福田徳三氏は少しましであらう。學問に於いても、姉崎博士がホプスとグロウシアスとを生かじりにしたのを訂正してやつたり、吉野博士が第三階級と第

四階級との區別を知らないで社會論をやつてたのを指摘したりするだけの根氣若しくは素養がある。そして渠のデモクラシ論も可なり慎重の態度でやられてゐる。無條件の雷同などはしてゐない。歐米のデモクラシはこれを實際的に觀察するとすべて虚偽のそれだと云ふのだ。英米のデモクラシは第三階級擁護の爲めに行はれたのであつて、富豪資本家のデモクラシである。それに對して起つたのは第四階級、乃ち、労働者のデモクラシで露獨のがそれだ、と。いづれもこの語が眞に要求する各階級、乃ち國民全體のデモクラシではない。

一體、昔は政治で以つて天下は動いてゐた。が、今日では經濟思想が發達して、それが政治の半分以上を占領して來た。青年の事情で云つても、昔は野心あるものなら直ぐ政治に志したが、今日ではさう云ふ野心青年は實業でなければ文藝方面へ出て行く様になつて、政治その物などは大抵の人に疎んじられてゐた。たまたま普通選舉とデモクラシの論が盛んになつてから、今までさう政治に興味も素養もなかつた青年までが俄かにさう云ふ方にも熱を持ち出した。それが無條件に舊式で單純な外國思想にかぶれてる吉野氏等の政治論をまた無條件で受け容れるやうになつた所以だらう。が、『今日』は、『實に、福田氏の云ふ通り』もはや政治萬能の時代ではない。同時に、デモクラシの多數決などは外國に於いても當てにならぬものである。

現に、露獨のデモクラシは労働者ばかりの利益と便宜との爲め一時國家をまで解體したのであるか

ら、資本家その他のものは殺されたりおほ麻胡つきをしたりしなければならなかつた。また英米のデモクラシは資本家の左右するところであるから、英米資本家の事業を壓迫するやうになつた獨逸に對しては多くの人民を戦争にまで引き出して殺した。どんなデモクラシにでもその實質に對して有益な（そして少しも無益ではないところの）殺生や苦痛が伴ふのが事實だ。資本家的デモクラシが勢力を得れば労働者が犠牲になり、労働者的デモクラシが多數でとれば資本家が痛手を負ふ。この間に在つて無反省に普通選挙を實行しようとするものは單に最下級民、乃ち、労働者の勢力を確立させてやるに過ぎない。そんな労働者本位のデモクラシは數に於いては一番多數的だらうが、それによつて何かの立ち場を得ようとする野心家の外には、一般の有識者にも、また、ただぼん暗の多數のみでは眞の政治が行はれないことを知つてゐる特別な識者には勿論、甚だ詰らないものであらう。

そしてわが意氣込みの高い學生や青年のうちには、初めから労働者に落ちぶれて行かうと考へてる者などは恐らく一人もなからうと思はれる。して見ると、渠等が吉野氏などの論議をとほして而もその上に出て露國の過激派や獨逸のスパルタクス團に共鳴するのは、全く無意義のことではないか？そして徒らにデモクラシ、デモクラシと云ふ！それが本氣で政體と國體とをも改革したいと云ふのなら、わが國では消窮されれば首に價へするばかりではなく、その新らしがりでは却つて三四十年も時勢に後れた思想であることは前述の通りだ。渠等にして位置を得、金を得るに従つて、その落ち着く

ところはデモクラシにとどまつても資本家程度の、乃ち、第三階級のそれであらう。そのいづれにしても、諸君の徴兵忌避から來た戦争の否定や、官僚ぎらひから生おぼえた國體の變更や國家からの解放などは實現できず、また實現する必要がなく、また實現してはいけないのである。

そこで、諸君が徴兵忌避、官僚ぎらひ、外國崇拜などから調子づけられて賛同若しくは雷同したところのデモクラシをどうかた付けるかが問題にならう。或人はこの語が民本主義とも譯されたのを利用して、わが國の政治も昔から民本主義であつたと説明した。文學博士上杉謙吉氏もその一人である。君は民を本とすと云ふことがあるからだ。かかる迎合的解釋に安んじてゐられればそれでもかまふまいが、福田氏の如きは現今いづれの國に在るデモクラシも皆虚偽であるから、この好時期に當つてわが國に於いて眞正のそれを立てよと云ふ。そして眞正デモクラシとは第一、第二、第三、並びに第四階級のすべてに『政治上の權力を公平に分配して與へる』、乃ち、全國民クラシだ。

福田氏はなか／＼多辯であるけれども、その全國民クラシに就いてはまだそれだけの概念しか方々の雑誌や演壇に於いて示めてゐない。つまり、それ以上の詳しいことにはまだ云ひ及んでゐない。して見ると、それだけでは結局上杉氏の民本主義とその内容に於いては大して違ひがなくなるのではなからうか？（日本を古來の非侵略國だからと渠が云ふことはあたまわしにして。）僕がここに解釋を加へて見れば、先づ普通選挙は許してやるとして、それが爲めに第四階級にばかり便利を與へるのは

不公平だから、第三階級にもそれに対するだけの何かの埋め合せをしてやる。それと同じやうにまた第二、第一階級にもしてやる。同時にまた上御一人がさう云ふ権利分配の爲めにあやうくなつては——これも不公平で——いけないから、それだけの補充はする。これでは乃ち君主が民を本として融通無碍に政治を行ふと云ふわが國體の理想と殆ど全く違はないではないか？

これまでのとただ僅かに違ふところは官僚横暴の絶滅と普通選挙の實行とに在る。そしてこの新しい違ひは僕等も悪いことではないと思ふ。が、ただこれだけの違ひを以つてわが國の行くべき道も民本主義だと迎合したり、これが眞正のデモクラシだと頑張つたりするに及ぶまい。つまり、實際には別に新しい言葉をてらふまでもなく、これが乃ち日本主義であるのだから。それに、デモクラシはもと民本主義よりも民主主義と譯して置くべきものだ。わが國の政治的生活は君主民本主義若しくは君民同治主義で行つてゐるのである。そしてそれを吉野氏は危険にも議會萬能説の一角から裏切つて、福田氏の方は無論のことにも賛成してゐるわけになつてゐるのだ。

ところで、渠の日本が非侵略國であつたと云ふ餘ほど控へ目の解釋のことだが、これは渠が私かに露獨の社會民主黨に迎合しようとしてゐる爲めに過ぎない。わが國は僕の解釋するところでは征服愛的福音を宣傳する爲めに古來い意味の侵略的精神を發揮して來た。そして之が僕等の國家的生存をしてゐる意義である。たとへデモクラシをよく消化し得てもこの精神は變はらないであらう。

四 社會主義の處置

初めのうちは詳しい通信がなかつたので何が何やあよくは誰れにも分らなかつたが、段々時を経過するに従つて分つて來たところによると、露國の過激派なるものは別に特別な過激主義であつたので、何でもなく、ただ一般の社會主義の理想を實際に斷行して見た多數黨に過ぎなかつた。

社會主義の缺點が人間の生活を部分的、乃ち、物質的にばかり解釋してゐるに在ることは、既に多くの識者らの指摘したところである。たとへば「労働に對する慰安」と云へば直ちにただ衣食住のことに持つて行き、共有と云へばプラトン以來の考へで直ぐ婦人の共有をまで云ふ。そしてこの婦人共有のことなども今の露國では行はれてゐるのだ。社會主義者等には——労働に従事してゐるものは勿論、それを指導するものにも大抵——人生的趣味と内的生命とを與へる祖國の觀念がない。あるものはただ無味淡泊な部分的現實ばかりだ。云ひ換へれば、肉靈合致的な詩の要素に遠ざかり過ぎてゐる。現代には詩のないものが多いが、渠等ほどその點に貧弱なものはないからう。そんな状態で以つて複雑な人間生活を規定しようとするから、まことに淺薄な人爲的規定しかできないのであらう。

社會主義者等の思想を分析して見ると、あらまし、左のやうな箇條がある、——

一、國家の解體

二、戦争の否定

三、平等の分配

四、相互扶助

五、共産主義

どうせその半分以上は空想であつたので、この世界的戦争にぶつかつて實際的に目がさめたことが多いのは當り前である。渠等は先づ國家からの解放を主張してゐる。その理論としては國家が人間の社會生活を人爲的に邪魔をすると云ふ。一國の人類ではなく、世界の人類となつて、國と云ふ障壁なく労働を共にして生活したいのだ。さう云ふ渠等は、前述の通り、國家に保證されてこそ無國家の生活よりも安固になる所以を知らない。博愛や正義にも民族思想的相違と制限とがあるのを知らない爲めにだ。それから、今一つ云つて置かねばならぬことには、民族の發展的歴史とそれによつてできた國家とを内観すれば、その特色や制限は決してその國の人民に外部から押し付けられたものではない。人民が自分自身で創造してゐるのである。この場合、それを内観するのが極度の自由解放である。

次に、戦争のことだが、戦争は必らずしも軍閥や資本家ばかりがやらせるものとはきまつてゐない。一たび國家を肯定しなければならぬ以上、その存立の爲めにする戦争はその國に屬する人民の生活意志である。今回の戦争を初めたのは獨逸の軍閥と官僚かも知れない。が、その初めには獨逸の社

會主義者らが佛蘭西や英國の社會主義者らとの協調を破つて敵味方に別れたのも、矢ツ張り、それが爲めではないか？それから、露國の社會主義者らは思ひ通り國家を解體して大戰參加を中止したが、純然たる戦争否定の實行は今でもできてゐないではないか？それは他に戦争を仕向ける國家があるからだと云ふ反駁が無反省者どもからは出ないでもなからうが、國際聯盟の如きは國家あつての仕事で、事實はすべての國家が解體するやうなことがあらう筈もなく、一方にはまた露國人その物が國家の再建しようともがいてゐる證據である。ましてわが國には、征服愛の宗教的精神が顯著であるに於いてをや？

次に、平等の分配だが、これも根本は空想ではないか？一步を譲つて成るべく平等にと云ふ精神だとしても、人間とその働らきとは一様でない。早い話が賢愚強弱がある。若し賢者強者にはそれ相當に又愚者弱者にはそれ相應にと云ふ分配なら、社會主義を待つまでもなく行はれてゐることだ。それをしも孰れも人間だから無區別にと云ふのなら、競争も奮勵もなくなつて、その社會は退歩するばかりであらう。士官も兵卒も同等だと云ふが如き今の露國の状態などは長く續くとは思へない。次に、相互扶助と共産主義も無國家や平等分配を考へに入れてのそれなら問題にもならぬのである。

けれども、社會主義の直接問題なる労働と云ふものに對しては、國家肯定者らも知らない風をしてゐることはできないのである。労働者の勢力はわが國に於いてもますます盛んになるであらう。今で

はまだその九分九厘までは全く無學なものだらうが、他日は多少學問あるものも——報酬のいい爲めに——思ひ切つて飛び込んで行くのがふえるだらう。が、渠等があながち危険な社会民主主義を持つて行くとはきまつてゐない。そしてまた労働社会に對して必らずしもこの同じ主義を鼓吹しなければならぬものでもない。渠等はその日の衣食住に困つてるとは云ひながら、その要求するところは決して部分的、物質的ばかりではない。同時に意氣もあり、感激もある。そこへ——まだ外國の模倣があまり這入り込まないうちに——皆が日本主義の新政治や労働政策を工風して聽かせて見給へ。渠等はそれで満足してゐるだらう。

それを然し官僚や資本家から云ひ出すから温情主義などと云ふ冷かしやら忿激やらを生ぜしめるのだが、もつと労働社会若しくは社会政策研究事業に近い人々が先づ外國標準や外國模倣を離れて、虚心平氣に日本的な考へかたをしてゐて見給へ。きつと福田氏などのよりも緻密で、もつといいことが浮んで来て、それがまた労働者どもに向つて實際のいい指導になるだらう。そして八時間労働制や労働組合を許すやうにし、資本家と労働者との間には成るべく平等に近い分配もさせるやうにするし、若し必要があれば、米や砂糖までも——共産的とまでは行かないでも——國有にして、一定の値段で行き渡るやうにしてもいいのだ。

福田氏も尾崎氏と同様に所謂『世界の趨勢』にあつて過ぎてるところがある様だ。大勢の向ふとこ

ろ『國體擁護、民心統一、温情主義、何だの彼だの暗闇に牛を引き出す様な事を言つてゐるのは笑止の極み』だと云つた。民心統一や温情主義のことはここでは捨てて置くとして——デモクラシ若しくは社会主義に對して先づ以つて忘れてはならぬ國體擁護が何で暗やみに牛だ？吉野氏の隠微な民主主義主張に比べてはこれはまた餘りに調子に乗り過ぎたではないか？福田氏にはその申しわけがないではない。渠は僕の主幹する雑誌『日本主義』（七月號）に於いてもたとへ『社会主義の思想を入れたとて、その入れる人は日本人である』から、『外來の思想の爲めにその根柢が揺くと云ふことは背理であると信ずる』と云つた。が、そんな曖昧にして固定した申しわけでは困るのである。

僕等が日本人には日本的な思想があると云ふのは、自覺した日本人を見てのことである。眠つてゐても、努力しないでも、日本人には日本の思想が固定してゐると云ふのではない。無批判、無反省、無消化で外來思想を取り入れたら、如何に日本人でも日本的な根柢は動くより仕方ない。その實例は目の前にあらう。尾崎行雄氏は英國の而も舊式政治論の爲めに、そして吉野作造氏は耶蘇教的個人主義の爲めに、そしてまた福田徳三氏はラセルやその他の爲めに、現に先づ模倣若しくは受けつぎに走つて、日本人たる根柢がぐら付いてゐる。

僕は社会主義には詩がないと云つたが、わが國の社会主義者や社会政策の研究者どもにも藝術的教養若しくは素質がないのを一番缺點として遺憾に思ふ。詩的、藝術的素質がない爲めにその人の生命

たるべき國家の傳統や民族思想を疎んじて、デモクラシや勞働問題をも最も淺薄に輕斷して満足してゐるのであらう。そんなことでは世界の名著萬卷を讀了しても、生命ある言葉はただ一句だつて出て來る見込みがない。

穿き違へた自由

生田長江氏の自由思想家論(文章世界四月號)に於ける所謂「自由」の解釋は、わが國今日の警察官若しくは檢閲掛りの考へてる自由と大して違ひはないやうだ。ただその違ひと云へば、一方はそれに極力賛成し、一方はまた努めて反對防害してゐるだけだ。

自由思想家とは一般に思想上の既成系統若しくは傳來の思想的典據に従はないで説を立てる思想家である。定義はそれで分つてゐるではないか？系統と典據とを既成的に採用しなければ、結局、自己の生活、思想若しくは個性に據るのは必然のことだ。それにわざ／＼蛇足を加へて『普通の人間性』と『特殊の個性』との二ヶ條を云爲したところに、生田氏のまだ不理解的點が残つてゐる。

『何よりも先づ、特殊の個性をもつた一個人』とか、『また普通の人間性をもつた人』とか云ふ物が、御本人を初めとして僕等の間に根本から民族を離れ、國家を離れて存在してゐようか？若しゐたらずれば、それは出來そこなひの個人若しくは人間であらう。外國で云へば、一世紀以上も前の佛蘭西草

命時代の空虚な自由觀念を套襲して來た社會主義者、またわが國で云へば、明治二十年前後までの板垣流の自由思想を知らず識らず受け續いでる者の如きであらう。それ等は自由思想家どころか、今ごろよく／＼の非自由思想家である。

そして僕は生田氏が今更ら事珍らしげにそんな因襲的な考へを以つて——而も尤もらしく——自由思想家に關する議論をしたのに驚かないではゐられない。警視廳や内務省の人々はつまり、さう云ふ穿き違へた自由を熱心に矯正する爲めに、度を外して當り前の自由をも防害するやうなことになるのではあるまいかと思はれる。僕等の考へでは、個人若しくは人間として、内外に對する民族生活の權威と國家の制限力とを身に體得すればするほど、自己の特殊性若しくは普遍性が一層深刻になり、一層自由になるのである。これは決して他物に束縛されるのではなく、自己を最も自然に解放するので。生田氏の言を借れば、『思想家自らの内に思想家自らを統治し支配する。』

これが僕等の自由思想家としても最も深刻な傾向であるを忘れてはならぬ。それ以外に『より根本的に、より徹底的に考案する』こと若しくは人があると思ふのは空想だ。そして氏が僕等をそんな空想から鎖國的とか保守的とか呼ぶのは、もう問題とするに足らぬ。(大正五年五月)

許される自由

一體、今の新らしがり傾向ある學者や青年は、わが國の憲法にも自由が保證してあると云ふことをただ鵜呑みにして、絶對無制限の自由が許されてゐるかのやうに考へてゐるから間違つてゐるのである。

英國の如きでは、過激派思想の侵入には困るが、憲法上に言論上の自由が許してあるのでどうすることもできないでゐるさうだ。が、國家の生存がそんな固定的な憲法に捉はれてゐる國こそ却つてあはれむべきではないか？かの米國を見よ。最も自由だと云はれてゐる國がらでありながら、今回は有害と見た過激派五千名を國外に追放したではないか？そしてこれをしも思想の自由に對する束縛だと云へば、國家の自殺を賭しての自由要求となるのである。米國でさへそんな絶對自由は許して置けないことを證明したのだ。

わが國の憲法はその第二十八條に於いて信教の自由を、そして第二十九條に於いて言論その他の自由を保證してある。が、決して絶對的なものではない。前者には『安寧秩序を妨げず及び臣民たるの義務に背かざる限りに於いて』と規定してある。だから、ここに若しトルストイの無國家、無政府的宗教の如きが實現の端を發するとすれば、僕等をして帝國臣民たるの義務にも背かしめ、僕等の安寧秩序をも害するものであるから、直ちにそれ相應の刑罰を加へていいのである。また後者には、『法律の範圍内に於いて』との規定がある。従つて、法律に反してまでの言論自由はさしとめられてゐる。

で、血氣や人氣取りにはやつて、徒らに絶對の自由を要求したりすることは無反省の爲めに國家にむほんを起しつゝあるのであることを知らないわけである。

或は云ふだらう、絶對の自由を制限する秩序や法律は國家民人の爲めにならぬから早く廢棄してしまへど。然しその法律的、秩序的制限が内部的にも僕らの國家民人を成立させる條件であつたら、どうする？乃ち、それが國家的個人（僕の國家人生的哲學では斯う云ふ用語が云へる）の束縛ではなく、寧ろその個人の内容である。わが憲法にも規定の手續きによつて改訂できる部分はある。が、この内容たる條件若しくは制限は部分的なものではなく、全部的な存在力を備へてゐる。つまり、それは憲法ができて初めて分つたことではなく、憲法の依つて以つて發生したところの日本の國家生活に初めから具現してゐるのである。

僕らは日本人としての外的のみならず門的な生活に於いて、國家を離れては僕らの個人も存立しない。若し國家を離れても存立する個人若しくは人間を豫想するなら、それは耶蘇教國に發生した物質的個人主義（反對に靈的に轉じても矢張り他端の物質的だ）のそれである。そしてクロボトキンやトルストイの執着したのはこの物質的個人思想だ。これには初めから無國家的傾向が伴つてゐて、そこから無政府主義も出た。斯う云ふ思想や傾向に打撃を與へるのは、ひとり爲政者の仕事ばかりではなく、日本人としての國家や個人を主張する僕等の仕事でもある。そしてこれは外國人的に物を考へるもの

には自由の束縛になるだらうが、日本人的思想の發展には決して不自由を來たすことではない。つまり日本人は日本の反省と批判とを以つて無政府主義に臨んでれば、その研究は無事であるが、この批判なしの研究は排斥と刑罰とを受けるのが當然である。

以上の見地から今回の森戸事件を見給へ。森戸辰男氏には少しも日本人的反省が伴つてゐない。渠は無反省な耶蘇教徒たることから外國人の如く、乃ち、些かも日本の獨創なしにクロボトキンの研究を發表したのだ。クロボトキンその人には獨創があつたらう。然し、それは露國の如き、國家生活には最も緩慢な、そしてつひに過激派が飛び出したやうな國がらに求められる獨創である。これに森戸氏の研究は無批判で賛同したに過ぎぬ、そして渠は平氣で、讀賣新聞記者には「人間として云ふべきことを云つた」のだと述べた。然し、この人間とは物質的個人主義の個人である。嚴密に云へば、わが國の國家存立を危うくする思想に立脚した個人だ。渠の知人どもは頻りに渠の立派な人物たることを讚美保證しつつあるが、それも物質的個人主義に立脚してゐる人々の保證であるから、僕等から見ると、外國人が外國人を保證してゐるやうなもので、わが國に取つては何の保證にもならぬのである。たとへば、米國の現大統領ウエルソンがどんなにえらからうが、どんなに立派な人物であらうが、日本の立脚地に立つてゐないのだから、その云ふことは、僕等には却つて、わが國の片田舎に於いて僕等の『日本主義』を購讀してゐる一小學教員の言にも及ばないことが多い。たとへば、國家と無關

係にも生活できる紳士は少くとも緊張した人格ではない。それだけ立派さの程度が引き下げられねばならぬ。

森戸氏は、大正日々新聞一月十六日の記事によると、『あの論文は人間の新しいことを書いたに過ぎぬ』とも云つた。然し、僕等の人間としては決して新しいものではない。過激派や社會主義者の世界には或は新らしからうが、根本は随分ふい物質的個人主義であるではないか？わが國の世界に對する使命は、かかる舊文化思想を打破して、若し個人主義と云はねばならぬなら、物質的部分的ではなく、肉靈合致的、全部綜合的個人主義、乃ち、國家主義的個人主義の生活を示めし教へることに在るのである。この方が寧ろ新人たるの仕事である。これを知らない無獨創の人間はそれだけ劣等であつて、誇るべきよりも耻づべきである。同時に、僕らの國家生活を少くとも妨害してゐるのであるから、官吏としては勿論、一私人としても、最も謙遜な反省をして見るべきであらう。この反省がないのだから、決して日本人としてのまじめがない人物であらう。

それから、今少し問題を狭めて、自由と云ふことを思想上の自由と限り、たとへば、米國が過激派を追放したのなどと過激派の思想が這入るのを許さないわけではなく、その思想の宣傳と實行とを防ぐ爲めであつたとする。斯う云ふことを呑氣にも區別して得意がつた浮田博士の如きは、また三宅博士の如きも、わざ／＼孟子や老子の例を擧げて、これも危険性があるのにわが國人は昔から讀ませら

れてるではないかと云つた。が、孟子や老子が這入つた時代はそれを直ちに實行の氣ぶんで受ける時代ではなく、よくそれを咀嚼する餘地があつた。遲鈍でもあつたのだらう。そして今日では十分に批判されてるから危険の域を脱してゐるのだ。然し、今日の如く過敏になつた時代に於いてたとへ昔の孟子や老子からでも若し批判なしに共利思想の無政府主義を引き出した人がありとすれば、その者はきつと僕らの制裁を受けねばならぬ。まして新らしく紹介される外國人のそんな思想や主義に於いてをやだ。

今、簡単に考へて、思想の發表は言論であり、思想の實行は信教である。そしてこの兩者が決して絶対の自由などを許されてゐないことは既に論じた通りだ。ところが、ここに別に研究なる物が直ちに言論でもなく、また信教でもなしに考へられてからまつて來た。然し、實行を豫想しない研究は無意義であり。若しまたそれを有意義にするには、自國人的批判が伴はなければならぬとすればそこにまた信教的覺悟が生ずると共に、憲法上、自然必須の自由制限を受けねばならぬ。森戸氏にはこの素直な自覺がなかつたことは、危険性に富む物質的個人主義を相變らず誇りとしてゐるのである。だらう（渠はその問題になつた研究と殆ど同時に他の場所に於いて耶蘇の人物に關する物質個人主義的紹介をもした。）

次に、單に無批判、無獨創の研究などは、苟くも大學の教師としてはあるべき筈のものではない

のを、現在の諸大學にはさうした教師がさらにあるから、僕等は馬鹿にするのだが、そんな無意義な研究でも、一たび教壇なり雑誌なりで發表すれば、もう、言論の範圍である。ましてこの範圍に這入つて、森戸氏は少からず無政府主義に同情若くは贊同の意までも示めた。これを大學の助教授だからと云つて許して置けるものではない。河上博士らの如きは、この問題をすつと狭めて、大學内に於ける研究だとし、大學に研究の絶対自由がなければ大學の目的たる「眞理に到達の道がない」と云つた（東京日々一月二十八日参照）渠は恐らく絶海のぬし無き島にでもありさうな無發表大學をでも夢想してゐるのだらう。發表が伴つては、もう、社會的の性質を帯びる。そしてその社會が皇室中心である以上、無政府主義、國家無視的傾向は内部的、實際的眞理ではない。そしてこれ以外に眞理と云はれるものがあらば空想に過ぎぬ。

今回の干渉をガリレオのコペルニコス地動説宣傳に對する羅馬法皇の壓迫にたとへてゐるものが二三名あつたが、この引例は二つの場合に於ける不當を證明されねばならぬ。その一つの場合には、地動説が採用されてもそれは天動説の天文學と宗教上の迷信とを破つただけであつて、人間生活の根本までは變化させない程度の眞理であつた。が、若しクロボトキンやトルストイの説を僕らの眞理とすることになると、僕らの生活その物が滅ぼされて、僕らは白人に征服された印度人や征服されかけてた支那人のやうになつてしまふのである。乃ち、無國家、無祖國の人類としても社會勞動問題的共通

點に於いて共存できると教へる傾向は、つまり、物質的個人主義に墮落してゐるからだ。それから、今一つの場合とは、無國家無政府主義のクロボトキン等を紹介若しくは推賞するものを以つてガリレオに譬へるとすれば、これに對する羅馬法皇の格は何ものだらう？官僚や政黨の繃縫的勢力だとすれば、別に僕らに絶對のものではないから、僕らもそれに對して反抗なり背反なりの自由を有する。けれども、それが官僚や政黨に信任された上御一人の大權を云ふのであるとすれば、言語道斷の不當譬喩と云はねばならぬ。天皇はただわが憲法の外面に於ける外部からの強制統轄者ではなく、僕らの國家哲學並びに國家的宗教觀念から云へばまた、僕らの内部生活を組織的に統一する内存力である。従つて、それなくては僕ら日本人の生存ができぬほど絶對の物である。食物がなければ僕らが生きてゐられないと同じことだ。これを生活には贅澤な法皇や官僚と同一視しては不敬であると同時に、日本人としての人格破滅であることを知るべきだ。そして無國家主義を壓迫するのは、たとへ官僚的政府でなくとも行ふべきことであるから、官僚的であると無いとは問ふに及ばない。

吉野博士の如きは、また、如何に危険な思想にもいい所がないでもない云つて、クロボトキンの無政府主義にも建設的ないい方面があるから、それを見て行けばかまはないとの説を發表した。(東京朝日に於いて)けれども、それが如何に建設的であつても、あたまから國家無視の立ち場に在つての建設は、國家生活には矢ツ張り破壊的であることを渠は忘れてゐる。いや、渠も寧ろクロボトキンの思想にかぶれて、國家の理想は無強制、無國家になることだと京都同志社に於ける講演で發表した。そして、内存的國家、内部的制限が僕らの現實生活を建設してゐることを忘れた。そんな人物が森戸氏を辯護するのは、めくらが目くらの手引きをするやうなものだ。

今回の事件が爲政者の爲めに干渉されたので、大學の權威、學問の獨立を害せられたと憤慨してゐるものが多いやうだが、それは東京帝大經濟學部長金井博士が云つた通り、『國家の存立を危うくし、又は法令を越えても絶對に大學は自由なれとは云ふべからず』が本當のことである。そして専門の違ふ理學博士遠藤吉三郎氏のやうな人が却つてクロボトキンの生物學的社會論の根本誤謬を指摘した。姉崎、桑木、吉野、河上其他の諸博士のやうな、危険な無獨創者どもを多く出し、またそれを教授にしてゐる諸大學は危険思想の巢窟である。先づ、これに代々の内閣が手を下ださなかつたのがよくなかつたのだ。僕等から見れば、今の内閣にしてもツと確信があらば、森戸氏の事件をしほにして、この場合もツとツツかり萬事を追窮すべきであらう。今日までトルストイの危険などは孟子や孔子のやうに看過して來て、今、クロボトキンばかりを事新らしく壓迫すると云ふ攻撃も見えたが、今の政府が看過をよくないと思ひ付いたのは先代の政府よりもいいことであれ、決してさきの落ち度若しくはよわ腰を繰り返してゐるには及ばぬ。大學が爲政者の追窮的干渉を避けたいなら、大學自身もツと獨創的に日本の大學たることに覺醒すべきである。外國人の云ふことを受け賣りしなければならぬやう

に思つてゐるから、今回のやうな馬鹿けたことが起るのだ。

河津博士の如きは、大正日々新聞によると『關係上被告の地位に立つてゐ』ながら『全く意外のこと』だと云つてゐる。無自覺にも程があらう。河上(肇)博士は、また、今回のことで『少くとも學者の態度が臆病になつて來る』と云つたが、そんな臆病を豫想するには僕等の云ふ無獨創がつき纏つてゐるからであらう。學問の實際要求なる日本の獨創を發揮することが出来る學者なら、これによつてますます大膽になつて行けるのである。今回のことにも相變らずお坐なりの曖昧を云つた浮田博士の如きこれも耶蘇教的危險思想家を有する早稻田大學からも、また、安部磯雄氏のやうな人が出て同じやうな物云ひをしてゐる。乃ち、大正日日新聞一月十六日の記事によると、トライチケがカイザルの外交上の失策を年報に書いた爲め、年報の編纂長たることはやめられたが、大學教授の地位を動かすことはカイザルでもできなかつたのにと。安部氏は一時の政策問題に關することと國家存立の根本問題とを一緒にできると思つてゐるのか？トライチケはこの場合外交に關する外交問題的處分を受けたのだ。如何に大學の教授だとして、僕等の國家生活を危うくするやうなことを云ふまでの自由や獨立は與へられてゐないのである。

聽くところによると、早稻田の近傍に於いても或新らしがつた會名を附して大學の教授や學生の一部が寄り合ふところがあつて、自分らは今まで『君が代』を歌はせられて來たのをさへ今となつては

悔し涙がこぼれるほど残念で堪らない。いッそのこと、米國の屬國になつた方が日本の國家(こんな場合にもこの語を使つて)もらくだらう、などと云ふ感想を流行させてるさうだ。無反省の極で、もう斯うなると、日本人の新舊思想のけじめではなく、馬鹿々々しくも日本人たるかたらざるかの問題である。そして日本人たることが舊く、たらざることが新らしいのでは、一般思想の問題としても、また大學内の研究問題としても、懲罰以外にはお話にならぬことではないか？最高教育に關係ある諸大學の教授や學生迄が斯う無反省と輕浮とでただ過敏になつてゐる時代に、孟子や孔子の思想が初めて物珍らしく贊同的介绍されたとして見給へ。今回のクロボトキンのと同様に危險として取り扱はねばならぬのである。民衆を指導すべき先覺の地位にあるものが過敏になつて、却つて民衆に指導されるのでは實にお話にならぬ。

最後に、森戸氏に對して最初の反對運動を起した興國同志會の爲めに僕の觀たところを述べて置きたい。あの彈劾をしたのは同會中一二の會員であつて、その手続きにも未熟だつたとしても、その彈劾の根本意義は恐らく會員全體の意志にも反してはゐなかつたらう。僕もその機關雜誌には多少相談を受けてゐる一人だが、諸新聞がわざ／＼臆測して事實らしく報告したやうに上杉博士が同會を左右してゐるとは聽かぬ。同博士若しくはその勢力も廣い意味で云へば國家主義だと云ふに於いて方向は同じだから全然排斥してはゐないが、多くは上杉博士の固定的國家主義には反對しつつも、なほ且新らし

い日本主義の見地から、現今の無獨創的學風や青年的輕浮の流行やに對して奮起したものである。これを新聞や世間がただ舊式な頑迷不靈の徒と見做すのは間違ひである。僕等から云へば、物質的個人主義者ほど却つて不靈な徒はないのだ。

ついでに、今一つ云ひ添へることができらば、日本的獨創を要求する僕らの日本主義は必らずしも上杉氏のやうな固定觀を國家生活に對して持つてゐるのではない。渠のは物質的個人主義に對する物質的國家主義たるに過ぎない。僕等のは、然し個人主義的國家主義であつて、個人を肉靈合致の全部的、全人的生活の上に見て、國家その物と充實させたところに、世界の他に無いところの新思想と新特色とを示めしてゐるのである。そしてこれを以つて一般世界の舊思想を征服して行くつもりである。そしてそれには世界に對して日本中心、従つて皇室中心となつてゐるから、傾向としては上杉氏の如き舊思想をも吸收できるのである。上杉氏のは固定觀ではあるが、國家を無視してはゐない。然しクロボトキンやトルストイの思想は根本から國家無視に於いて成りたつてゐるのである。一般の個人主義、乃ち、物質的個人主義がそれだ。そしてこれを生んだのは耶蘇教であるから、西洋の耶蘇教諸國ではその主義は當り前のやうに思はれてゐるが、耶蘇教以外そして佛敎や儒敎以外にも、思想の系統が確立して來たわが國民には、當り前どころではなく、危険の甚だしいものになつてゐるのだ。この點をよく嚙み分けて、僕等の日本主義に就いて貰ひたいものである。(大正九年二月七日)

一〇 人道主義と國際主義

翻譯的人道主義の不成立

一般通俗の人には理想と云ふことは、これが如何に淺薄なことであつてもさうとは分らないので、ありがたいことになつてゐる。そして理想主義など云へば、わけもなくいいものだと思はれる。人道主義にもこれまでさうしたあとがあり、またこれからもさうした恐れがある。で、今ここに、先づ、わが國語で『人道』若しくは『人の道』と云ふ言葉にわが國人が根本的に含ませるに相違ないところの諸觀念を分析して置きたい。

これが若し外國語の翻譯である場合は、かの佛蘭西革命以來の自由、平等並に正義を意味してゐる。それに今では博愛と平和と云ふ觀念がまた加はつてゐる。そして今のわが國人もかかる諸觀念を人道中に考へ込まないではゐないのである。が、その人が儒敎家ならばこれを五倫五常の道へ持つて行くだらうし、佛敎家ならば慈悲の一心に取りまゝめてしまふだらう。そして執れにしても、渠等最後の應用的發表は忠君と愛國となつてしまふにきまつてゐる。ところで、數量的獨斷の上に立つ個人主義や、人類が國家を離れて生存出來ると想像する世界主義やと共に行く人道主義には、——忠孝

の問題はここに預りとして——愛國と云ふやうな觀念は全く這入つてゐない。これをしも新思想とうぬぼれてるものがあらば、その人の頭腦は外國模倣的でないまでも、僕等から見て既に舊世界なる歐洲か米國かの天地に住してゐるのである。僕等の國には、この國では最も舊いが、世界的には最も新しく解釋の出来る愛國的人道主義が存してゐる。

名稱は必らずしもさう呼ぶに及ばない。僕の所謂『日本主義』でいいのだ。また、佐藤信淵が明治維新前に唱道した經濟政策（僕はこれを日本主義第一巻で三號に渡つて論じ、渠の『征服的宗教』と解釋した）でいいのだ。信淵のあらゆる著書に出た農政經濟論は直ちに渠の宗教であつて——日本が劍と惠みとを以つて世界を征服するのは、乃ち、あらゆる人類を救済するのであることになつてゐる。乃ち、われにまつるふものは同化し、まつるはぬものは平定して、これを治めて行くのが人道であり福音であるのだ。無論そこには、僕等の民族的固有性として發達した現世的『人間神』の信念を正しいものとする確信が伴つてゐる。この確信を以つてすれば、現今の翻譯的人道主義の矛盾を指摘し、それが成立しない所以を説くのは、まことに容易なことである。

翻譯的人道主義の最大觀念を自由、平等、博愛、正義並に平和とすることは、誰れでも異議ないところであらう。哲學や宗教をその逃げ込み易い空想界若しくは抽象界に立て籠らせて、そこから樂に物を云つてゐる理想家どもには、實に、その氣に向いたものなら何でも無衝突に是認出来るのだから、

ひとりこの五大觀念をばかりには限らない。かの涅槃論者の如く、とどの詰りは、乃ち、ゼロを理想としてゐるのであるから、どんなことでも云へる。ゼロの中には無限の數を想像することが出来るが、單に想像に過ぎぬ。従つて、生死もなく苦樂もなく、敵も味方もない。そんなのん氣な境涯に自由や平和を持ち込んでも何の役にも立つまい。現實界の人道ではなく、寧ろ人外道である。

ところが、翻譯的人道主義者どもはあべこべに、僕等の排斥する人外道を人道と見做し、僕等の人道を渠等の畜生道若しくは魔道とする。そして戦争などを惡魔の仕わざのやうに考へるのだ。が、かかる論理の顛倒はどこから來るか云ふに、渠等が戦争と暴力と弱肉強食とを直下に内觀洞察することが出来ないで、うわツつらで直ちにこれを否定するからだ。然しこの否定が渠等自身の所謂人道主義と實際に於いて併立出来るかどうか？乃ち、

(一) 自由——これを獲得するには責任が伴はなければならぬ。分り易い例を以つて云へば、男女いづれでも一青年があつて、無理解な親に對して自分の學業若しくは戀愛に關する自由な行動を取るとする。取るのはかまはないが、一たびさうした以上は、その行動から來たる困難や損害を自分で處分し、親へ迷惑を持つて行かぬだけの覺悟を要する。自由は無制限のものではない。そしてこの場合の制限は獨斷的な個人觀や空疎な世界主義では正當に深く解釋出来ないものである。

(二) 平等——苟くもこれを主張するには先づ實力がなければならぬ。昔の町人が武士の跳梁に對

して平均を求めたのは、金銭と俠氣とがあつたからである。今の被治者が治者に向つて同等を得ようとするのは、租税を納めてゐるからだ。歐米の婦人參政權論者どもの要求は、婦人も男子と同様に別方面で社會の利害をしようつてゐる爲めだ。然しこれはすべて一般に押し延べた形としての固定理想であつてはならぬ。形だけの平等は何でもない。平均を得ないものがそれを得るまでもその第一條件は實力であるが、盛んな實力は平均を得ても満足せず、それ以上に抜け出るから、さきに平均水準に在つたものがまた追ひ抜いたものを追つて發達する。貧富の固定平均を理想とする學說や運動も、才能や活動力に相違ある人間界にはこの理由で成り立たない。斯う考へて見給へ、もう實力の競争であつて、平均とか平等とか云ふのは消極的な手段や、進歩を妨げる奸策やに過ぎぬ。そして若し渠等も成るほど、なア、となれば渠等の人道主義を棄却したところにならう。だから、僕等の據つて以つて立つ實力の競争をさし向けるのは、渠等平等論者どもの最も恐れるところではないか？

(三) 博愛——これの最も適當な發想は『おのれの如く隣りを愛せよ』である。若し人間がいつも無事で又有福なら、この發想ほど結構なことにはなからう。が、無事や有福を感じるのは人間としての樂隱居で、肝腎な活動の停止期に入つたことを意味する。活動家は——その活動力が充實してゐればゐるほど——他人を愛する餘地もないまでにおのれの事に努力する。妻子を愛することだつても、ほんの、その日の勞苦を身づから慰めることにしか當らない。そしてこれと同じやうな心持ちで他人を

取り扱ふのなら、若しくは、おのれの活動の材料になるやうに他人を愛するのなら、乃ち、おのれの爲めであつて、博愛の本旨ではない。これをわき／＼偽善的に博愛など呼ぶだけが不正直でもあり、無駄でもある。一般の慈善事業なども、それをやつてる人から見ればその人自身の生活で、——否、眞面目であればあるほど、なほ更らさうで、——これに大切な一生を捧げたとして、自己以外のもののため犠牲になつたのではなく、單に自己を満足させたのである。客觀的に見た慈善事業その物は、すべて積極的のものではなく、如何に大きな組織の孤兒院でも、養老院また廢病院でも、路傍の乞食に半ば遊戯的に一錢二錢を投げ與へることを擴張したに過ぎぬ。そのうちで比較的有効で確實に見えるのは、赤十字社の戦時に於ける働きだが、これも敵味方の負傷者どもを中立的に取り扱ふと云ふだけで、ほんの消極的だ。

(四) 正義——これにはまた自己の根柢から生ずる確信を要する。自己がぐら付いては、如何に正直に正義呼ばはりをしても價うちがない。まして正義を只既成物として、若しくは手段的に、ふりまはすものがあるに於てをやだ。確信は自己と共に生ずるものであつて、他から與へられるものではない。ところが、現大戰に於ける聯合軍が獨逸に向つて強いようとしてゐるのは、他から與へようとする既成的正義である。これでは、向ふに自國的確信がつづく限り、少しも向ふを動かし得ない。獨逸自身にはまた自身の發展から生ずる別な確信と正義とがあつて、白耳義も來たれ、バルカン半島も

来いと招いてゐる。斯くて同じ耶蘇教國でありながら、敵と味方とに別れて、同じ神に別々な勝利を祈つてゐる。正義よりも正直な確信が第一な以上、僕等から云へば、聯合軍の所謂正義はまた悪い固定と遊戯との餘地を残した確信だ。そしてこの確信が獨逸のよりも一しほ不眞剣に見えるのは、後者の方が今のところ受け身になつて死に物狂ひであるからである。いづれにしても、民族性や國家を離れて確信や正義を云ふのは虚偽だ。

(五) 平和——これを翻譯的人道主義者どもは、結局、幸福な生活と見てゐるらしい。無論、何物にも妨げられず、人なり國なりが自由に安樂にやつて行けることがあるなら、そんなことを好きなもの等だけがさうするがいい。が、桃源の夢ではないか？人生は苦闘と悲痛とだ。これを離れて無内容の幸福を求めようとするなら、死ぬのが一番得策だらう。死ぬもせず、闘へもせずに生活しようとするものは、その求める物が平和であらうが無からうが、却つてまさしく人道に立ち入らない者、乃ち人非人である。若しまた渠等の所謂平和を米國大統領キルソンのやうな武裝的平和とすれば、もう、戰爭を——成るべく避けるが——覺悟は覺悟のことになつてしまふ。そして實際の征服若しくはその威力に依つての平和を云ふことにならう。トルストイやロマンロオランが非戰論を唱へたりしたのは、そこまで徹底してゐなかつたからである。

以上の分析を僕はまた左に二個の要點につづめて見ようが、——

(第一) 國際關係——今の世界に於いて最も大きく見えるのは大戰の敵と味方とを別々に代表するカイザルとロイドジョージとである。その間に中立してキルソンが米國上院に於て勝敗なしの戰爭終結、讓歩と犠牲との組織的平和、世界領土の整理、大洋航海の自由を叫んだ。が、この所謂平和演説なる物が、乃ち、まだ分析を経ぬのん氣な人道主義の好適例だ。これをシャマン氏が『王様の大道演説』と冷評し、ローズベルトが『滑稽にして誠意を缺く』と罵倒したのも、尤もだ。キルソンは世界人類の意志が一致すれば何でも出来るやうに云つたが、その人類の意志が實際にさう一致するものではない。最も有効な一致は征服である。一國內に於いても、狭軌の鐵道を廣軌にするのにさへ反對者を征服する必要がある。まして各國に痛切な利害關係を有する各方面の混雜した通路を、——これは一例だが——如何に公海に向つてとは云へ、さう自由に開けるものではない。露國が浦鹽へ出るまでの苦心はどうだ？また、同國はダルダネルス海峽を出るのを一大條件にして今回の大戰に加はつてゐる。然し獨逸も亦バルカンから海へ出ようとしてゐるのだ。英國が阿弗利加縱貫鐵道を以つてケイプタウンから陸上で地中海に出ようとしてゐたのが思ふやうにならなかつたのは、トランスヴァールの北に獨領阿弗利加があつたからだ。今回それを占領したので、ヤツと思ひが叶ふやうになるわけだ。かかる意志はどうせ征服に依らなければ行はれないのである。そしてこの征服の結果が初めて人類の便利になり、人類の苦闘生活を一層豊富にするのだ。

國と國との間には道德がないと云ふが、それは偽善のがないだけで、一層正直で實質ある道德若しくは人道は、次の項で分る通り、この征服作用中に含まれてゐる。

(第二) 個人道德——所謂人道主義者どもは人間を生物學の材料としては矢ツ張り無道德だと云ふ。然し生物が發達して人間となり、人間が擴張して國となつたのに、その兩端が相變らず同じ状態で、中央だけが道に叶つてるとは既にをかしいではないか？これは、然し、生物から人間を分ける時に、従來の學者や思索家が道德と云ふことの解釋を誇張若しくは曲解したのである。『萬物の靈長』など云つて人間をあまり遠くへ持ち運び過ぎた。乃ち、自由は云つても責任を、平等は云つても實力を、博愛は云つても自己満足を、正義は云つても確信を、そして平和は云つても征服を忘れた。前者のそれぞれは道德としては空想で、後者のそれぞれが眞の道德である。

實力と確信とがあつて、自己満足の爲めに征服を成し、その征服の責任は自我若しくは國家の吸收同化を以て果す。これ、獨存の傾向ある優强者、『人間神』のすがた、實相である。これに手ごわく反抗するものは戦争と暴力とを以つて平らげる。この作用は、人間界をよく内觀洞察すれば、個人間にもまた國際的にも、有形無形に絶えず行はれてゐる。但し、その場その時の二優强者的自我若しくは國家を中心としてだ。そこにおのづから內的制限があつて、それで以つて人間の征服的發展生活を緊張させるのであるから、かの人類を數量的に解放する世界主義の傾向を入れる餘地が少しもない。そ

の代り、被征服者に對しても人類生活の最も充實した所をそこに味はせてやるものであるから、翻譯的に嫌はれる戦争と暴力も善魔の行爲となり、弱肉強食も慈悲の力と變ずる。

かかる思想と實行とを僕等に囑託したのは、僕等の民族性と僕等の中に現はれた思索家ども——少くとも、佐藤信淵の如き——とである。自我と國家とが優强者の哲理では一つであることは既に他の場合で度々論じて置いた。その國家を中心としての、これは新しい人道主義であるから、いまはしい手段の爲めでなくとも、おのづから愛國的自我的だ。そしてトルストイやロマンロオランの世界主義的な人道主義とは正反對になるので、わざ／＼まぎらはしい名目を借りるでもなく、僕は僕等のを單純に『日本主義』と稱してゐるのである。

この論文は老人連にも讀んで貰ひたいのだが、おもに男女青年間に見せたいのであるから、現に青年の一部に流行してゐる武者小路實篤氏のあまりに單純淺薄な思想(?)をちよつと引例にするが、——渠の『青年の夢』他日、渠があればほんの夢を書いたのであるから自説をツくりではなかつたなどと逃げを張ることは許さない。生田長江氏が渠の著作『おめでたい人』をおめでたいものと評したら渠は渠自身の設けたわなに落ちたのだなどと口はばつたことを答へたのだから)を見給へ。既に木村卯之氏が『日本主義』で詳しく評してゐる通り、摸倣的に戦争を呪つたり死も同様の幸福を求めたりして、全く實力を忘れた平和主義若しくは人道主義をぬたくつてある。

渠が『無意味な不安定』の生活を避けようとしてゐながら、實力のない平和主義を説くのは矛盾であらう。少し比較の人物は大き過ぎるが、發現された言葉が問題であるからキルソンのことを出すとして、所謂『王さまの大道演説』にも『實力を作り出さねばならぬ』とあるではないか？そしてそれが備はれば、もう、平和主義と戦争主義とは根本に於いて區別がない。ここに至つてこそ渠の求める安定も生ずるのである。同時に戦争に死ぬのを好むと嫌ふとは勝手であるとしても、好むものも犠牲となるのではなく、自己の満足を果すのであり、嫌ふものも亦別にしツかり出来るだけの力を持つてることになる。先づここに注意を向けなくて、空想や消極的に平和若しくは人道を云つたとて、少しも安定なり幸福なりを得られよう筈はない。

日本人としてこの日本主義(名稱はどう換へてもいいが)の充實味に達し得ぬ渠の如きは、人道主義など云ひながら、渠自身の無智無反省から知らず識らず非人道を説いてるのであるから、僕等は渠を犬猫同様に哀れますにはゐられないのである。(大正六年三月九日)

国際正義はどこまで主張できる？

姉崎博士の『戦後の世界』(中央公論)を読むと『一國の問題は…その富強を…單に力として用ゐるか、義の爲めに之を用ふべきかと云ふ點に歸着する』とある。けれども、その力と云ひ、義の爲めと

云ふは、現今一般學者の通弊なる抽象的區別に終つてゐるのを、僕等は遺憾とする。

渠は米國大統領キルソンの宣戰布告文を擧げて頻りにこれをこれに用ゐられた文字通りに賞揚したが、それは決してわが國に於ける渠の所謂『懷疑論、否、冷笑論』者等—僕もそのうちに數へられてゐるのだらう—を納得させるに足らぬのである。渠の言としてキルソンが『渠等(自國民)の感情を尊重して、二年有半…自國民が…ドイツの軍國主義を恐れ且憎む心が十分に熟するのを待つ』たとあるのは、決して『アメリカの參戰に徳義上の判斷、道徳的情操が有力の力となつた事』を明白にしてゐないばかりでなく、却つてその反對の一證據であらう。

渠がここに判斷と云ひ、情操と云つてゐるのは、無論國家や民族を離れても存し得られると空想された世界主義、人類主義の道徳や徳義の上のことである。そんな空想的徳義論者は、わが國には姉崎氏その人を初めとして、生田長江氏、阿部次郎氏、その他下だつては武者小路實篤氏等さらにある如く、米國にもベク、エリオド、ラド等の諸氏にもツと大きなのがあつたことは事實だらう、けれども、キルソンはさすがに實際政治の責任者であつただけに、かかる空想論ではなか／＼に動かかなかつた。二年餘も中立を守つて辛抱した。その間に白耳義は蹂躪され、塞爾比は亡び、多くの兵士は毒瓦斯の害を被りドイツ潛航艇の爲めに幾多の船舶と人命とが撃沈された。それでも辛抱した。つまり米國の戦機が熟さなかつたからである。

米國の參戰が單に人類の爲めとか國際的正義の爲とかであつたのなら、なぜ白耳義の蹂躪された時、塞爾比の亡んだ時、若しくは毒瓦斯使用の發見された時、所謂道義的に騷起しなかつたか？つまり、戰機が熟さなかつたからである。して見ると、戰機が熟するとはどんなことであつたか？キルソンどもから云へば、自分等の空想的人類主義の德義觀念をおもて向きは奇麗にこぢ付ける問題が生じたことである。そして實際的には、ドイツの潛航艇戰が直接に米國並に米國人民の安危にかかつて來て、中立ではゐられなくなつたことであつた。つまり、自利心からの騷起—乃ち、これが實質ある義憤—が實際の内容であつた。これをできるだけ廣義にすれば歐洲人の大戰が米國民の利害に直接に影響して來なかつた時は、米國民はこれも同じ人類でありながら、他國の人類の戰闘に中立を守つてゐた。そして直接の利害問題になつてから、初めて騷起した。

この場合、思想上に於いても、國際政治上に於いても、最も謙遜なまた最も實質ある正義とは自國民なる人類の利害の爲めに戰ふことである。これ以上に正義の意味を押し廣げるのは空想であり、こぢ付けであり、僭越である。そりやア、同じ人類だから味かたになれば問題の表面的共通點は發見されよう。そして大戰の目的が米國の參戰以來一層推移して來たことは事實だが、キルソンが人類自由の爲めとかデモクラシの爲めとか云つて、露國の革命を幫助してゐるのも、つまり、自國民に都合がいいからであるを忘れてはならぬ。姉崎氏はわが明治維新前の勤王攘夷主義が勤王開國主義になつた

のを一例としたが、それは根本に於いてわけが違ふ。あの時には勤王が實際問題で、攘夷は時の附けたりであつたが、今の大戦には國際正義とかデモクラシとかが却つて虚偽でないとしても附けたりではないか？殊に、デモクラシを米國人や新露國民の解する通りに實行すれば共和政治で、こんな物をわが國民が大戦に参加したのを以つて必らずしも附き合ふには及ばない。

姉崎氏がわが國民に『去就を決せよ』など叫んでゐるのは、滑稽にも、空想界の甲冑武者が帝國大學の椅子を床几にして獨り合點に頑張つてるやうなものだ。わが國を初めとして、戰爭諸國民は皆それぞれの去就を夙に決してゐるのだ。それぞれ皆の云ふ、然し内容、異にした正義や人道に表面では附き合ひながら、内部根本に於いては皆自國の利益の爲めに就きつつあるのだ。渠は別に新東洋に於いて『青島陥落以後わが國の人心は世界の大亂あるを忘れた如く、ベルジクの悲惨な状態も、ルンテニア號の悲劇も、人心を動かすに足らなかつた』と云つた。われは米國が中立を守つてた時の心持ちと同じ意味に於いては事實であるが、當り前のことで少しも非難するに當らないことだ。

而も大戦の推移が『新問題、新局面』をデモクラシや領土非併合の方に持つて行きつつあるに當つて、わが國が三年來の參戰的努力や損害を忘れてうか／＼とその方に就いて行けようか？日本が『與國と疎隔』しつゝあるのではなく、與國が日本を疎隔しつゝあることは、露國新政府の出現と米國の參戰とに依つて段々甚だしくなつて來たのではないか？かかる時に當つては、『有形無形共に孤立』が

來たるも止むを得ないところまで覺悟して、僕等日本國民は自國の利害と體面とを中心にした、そして空想抜きの大義と名分とを世界に標榜してゐなければならぬ。これが眞の義ではないか？そしてかかる義には必らず力が伴つてゐる。否、かかる義は乃ち力である。机上の研究者等は從來の用語に拘泥して力と云へば物質的だと見るから、別に正反對の精神的なる義などを持つて來なければ承知しない。然し、こんな義は上述の理由を以つても分る通り無内容ではないか、物質的に解しられた力に精神がないと同様に？僕等は物心合致の實力のあるところに正義が存することを認める、そしてわが國の正義はわが國の實力のあるところにのみ主張できることを信ずる。されば、他國の主張する正義は、僕等にはわが國の實力に吸収されただけが眞實である。(大正六年十一月九日)

經濟的非戰論の不成立

生田長江氏がおもにプロツホ並びにノルマシエンゼルの著書を土臺にしたと云ふ論文「國際戰の將來」(新小説九月號)を讀んで見るに、その趣旨は先入見として世界主義的傾向の平和論を間違つてゐないものとしなければならぬことができないものである。今、その謬見を一々渠の言に就いて破つて見たい。

(第一)、渠が國際戰の進化、文明化と云ふのはいい。それは解釋の具合によつては事實である。が、

今日の國際戰が『經濟上收得に殆ど唯一の目的を置き科學的智識の創出と普及と運用とを最も重要な手段となしてゐる』と云ふことは、決して武を抜きにした若しくは武を遠ざかつた文に傾いて行くことと同一ではない。乃ちあべこべに、文をおもて立てるが武を直接に裏つけた傾向なのだ。從來の言葉で云へば、武裝的平和だ。現に、渠も『軍國主義や獨逸魂などの爲めよりも、寧ろ……徹底し普及した比類なき科學思想の賜物』の爲めに『獨逸人があれだけ強い』と云つてゐるではないか？これは渠の所謂文的平和を證明したよりも、寧ろ僕の云はうとする武的性質を説明すべきことである。渠はまた個人間の争闘が『過去の腕力競べから今日の分別競べになつた』ことを推論の前提にした。が、これも腕力の複雑化と云ふことなら間違つてゐないが、分別的になる程腕力、乃ち武力が薄らぎ無くなるものとするなら空想である。

ここに渠の平和論には、のん氣な世界主義が含まれてゐることは否定できぬ。

(第二)、渠はプロホの説に従ひ、列國の自利的勢力均等の爲め、並に武器及び戰術の進歩が攻勢よりも守勢に都合よくなつた爲め等の理由に據り、戰爭が一步一步不可能の方へ近づくと説いた。そしてプロホの著書出現後に南亞戰爭、日露戰爭、並に今回の大戰があつたことを以てます／＼戰爭の不可能を證明するものとした。然し、この證明の仕方は人間の精神に反してゐる。人間は機械の如く固定したものでないから、若しその進む道に不可能があれば、これを切り開いて可能にせずは止まぬ

ものだ。一國が他國と同盟したり、同盟を脱したりするのは、既に外交的な戦争なのである。ただ武器を用ひぬだけのことだ。今、ここに武器を用ひぬ戦争などは少しも否定してゐないと云ふほんの純な非戦論者(生田氏もそれだらうか?)がありとすれば、平和戦と武的戦とを呑氣にも機械的に區別して満足してゐる者であつて、それだから武戦の不可能などを云へるのだ。僕等の覺悟では文武兩途なく、外交戦が破れば直ぐ武戦の難易など考へてゐられない。

文戦と武戦とをあらかじめ區別してかかるやうな人に限つて、自國の體面よりも利害の方面を考へ、その利害が縮少して國家を離れ、人類と云ふ空想的美名に依つて、その人を世界主義に行かせ易い。かかる傾向の人には武戦が不可能に成るなど云へば、一般平凡人と同様に直ぐうなづけるだらうが、文武を一途に見做すもの等の覺悟はさうでない。列國の「勢力の一方に偏在することを恐れる」のは自國の利害からであるが、この利害は直ちに體面である。そしてこれを體現するものは平凡人でなく、平凡人を代表する少數者、否、この少數者をも吸収した獨存的個人だ。苟も國がある以上、僕等にかかる少數者若しくは個人の精神に一致するので、いよゝゝの場合、戦争を不可能だからと云ふやうな泣き寝りになつてしまへない。

生田氏にして、若しこの泣き寝りの場合をも見のがして、戦争不可能の理由が維持できるとするならば、立派な世界主義者であらう。

(第三)、エンゼルの議論紹介者は、また、國際戦によつて從來得られると思はれた物質的並に精神的利益を近代では幻想に過ぎぬものとした。その理由として「征服された國土の富は依然として其國土の人民の掌中に残る」こと。獨佛戦争の時にも、勝利者なる獨逸が「奪取し得たる償金によつて直接間接に……損失を招致した」こと。今日の大抵の植民地はこれを領有するところの國民に對して何等の格段なる經濟上利益を提供するものでない」こと、等を渠の所謂物質的なそれとして擧げた。然し、「戦争本來の目的動機等が單に經濟上打算にのみ存するものでないこと」を渠も亦知つてゐる爲めに、そしてそれだけ渠の以上の論據の薄弱を埋め合はせる爲に、渠はまた第一に「少くとも、文明國民と稱せられるもの相互の間に行はれる戦争」に於いて、「戦敗國民の言語や法律や文學や傳説等の如き文化は、單に戦敗と云ふことだけで滅びるものでない」ことを擧げた。

けれども、一國の文化が根本的戦敗によつて停止され、ただその惰力の残つてゐる間だけの生命になつてしまふことは、羅馬に征服された希臘の場合でよく分つてゐる。これは然し近代的非戦論の反證にはならぬと云ふかも知れない。近代では、獨佛戦争にでも、日露戦争にでも交戦相手の一方が根本的戦敗をした例がない。従つて、戦敗國とはなつても、その文化を滅ぼすに至らないのは當り前だ。だから、有害無益で段々無くなると生田氏が新らしがつて樂觀するやうな戦争は、然し、その實、昔の一次的な侵略戦争のことであらう。苟も武戦と文戦とを永久無區別に融通し合ふだけの大覺悟あるもの

には戦争は一國の存在を明確にする所以である。この場合、経済的また文化的にたとへ不利益があつても、若しくは存在その物をも危くする恐れがあつても、やるとならばやるのである。そしてわが國が日露戦争の勝利によつて外部的にも内面的にも多大の緊張をしたその利益を生田氏は忘れてゐるであらうか？また、現大戦に於いて、まだ戦勝を得ないのに、英國が戦前にもまさつた貿易を取り扱つてゐること、米國がまた内部の覺醒をも得つつ中立當時よりも數倍した註文品を他國から受け合つてゐることを知らないのだらうか？

これ昔、渠の否定する戦争的道德論をも根本を逸して枝葉に渡るものとしてしまつた所以である。この點は、特別にここに辯駁する必要もあるまいから、今一つの適者殘存と相互扶助のことは次ぎの問題と合せて論ずることにする。

(第四)、『適者とは……社會全體の幸福の爲めに、強者も弱者も一致協力して互ひに相倚り相扶ける道を知つてゐる種族である』と云ふ、生田氏の所謂誤解なきダキニズムに少しも批評を加へないで、これを假りに正當な前提としても、國家若しくは民族の問題には單に内亂を戒しめるに足るだけのことであつて、少しも外敵がある場合のことには當らない。然し、渠がこれを不適當なところに置々しく擧げた意は僕にもよく分つてゐる。渠は僕が前項に云ひ残した部分で左の如きことを云つてゐる、——『一民族もしくは他國民の文化は他の民族もしくは他の國民の文化に對してだん／＼と特色のない

物になつて來てゐる。そして社會層を異にする同一國民が感情や思想や藝術や學問をすら異にし、社會層を同じうせんとする傾向の、いよ／＼甚だしきを加へてゐるにつれ、武術的文化國家主義を支持するに足るほどの國民的もしくは民族的文化的特色を保存するのは、いよ／＼不可能に近くなつて行くのであらう。』

この豫想は征服吸收されたものに征服者の色や精神が根本的に乗り移つてゐることを否定し初めたものである。云ひ換へれば國家の内部的制限をのがれられるとするものだ。渠の所謂武術的文化主義が僕の主義と同じであるかどうかはここに詮索するに及ばないが、一國民もしくは一民族の文化に特色がなくなることを豫想できるものは國家から分離しようとする世界主義者若しくは社會主義者である。國家を獨斷的國家論者の多く超個人的に解すると僕の如く獨存個人的に解するとは、ここに問ふまでもなく、兎に角その生命とするところは——殊に、わが國に於いては——國家の内部的制限から來たる特色である。たとへ萬國共通の感情、思想等が這入つて來ても、共通なのは洋服の如く穿らうわつづらのことで、根本にこの特色を與へねば國家の存在は無意義に終はる。そしてこれが否定できれば、國家の解體である。

ところで、こんな重大なことをも自覺しないで、僕のいつも反對する散漫な分量的獨斷的個人主義に直ちに共鳴したのは、西洋諸國に於ける無學無智の農民と勞働者と、渠等の無學無智にそのまま理

論を與へた社會主義者である。そしてここに相互扶助と云ふことを非國家的に解釋する餘地ができた。餘りに樂觀もしくは呑氣過ぎることだと思ふが、渠等は自分どもの屬して責任あるその國として他の國と生存を争ふことを忘れ、人類として他の動物と競争しようと思ふのだ。世界主義は社會主義ほどに方針が定つてゐないが、人類を原始的に取り扱ふ點に於いては違つたこともない。生田氏はかかる考を取り入れたが爲めに、四通り目の論據として、『第四階級の民主主義』と云ふことを云つたに相違ない。ここに至つて、渠と僕とは再び偉力ある少數者と散漫な一般人との問題に觸れなければならぬ。

散漫な一般人が如何に多く集つても、秩序が附くものではない。渠等を代表もしくは吸収する少數者があり、その少數者をまた統一する大個人があつて、初めて團體となるのである。そして一たび少數者の存在を許し、統一個人を認める以上は、たとへ國家を離れた別な秩序の團體としても、それが勢力あればあるほど、國家と同様の組織になる。これに歸化するものを容れてやり、これに反對するものとは戦ふに至るのは、人間の性情としてきまつてゐる。そしてこの戦ひを指導し繼續するものも渠等の代表者と渠等中の偉人どもである。この時に至つて、渠等は自分等が決して少數者の犠牲に成つてるとは思ふまい。よしんば思つてもさう不平は云ふまい。渠等が今『戦争を止む』なのは國家を以つて自分のうちに建てたものでないと云ふ無自覺な先入見(乃ち、世界主義)があるからである。渠等

「はまだのん氣過ぎて、食物の獲得以外にセツば詰つた場合に接したことがなかつた。が、國家を離れてもその生活に同様の制限が生じ、自分等の制限は他のもの等の制限とは永久に戦争であることを口覺すれば、寧ろ、自分等の離れようとしたもの國家を自分等として奮戦する方がよかつた。これが乃ち、現大戰の進行につれて、獨佛露の社會主義者が初手からの思ひ違ひを改めて、そのそれ／＼の國の爲めに立つた所以ではないか？」

生田氏は渠自身の説に賛成して來るものばかりを世の識者、識者と云つてゐるが、然し、この大戰に至つて社會主義の根本がうち破れたと云ふこと、少くとも社會主義の性質が一變して國家的になつて來たと云ふことも、亦、一方の一層堅實な識者等の見解である。社會主義者等の多くが今でも熱心に平和運動をしてゐるのは事實だ。が、それは中立國の同主義者どもでなければならぬ。頭迷無智にして自覺せぬもの等、然らざればまたさうせこの戦争が敵味方へ殆ど五分五分に終りはせぬかと見て、いつそのこと、兩方から中止したらどうだらうと考へるもの等の運動だ。たとへ戦争が五分五分に終るとしても、それだからこの勃發のいろ／＼必然的な動機を無くすことができると思ふわけには行かぬ。一國若しくは一民族を指導する獨存的な少數者や大個人が經濟上並に文化上に責任を感じ、名譽を重んじ、多少は野心もある人間同志である以上はだ！

なほ一つ残つてゐる問題に民主主義のことだが、世界の各國がこの主義になれば戦争は起らぬかの如

く云ひ爲す聯合諸國の政治家どもの辭令若しくは主張は、そしてこれに雷同してゐるもの等の言は、その實、たま／＼敵の獨逸が專制國である爲めのあげ足取りに過ぎない。見よ、もともと民主的な英國や佛蘭西は既に舊式な侵略戦争をも幾たびもして來た。露國は新たに民主國としたもの等も、全會一致で今の戦争繼續を決議した。北米の合衆共和國の如きは、大きな火事場泥棒のやうな金儲けを少し遠慮さへしてゐれば、わざ／＼今回の渦中へなど飛び出さないでもよかたつたのに、なほいろんな麗はしい口實を設けて出しや張つたではないか？一國の民主々義たるを平和の保證のやうに見做すのは、乃ち獨逸のあげ足取りでなければわけも知らずの雷同である。

以上、僕は生田長江氏の議論が漠然たる世界主義と新約變を経ざる社會主義と雷同的民主々義とからして成り立つてゐることを證明した。

渠は『かも知れぬ』を連發して、利口にも『私の此論文は徹頭徹尾、斯く成り行くであらうと云ふ豫想的觀察から出來てゐて、聊かも斯く成り行けばよいと云ふやうな、論者自身の希望や要求を表白してゐない』と云つた。然し渠がさう豫想できたら、渠がさう信じたことになるのだから、この僕の駁論は渠の確かであるかどうかは別としての信仰その物に突き當つたものであることを云ひ添て置く。(大正六年九月十二日)

一一 日本的批判

日本的と無消化的批判

文學博士桑木嚴翼氏はさきに獨逸と開戦すればわが國の思想が涸渴すると云つて僕等の如き國民性主張者どもから攻撃を受け、これが辯解の爲めに僕等の思想生活に國境がないと云つたのではなく、僕等の求むべき學問知識には國境がないと云つたのだと答へた。これでもなほ間違つた考へであつて、知識もこれを採用する場合には國民性的制限を受けてゐなければ無用なことを僕等は渠に對して再び述べて置いた。その後、僕が或宴會で渠に出逢つた時、今一度答へなければならぬのだが、面倒だからやめたと云ふやうな無責任な言葉を發したから、僕も呆れてそのままにして置いた。ところが、今回、渠は『日本的といふこと』(帝文七月號)並に『倫理學と國民道徳と日本的と』(丁酉倫理六月號)に於いて僕等に對する答へに當ることを述べ、『日本的を獨占せんとする者』とか、『外來思想といふやうな語を以て自己の思想内容を豊かにするを拒むもの』とか云つたには、暗に僕等を指してゐるらしい。

ところが、渠の論旨を通讀すると、矢ツ張り、抽象的な批判若しくは空しい倫理だけのことであつ

て、実際には日本的を分つてゐないらしい。そしてもと／＼通り思想には國境なしの程度にとどまつてゐるものと認められる。蓋し渠は「我にあつて危険なものは彼にあつても決して一般には認容されては居ず」と斷言したが、これは眞實でない。最も適切な一例を以て云へば、共和政治的思想はわれに危険なものであるが、米佛には勿論、英國にも、一般に認容されてゐるではないか？ また、われとかれとを轉換して、もつと精神的に云へば、そして議論の餘地を残しても、征服と云ふことは今の聯合諸國では一般に外道とし、危険として排斥されてゐるけれども、獨逸人はこれを以つて却つて自國將來の安定を來たすものと考へたし、僕等はまた、これに日本人としての傳統的宗教觀念を加へてこれを愛の福音とまで解釋してゐる。少くともこの二事實は單純な風俗習慣などと同一に看做すべきものではない。そこにも進歩的變遷は許されるが、渠の考へてるやうな無制限の變易があるのは、日本の精神を耶蘇教にし、日本を米國なり英國なりにすることを知らず識らず豫想してゐるのである。

かかる豫想は僕等には思想としても内的な「豊富」にはならぬ。知識としても僕等に有用な材料ではない。渠は牛肉を喰ふ例を擧げてゐるが、僕等が牛肉を喰ふのは、日本人として消化してゐるのだから論のありやうがないのだ。けれども、渠の論法は日本的を先づ「そこから」乃ち、無國性的に、若しくは外國人として、批判しようとしてゐるのである。そしてそれを「先天的」とか「先驗的」とか云つてゐるのだが、かかる批判は一種の批判ではあらうが、決して消化ではない。僕等は消化的批判を

日本人の善惡兩様の特性を通じてでなければできない物とする。決して外來の思想文物を「理解する能はざる」より拒むのではない。渠の如き一派が紹介するやうな外國的知識を渠等の紹介のままでは無消化だとして排斥するのである。渠は「歴史によつて過去の變遷を知りながら、然も未來に於ける變化を拒むものは私の遂に其意を解するに苦しむ所である」と云つたが、これなどに渠の無理解なところがよく現はれてゐる。歴史上の變遷はその國の特性を離れてゐないことを證明するもので、僕等はこれに據つて一國の未來にも特性を離れた變化はないとするのだ。乃ち、日本は將來にも内外の文物を日本的に消化しつつ進歩變遷すべきである。そして日本的に消化できないほどの變化に達する時は、日本のなくなる時である。かかる變化を今から僕等が拒むのは、決して偏狹でも輕率でも不道理でもない筈だ。然し渠はさうするにはもつと「十分日本の生活文學に對する攻究を経て」にせよと云ふ本意かも知れぬが、如何に攻究を經ても、渠の如き無消化な批判の態度では實際に偏狹なそれよりも一層弊害が多いのである。

僕はこのついでに思潮(昨年十月)に於ける博士西田幾多郎氏の「日本的といふことに就て」をも讀んで見た。渠は桑木博士ほど物の分らない云ひかたをしてゐない。けれども、矢ツ張り日本的なるが故に世界的たる力の備はるのであることを知つてないやうだ。渠は日本的を孤獨的傾向と見て、之を世界的と區別した。そしてその理由として「我々が或物に藝術的價值とか道德的價值とかを認めると

いふこと自身が既に自己を離れるといふことである』と云つたが、僕等の渠に反対な哲學では、自己を離れないで飽くまで自己を緊張させるところに世界も宇宙も在るのだとしてゐる。従つて、これを國民に押し廣めれば、僕等は『益々日本的となると共に（論者の意味ではまた別に）……世界文化の要素として缺くべからざるもの』になるのではなく、徳孤ならずの意味で、日本的な特性力が直ちに世界全體若しくは半部の生存力となるやうに信じ且努めてゐるのである。そしてそれが僕の所謂征服愛の福音で、僕等の日本的と云ふことは宗教的確信にまで統一されてゐるものであることを附言して置く。（大正七年八月）

無政府主義紹介事件の批判

クロボトキンの思想のやうな無政府主義的傾向を日本人としての反省なしに紹介するのは——たとへば宣傳の意味がなかつたにしても——相當の刑罰に價へるのである。ましてその爲めに帝大助教授の職をやめられた森戸辰男氏のは、仁井田博士の談によると、『宣傳とも見られる』性質の物であつた。吉野作造氏の如き、どツちかと云へば、かかる宣傳にも賛成する人の言によるも、森戸氏に『餘りに多くクロボトキンの意志を持って囃してゐる感』があつた。して見るとわが國人として當然に考へてゐるべき皇室の問題をも無にしてゐたことになるから、これを『私としては決して罪惡だとも考へ

ないのみか、寧ろ人間として云ふべきことを言つたまでのことです』と云つた森戸氏その人の頭腦の愚鈍を先づ指摘せねばならぬ。

渠の『人間』とは物質的個人主義のそれであつて、かかる個人は研究の對象としても、無國家的傾向ある耶蘇教の社會や、君主存廢權ある諸國家の人民には考へられようが、僕らの如き生活の内容にも皇室を、従つて國家をも、離れてゐられない内的條件のもとに存立するものには、初めからあり得べからざる假定物に過ぎない。そんな物としても云ふべきことを云ふつもりなら、官吏としての休職はおろか先づ以つて日本人たる生活條件を全然立ち離れてゐなければならぬ。言ひ換へれば、日本の國家の保護を受けてゐる日本人を廢業してからのことだらう。外國人の心を持ちながら、うわツつらだけ日本人の仲間になつてゐようとするのは既に眞の人間ではないのだ。念の爲めに云ひ添へるが、外國人はその國人としての人間を發揮するやうに僕らには日本人としての人間の外に人間たる道はない。これにそむく者は直ちに人道並びに國家にそむく罪人だ。

次に、かかる態度の人物が新聞紙上に問題になつた時、吉野作造氏は最初には森戸氏『排斥運動を起すなどは實に愚劣極まる話で』その理由には『現代の思想界は到底マルクスあたりの議論では追ツ付かずまさにクロボトキンに進み、更らにトルストイの稱へた精神主義』になると云つた。トルストイのも無抵抗主義の無政府主義であることを讀者は忘れてはならぬ。して見ると、斯う云ふことを

云ふ吉野氏も亦、その思想の無反省の爲めには休職と刑罰を受けなければならぬ人だと、僕等は思ふのだが、行政者にそこまでの思想的徹底がない爲めに無事な顔をしてゐるのがをかしいではないか？そしてこの言が發表された翌日、^ハよ／＼森戸氏が大學教授會の決議によつて休職になると、今度は吉野氏が新聞記者に向つて前言を取り消して『教授會の決議でさうなつたとすれば、或は私の言に依つて傷つけられる人がないとも限るまいから、今は遠慮したい』などと云つた。學生の森戸氏排斥は『愚劣』で、大學教授會の排斥はさうでないのか？ここに至つて吉野氏の前言に確信もなくなった人氣呼びのから氣焔で、吉野氏その人もおツちよこちよいの下だらぬ人物であることが分らう。渠が二度目には森戸氏のを『過失』と辯護してゐるが、森戸氏自身が『人間として云ふべきことを云つた』などと強情張つてゐる以上は、決して過失のやうな軽い性質のことではなく、思想的反逆罪であるのだ。

次に、この事件に對して浮田和民氏がまた曖昧なことを云つた。それは思想の自由は帝國憲法の保證するところだが、研究の範圍を越えて思想運動になつてれば、當然禁壓すべきものだ。今、研究と運動とを對比すれば、無論、後者を禁じても前者の自由にさせるべきであるが、研究の自由を直ちに思想の自由と同一視してはならぬのである。實行の伴はない研究のことなどは帝國憲法では少しも問題になつてゐないのだ。そして實行の伴ふ言論の自由には憲法上制限があつて、その第二十九條

は『法律の範圍内に於て』と規定してある。また思想をただ言論やその他にとどめず、もつと實行的な宗教まで持つて行けば、第二十八條に信教の自由は、『安寧秩序を妨げず及び臣民たるの義務に背かざる限に於て』と定まつてゐるのだ。然るに浮田氏は『從來、大學には學問の獨立、思想の自由が無かつた』が、今後はそれがあるべきものだとしてゐるやうだ。そして憲法の保護するのは絶對の自由であるかの如き論法をほのめかした。が、僕らの國民としての實生活（それ以外に人類、個人若しくは人間の生活もないのだ）に於いては、無制限の論理と絶對の自由とはあるべきものでないのだ。

以上の引例はすべて讀賣新聞の一月十二日並びに十四日の記事によつてしたが、吉野氏にせよ浮田氏にせよ、すべて日本人としての實生活に無反省であることが證明されようではないか？そして日本人の實生活に無反省なのは、以上の二氏に限らず、現今の諸大學に於ける教授連の多くはそれで、その弊害はすべて外國人の研究を標準にばかりするところから來てゐる。然し外國人の獨創は必ずしも日本人として採用すべきものではない。日本人には日本人の獨創を必要とするのである。マルクスの出現を許したのは國家生活と思想生活とを別々に取り扱ふ習慣になつてゐる耶蘇教國であるからだが、わが國の如く皇室中心主義が國家の組織でもあり、同時にまた思想上の大系統であるところでは、國家生活と思想生活を區別してゐられないのだ。この二は乃ち一でとほつてゐる。そしてこの上に日本的獨創を建てないでかかる具體的制限を知らぬ外國人を標準にするのは、わが國家の存立は

かりでなく、その論者自身の生活をもぶち毀わすことになるのである。その實例を今回の森戸氏の身の上に見るがいい。渠は検事局から起訴されたさうだが、渠にして若しなほ改めなければ、たとへ検事局の手を借らずとも、僕等の國家生活即思想生活の要求が渠を飽くまで追窮して渠の反省を促さないでは置くまい。

讀賣新聞はこの事件を『新舊思想の争闘』と命名したが、この命名のよくないことは本誌本號の木村氏も論じてある通りだ。僕等は國家無視的傾向を少しも新らしいとは思へない。國際聯盟が左ほど頼むに足りないことが僕らの豫想した通り分つて來たこの世界的時勢に對して、僕等がわが國以外の世界に於いてははまだ知られなかつた國家人論的獨創の立脚地に在つて、社會問題や思想問題を提唱するこそ寧ろ新らしい考へではないか？上杉愼吉氏一派の國家主義と僕らの日本主義とは、その間、固定的と流動的との相違があるやうに思はれる。が、世界の氣勢に臨むに日本中心、従つて皇室中心を以つてするところは共に同じであらう。そしてこの傾向若しくは信念に吉野、浮田、青木（徹二）等の諸博士の如く動搖を受けるもの等は、從來になかつたと云ふ點に於いては新思想かも知れないけれども、結局外國に於いては既に古びてゐる思想の精粕をなめてるに過ぎないのだ。

思想や生活の最も自由だ云はれた米國に於いてさへ、この頃、過激派の國外追放をやつてゐるではないか？そして過激思想の宣傳には困るが憲法上、言論の自由を絶対に許してあるから、どうするこ

ともできないやうな英國の現状の如きは、決してよみすべきものではない。それこそ舊形式に捕はれた舊思想ではある。わが國諸大學の教授や學生がマルクスやクロボトキンを新らしがつてゐる間に、外國では既にマルクスやクロボトキンを過去の幽霊として、その祟りから免れよう、免かれようとしてゐるのが實際だ。

外國の文物はすべてこれを日本の見地から批判しなければならぬ。（大正九年一月十五日）

崇外病と恐外病

故大西博士がその在世の時にわが國に宗教がなかつたと云つたが、その意を詮じ詰めれば愚かにも耶蘇新教がなかつたと云ふ分り切つたことに過ぎなかつたことは、曾て僕が指摘した。近頃、また、兼常と云ふ文學士がわが國に『音樂らしい音樂がない』と云つたが、渠の所謂音樂とは西洋樂であつたのだ。

わが國には無論耶蘇新教は明治以前になかつたと云つてもいい。同教と或點では正反對な佛教は、然し、一千數百年來あつてその大部分は最早印度的、支那的ではなくつて、日本的になつてゐる。その上に、僕の屢々説明する人間神的宗教は殆ど開闢以來あつて、大正の今日まで僕等の生活の根本に潛在して來た。また西洋音樂は大正時代になつても今だに殆ど成立してゐないのは事實だが、日本音

樂は天の岩戸時代からあつて、支那樂をも吸收し、三味線が肉的な音を發し、肉を讚美する歌が伴ふやうになつたのは、僕等の祖先以來の信仰なる肉體神聖感を體現してゐるほどである。

これ等を外國の物と比較するのは、互ひに優劣の諸點があるのだから、かまはない。が、比較が直ちに侮蔑となり、否定となるのは、自國の特色を忘れて外國の長所ばかりを肯定する所以にならう。わが國に哲學がないと云ふこともよく坐談や論壇で聽くけれども、それはプラトンやカントがないと云つてゐるに過ぎぬ。プラトンは獨逸にもなかつた。カントは英國にもなかつた。ヒウムは佛蘭西にもなく、ルソウは米國にもなかつた。渠等が各國共通にいろんな哲學を有して來た點を持つて來て見ても、わが國に流布した佛敎全體には殆ど西洋各派の哲理が含有されてゐる。支那からので云へば、朱子や王陽明はスペンサやエマソンにも劣らない。これ等を研究咀嚼したわが國の儒者や佛敎家にはまた獨自の意見を有したものが多くある。その上最も日本的に傳統をうち立てた思想家もあつて、たとへば山鹿素行の如き、平田篤胤の如き、佐藤信淵の如きだ。

西洋の哲學者が割り合に抽象的、大系統的であるのを見て、わが國の哲學家が一般に具體的、現世的であるのを否定するのは、矢ツ張り崇外辯に外ならぬのである。現世的な哲學思想はわが國の長所であり、他國には恐らく比を見ないのであるが、崇外家どもは外國の知識を先づ受け入れてから自國を見たに依つて、外國には少い現世的、具體的な哲理を哲學と思はないだけのことではないか？文學

博士澤柳政太郎氏が(中外日報の筆記を見ると)或講演に於いて『日本人は日本人の創造した何等の宗教をも哲學をも持つてゐない』とは、同じ片手落ちの觀察である。殊に甚しいことには、『日本人は獨特の精神的産物を所有しない』と。

よくかう云ふことを自分がえらがる爲めに云ふものがあるが、博士はまさかそんな下劣な根性はないと見てよからう。して見ると、渠も他の無反省で不精な人人のと同様に研究や觀察の不備を示めてゐるのである。斯う云ふ手合ひが現在の高級な學者になるほど多く、青年よりも却つて老人の間に盛んにあり、舊く國學院の如き學校を出たものにさへ、その胸臆を叩けば、意外にも發見されるのである。そして渠等は殆どすべて明治の摸倣時代に育つたものらだ、そして老人と高等學府とを唯一の典據ともしてゐるらしい多くの小學教員どもは渠等の傾向をそっくり受けついであるかして、僕等の子供は教員からをそはつたと云つて『そりやア日本人よりも西洋人の方がえらい、さ』と云ふやうなことを云ふ。

新代議士押川方義氏の言(『新日本』に於ける)を借りて云へば、渠等はすべて崇外病でなければ恐外病に罹つてゐるのである。

大權干犯論の當否

首相今春の訓示演説に於ける大権干犯論に對して臨時議會に於いて、齋藤隆夫氏は衆議院で、江木千之氏は貴族院で質問を發したことは事實である。これに對して上杉博士が『わが國』八月號で反駁して居るのを見ると、齋藤氏のは俗論で『全く問題の要點を離れてゐる』し、江木氏のはまた『奇怪なる質問』に過ぎぬと云ふ。そしてその理由は、『大臣任免が全然大権に屬すると云ふのは、……全部唯一に天皇の意思に依るものであつて……天皇の意思を外にして大臣の進退あらんことを希求するを以つて大権干犯の論と爲す』と。僕等は政黨政派の關係などを別にして純粹の憲法研究上から云ふのだが、天皇の意思にのみ依るべき大権事項中の一つを、別な個人若しくは團体の意見を以つて直接に干渉することは、無論、できないのである。けれども、多數政黨以外の人が進んで大臣任命を受けることは現在にも將來の爲めにもよくないと信じてゐるもの等があつて、受けた方のものに對して不信任を決議するは、たとへ堂々たるわが帝國議會に於いてでも、十分出来る餘地があるやうに思はれる。蓋し不信任をさし向けるものと向けられるものとの間に於けるのみの問題であつて、少しも大権を犯す事にはならぬ。只この場合に議論を餘り飛躍させて『非立憲』、『憲法違反』等の語を以つてするが爲めに、干犯論者どもに好辭柄を與へるに過ぎぬ。

試みに、一例として今、寺内首相の場合を擧げると、渠が初めに大権の自由に依つて選擇されて立つたのは少しもわが憲法に違反するところがない。次に、また、議會を解散すれば容易に多數を得

られると云ふ自信があつたに相違ない。そしてその通りになつた。これを信任するとしなるとは政黨政派かけ引き上のことであらうが、他日今の政友會が渠に裏切つて、さきの憲政會の如き不信任案を提出し、これに成功して渠を辭職せしめないと限らぬ。この場合成功者どもの首領を首相に任命しようが、また第二の寺内氏を以つてしようが、それは大権の自由である。但し、第二の寺内氏が出た場合、多數で成功者なる政友會ならば在野黨として矢ツ張り渠に不信任を向けるに違ひない。そして解散されてまた少數黨になると假定せよ。同じやうな不便なことを繰り返してゐるばかりで、いつも成績がよく擧らないでしまふ。これを大権者を初めとして、在朝在野の人々が皆氣づくやうになればもつと便利な方法が考へ出されるものだ。乃ち、二大政黨の對立更替である。そして政黨に無關係なものが飛び入りに大権自由の任命を受けても、どうせうまく行かぬから、いつも正直に任命を拜辭することになる。斯うなると、便利を採用するは眞理であり、独自の權であると云ふ理由から、時代は大権者の意思を所謂干犯的に拘束することなしに、おのづから政黨内閣制を行はしめる。そして憲法の改正を要せずこれが不文律の習慣ともならう。

今の時代はそこまで進んでゐない。然るに、既に進んでゐるかの如く豫想し、この豫想と實際とを錯誤のうちに混同し他日できるべき憲法的習慣を既にできるやうに見做して、多數政黨以外の人が大臣に任命されるのを、外國政治家どもの口吻に習つて非立憲などと叫ぶのは見當外れだ。同時に、ま

た時代と共に憲法解釋の進歩もあることを忘れて時代に添はぬ干犯論を飽くまで固執するのもよくないことだ。(大正六年八月)

親遠疎近の弊

わが國人は支那が遠きに親み、近きを疎んずる政策を取つて失敗を重ねて來たことをあざ笑ふが、自國の社會に於いて、殊に學者社會に於いて、支那の外交も同様のことが行はれてることを知らないであらうか？帝國大學の教授連は自分等のたどくしい研究若しくは議論を自國人の言葉を引用して證明することを卑近若しくは不見識として、外國人のを後ろ楯としないでは満足しない。そしてそれを聽讀する學生や紳士も、さうしてくれないぢやア感服しない。斯くして何でも片假名や外國字の固有名詞が出るのを喜ぶ悪い習慣が出來た。

本年八月三十日附を以つて改正された文科大學の規程を見ても、國文學科にさへ前々通り、自國の最近文學に關する歴史も研究も這入つてゐない。これも親遠疎近の結果であると云はねばならぬ。

僕は山路愛山氏に段々と不満を感じるやうになつたものの一人だが、それは渠が無理に書物を作るやうな傾向を見せて來てからのことだ。然し渠が多少外國語も讀める人でありながら、いつもわが國の事を中心材料として——おもに史論でだが——研究もし意見も吐いたその功蹟は、かの故博士上田

敏氏が外國雜誌からの讀み抜きを以つて餘り見識もない紹介ばかりをしたのよりも、サツと役に立つものであつたと僕は思つてゐる。ひとりこの好箇な對照に於いてばかりでもない。對立に於いてもツと深い根據があつた木村鷹太郎氏と故高山樗牛とのもの相違を觀察してもまだ生きてゐる木村氏よりも死んだ樗牛の方が勝ちを占めたやうに見えるのは、世人のはでな文學趣味と何事にも現はれる疎近傾向との上からであらう。また、北村季晴氏と幸田延子氏との對照でも、僕等から見れば、その内的勝敗は一目瞭然で、前者の作曲家的素質の方が後者のただの演奏技術家たるよりも珍重だが、世間では後者の方を目にかける所以は、まだ世間が作曲や音樂その物の研究を重んずることを知らないにも在るが、今一つは日本音樂の研究よりも西洋音樂を演奏出来るものをありがたがる爲めだ。

親遠疎近のおもな原因は外國崇拜だが、今少し進んで云へば、外國のいい事を崇拜若しくは消化するにも、自國を中心標準としてやらなければ空疎浮薄になると云ふことを知らない爲めだ。と同時に、この争つて外國がる時代にわれ先きに外國人なり外國想なりを後ろ楯にしなければえらく見えないと云ふ、如何にも處世的に卑劣な考へが添ふ爲めだ。昔の學者間にも支那崇拜からそんな事があつたので、山鹿素行は『耳を信じ目を信ぜず、近きを棄てて遠きを取り候ことは是非に及ばず、誠に學者の通病に候』と云つた。この詳しいことは本號に掲載の素行研究に譲るが、學者の疎近的傾向はただに外國と自國との關係に於いてばかりでなく、昔と今との關係にもある。そして今人よりも古人を重じ、

内部の自己よりも外部の自己を重んずる。この弊害を破る爲めに素行は斯う云つた、『今日一日の用を以つて極とすべきなり……一日なほ遠し、一時……一刻にあり』と。北島親房の『天地の初めは今日を以つて初めとす』と同意味であつて、斯う云ふ思想は支那にはなく、わが國の特産で、僕の剝那充實の生活主義と合するるのである。

一二 民族功利主義の覺醒

功利主義を耻るな

功利主義と人格主義とを善惡の意味に於いて對照せしめようとすることの愚である點に就いては、前號に於いて、博士井上哲次郎氏の誤見を正して置いた。

が、ここにまた田中王堂氏は、時事新報文藝欄に於ける『證據の二三』に於いて、滑稽にも、氏が功利主義者と呼ばれるのを頻りに氣にした。そして『私は初めから功利主義者ではなかつた。随つて功利主義を主張するわけはなかつた』と。

然し渠の議論にはいつも功利主義の傾向を帯びてゐるし、また渠自身の主義を一たび羅曼的功利主義と唱へたではないか？この矛盾には渠の多少卑劣な點と不見識とが籠つてゐるらしい。

渠が功利主義者と云はれるのを避けようとした所以は、同主義を世間一般が卑しむ傾きがあるからだらう。けれども、世間一般が卑しむ同主義とは、ミルやベンタムが唱へたままの單純幼稚な主義である。僕等がかかる幼稚な功利主義を脱する爲めに、直ちに非功利的な方面——これが一般の人々には人格主義とか精神的とか云つて誤解的に喜ばれてゐるのだが——に走るべきものではない。

僕等は空理や空靈を避けて、實生活の上に實際的哲理をうち立てる爲め、却つて功利主義を耻ぢとしないで、これを歴史的に改善するのである。ミル等のそれは如何にも幼稚で、今から見れば卑しき造的進化論も恐らく同主義に基づかないでは出なかつたらう。時代につれて同主義の改善が僕等の生命である。

田中氏が自説を一たび羅曼的功利主義と呼んだのはミルの單純を補足する爲めであると僕は記憶してゐる。そしてなほ氏には功利主義と羅曼的分子とを別々に考へてゐる缺點があつたので、僕は曾て氏に對して純全功利主義なる物があることを注意した。渠はいまだに功利主義を純全化した立脚地を知らないかも知れぬが、渠のも亦一種の、まだ進む必要がある功利主義であることは事實だ。

それをしも渠は世間の不評判を恐れて、妙に尤もらしく否定し、少しも同主義の歴史的發展に云ひ及んでないのは、卑劣の上にも不見識であると云はねばならぬ。渠は身づから裏切つてゐるのだ。

僕等は功利主義の正解、乃ち純全化を以つて、民族的にも、國家的にも、はた又個人的にも現代の生命としてこそ初めて充實した内容生活が出来るのだ。

民族功利主義の覺醒

戦争と平和とは全然別な主義若しくは原理に於いて區別されるべきものの如く考へてゐる人々がまだなか／＼少くはない。戦争を以つて悪魔の誘惑とし、平和を善神の行爲としてだ。然し悪魔と善神とが別存してゐるかの如き考へかたは、僕等にはその筋を善玉悪玉で運んだ昔の芝居の夢であることを忘れてはならぬ。

ところが、この昔の芝居の夢を以つて平和を論じてゐるものや、論じようとしてゐるものがある。それはかの香氣な世界主義者や抽象的な人道主義者等である。渠等は日本人でありながらその標的を先づ歐米人、否、白人種の偽善的な口吻に借りてゐる。白人種が耶蘇教を通じて世界に人類本位と云つても、つまりは白人本位の正義人道を主張したのは、白人以外の人類を征服する勝手な手段であつた。そんな物を遠見のまことにして、僕等日本人が自分等の足もとを危うくして溜るものか？

歴史あつて以來の最大戦と云はれる現戦争を見よ。世界に白人の征服すべきものは既に支那人と日本人との外になくなつて、而もこれが白人等にはなかなか征服し難いことが分つた今日、渠等は初めてその本性をお互ひの間にも露はしてうち輪喧嘩をやり出したのである。うち輪同士で征服の仕合ひを仕初めたのである。渠等が白人以外を征服するに當つて渠等自身に共有の道理ある標榜とした文明、神、正義人道等は、今や全く取り返しの附かぬ矛盾と破綻とを生じたではないか？

わが國の古來發展させて來た文明は、その特質こそ異なれ、今日となつては白人國には立派に對

抗若しくは超越出来ることが分つて来た。正義人道など云つても、民族並に國家の功利的存立を確めながら開展するものでなければ空想であることも分つて来た。

見よ、勞働的平和聯合や強迫的同盟罷工などの手段を以つて歐洲の戦亂を防ぐことが出来ると思つた獨佛の社會主義者等が、現大戰勃發以來打つて變つてはつきりと敵味方に別れた所以は何か？英國が「光輝ある孤立」をとつくの昔投げ打つたが、今回の戦争にはまた露佛と聯合したのは何の爲めか？メテルリンクが自國白耳義の爲めに獨逸からの中立侵害を叫ぶとも、僕等にはただ自國當前の軍備を怠つてゐた愚を自白してゐると同前に見えて、滑稽にしか見えないのは何の爲めだ？また世界中で、中立諸國よりもツと呑氣な存立が出来てゐたのは米國だが、それがまた近頃いよ／＼軍備擴張に目ざめて来たのは何故だと思ふ？そして最も滑稽なことには、敵と味方が同時に同じ神に勝利を祈願してゐる。かうなつては、理窟上如何に一神教だと云つたとて、耶蘇教の神もホメロスの神話神ゼウスやアポロやアテネ女神等と何等の違いもなくなつてしまつた。

耶蘇教とそれに伴ふ個人主義、人類主義とをさき觸れにした白人種の假面の剝奪！民族的若しくは國家的功利主義の覺醒！（かかる功利主義が淺薄な英國流のとは異なつてゐることは、さきにも度々述べた通りだ）そして歐米諸國人中でこれを最も早く正直に且大膽に實行したのはカイザルである。たとへ現大戰の動機がそこに在つたとしても、それを以つて直ちに不正義と見、また反人道と爲すの

は虚偽の叫びである。然らざれば、また、時代後れの觀察である。どの國でも苟も實力あるものは必ずこの民族的、國家的功利主義を以て、偽らず、従つておのづから大膽に、自國中心で他國に接渉若しくは征服手つづきを行ふべきである。

わが國の歴史と國民性とを深く研究し得た僕等日本主義者流には、以上の如き態度は最も古くからの習慣でありまた最も新しい發見だ。そこには平和と戦争とは別様のものでない。乃ち、肉と靈とが別物でない如く、この兩者も合致的に發展しつのである。僕等には戦争は日本の福音の宣傳であり、平和は日本の發展の戦争であつた。この方針は過去と將來とで變りがない。この故を以つて僕等には民族と國家とを離れた世界主義、人類主義は初めから無意義である。そして無意義、抽象的な主義や人道をわが國にしてわが國人が云爲してゐるのは、その自己の足もとを忘れて、薄ッぺらな外國語的知識を先入見として、愚かにも白人の偽善的、手段的口吻を模倣してゐるのに過ぎぬのだ。

聴くところによれば、かの猛惡な臺灣の生蕃中で、阿里山の蕃人だけが二百年來、人の首を取つて血祭りをしなかつた。どう云ふわけかと云ふに、それは一支那人の感化で——渠は通辯として同地に入り込み、よく蕃人を感化し、人の首を切ることをよくないことを教へた。そして皆これを呑み込んでたが、或時、どうしても誰れかの首を血祭りにしなければならぬことが生じ、渠のもとに來たつて許しを乞ふた。渠も事情止むを得ずと見てこれを許し、その代り自分が私かに變裝して血祭りにあが

つた。これに感じて以来、その蕃人等は人の首を切ることをしなかつた。

その支那人は多分耶蘇教信者かその傳道師かであつたらう。渠は、抽象的空想的な人類主義若しくは人道主義から云へば、如何にも有徳の士であつたらしい。然し實際的眞理から云へば、人の首を切る切らぬが渠等蕃人に何程の善悪であらう——まして切つた方が渠等の生存的努力を盛んにしたに於いておや？一族若しくは一國の根本的生存理由（これはどうしても實際的に求めるより外にない）を除外して、どんな有徳行爲も不必要である。無意義だ。

ところが、トルストイが絶対無抵抗主義を唱へたのがえらいとか、ロマンロオランが非戦論を書いたのが面白いとか云つて、抽象的に、否、殆ど空體にそれを讚美したり、それに雷同したりして、實際の眞理に叶つてゐるかの如く思ふ人々がある。僕等がこれを傍觀すると、多くは日本の教養に疎い翻譯家か、山出しの新讀書家だ。そしてわが國で餘り教養も受けないで外國に飛び出した人々には、もつとそんなのがありさうに思はれるが、結果は案外に僕等のやうな意見の方に近づいて歸朝するのが多い。それも外交官や留學生ではなく、却つて労働などもして來た人々にだ。

これはどうした理由だらう？外國に行つてわが外交官が徒らに安易の生活に慣れて來たり、わが留學生が専ら死學問をして歸ることは、僕等の常に甚だ遺憾に思ふところだ。それに比べると、米國あたりで労働までもして來たもの等は、前二者よりも一層實際的に生活して、白人のうわべばかりでな

く、本性から出る意見や行爲に觸れた爲めだらう。そして外國人が外國本位に物を考へる如く、日本人は日本本位で立つべきことを経験した爲めだらう。乃ち、その經驗が僕等の日本主義と一致して、民族的功利主義の純全化を來たすのである。（大正五年十二月）

民衆に根據ある政治の解釋

大山郁夫氏の『國家生活と共同利害觀念』（新小説）に於ける思想としての弱點は、舊式な雙對觀念を無反省に羅列したところに在る。合理——不合理。——生物的——心靈的。鬭争性——社交性。理想政治——現實政治。平等——不平等。かかる對立がたとへ全々無意義でなくとも、無用に歸するところを指摘すれば、渠の論文はここに根底から書き改めねばならぬことになるのである。

一、渠は優勝劣敗を自然界の法則とのみ考へ、人間界に於いてはこれを『制限』することが社會の基礎を鞏固にし、その秩序を維持する所以だと見た。そして獨逸が弱小國を蹂躪したのは不合理で、聯合諸國がその諸弱國の獨立を確保しようとするのが合理だとした。然しこれは人間界だからの理由ではなく、人間の一部が敵と味方とに分れたその一方に肩を持つからの見解である。公平に見れば、そのいづれにも理由が立つことは、自然界の事情と違ひはない。また、人間が老弱者、病者、貧者等を棄てないで保護することも、優强者の征服過程の一條件——面も些細な條件——であつて、たとへ

ば、路ばたの汚物をよこへ方づけるやうなものだ。世に恐らくオワイ屋の仕事を以つて一偉人の働きと同等に對立させるものはあるまい。

二、人間とその他の生物とを區別するに、心靈的と物質的との語を以つてするのも時代後れだ。すつと昔の宗教家は物質を心靈に依歸せしめようとし、初期の科學萬能論者は心靈をも物質視した。このやうな偏見は今日でも多く行はれてゐないことはない。現に、渠が『倫理性を賦與せられてゐる結果として、人間に特有なる心靈的法則』の支配があるとしたのなども、昔の宗教家的見解である。そして渠と僕等との間には、科學萬能説の時代もあつた。が、科學も現代的な僕等の思想に這入つては、物質と心靈との合致を説くやうになつた。従つて、人間と他の生物との相違は心靈的若しくは生物的と云ふやうな曖昧ではなく、合致發現の熱熱如何の問題である。如何に『人間のみを中心として考』へても、この合致熱熱以外の『必要』はない。

三、果して人類の鬭争性が生物的必要に生じ、その社交性が心靈的必要からであるならば、既に生物的と心靈との區別を撤した合致觀から云へば、無用な區別である。一方が反撥的、他方が牽引的と云ふのも愚な説明だ。『現下の大事件たる歐洲戦争』に『人間の鬭争性及び社交性、反撥力及び牽引力が千變萬化の種々相を呈して實際的作用を逞くしてゐることを知る』とは、そのまことにうわつたの持つて行きかたたるに於いて、子供の云ひ草を去ること何ほどでもない。殊に、鬭争性を力の關係

とし。社交性を倫理關係とするが如きに至つては、進んだ近代思想を渠は全く知らないのだ。倫理にも力の問題は這入つてゐた。そしてそれを十分に取り入れたのは近代になつてからだが、僕等に至つては倫理には——それが個人道徳にせよ、國際道徳にせよ——力、否、實力の問題しかないとまで考へてるのである。軍艦を軍艦と見、大砲を大砲としてあるだけなら、人間の熱熱に達せぬ物質的、生物的法則にばかり従つてゐるものかも知れぬ。が、人間の熱熱作用に動くものとしては、それはもう僕等の征服的倫理の範圍である。そして國と國とが相關ひ若しくは相合する如く、個人と個人との争闘や聯合もこの範圍内だ。

四、『國際道徳は個人道徳よりも劣等だ』と云ふ國民があれば、そしてそれは現今でもまた多からうが、その國民は偽善的發想をしてゐるのである。若しくは偽善とは知らないで、愚かにもさかしらを云つてゐるのである。一國內の個人間でも、實力を以つて征服し合つてゐるのが實際の眞相である。國家はそれで成立し、充實してゐるのだ。それ以外に理想政治も現實政治もない。まして理想政治を心靈的必要、現實政治を生物的必要など云ふ區別をや？國家を一面に『統一せる單一體』と見、他面に『幾多の鬭争群より成れる復合體』と見るのが、そも／＼の淺薄な間違ひで——統一と復合とは二の別方面ではない。僕等の解するところでは、一定の民族性に従つて各分子の征服し合ひに優強者が實現しつつある姿が表裏なき國家その物である。従つて國家が工場法、労働者傷害賠償法、労働保險、老

年金等、あらゆる社會政策を行なつても、また選舉權の擴張を採用しても、それは優强者の征服過程であつて、『不平等の平等化』ではない。若し優强者が弱者に平等化される國家があるとしたら、それは不緊張の國家、否、國家と云へぬ國家だ。で、渠が人民の利益や福祉の『均等化』と見做した内政策は、外交上の國力充實、國威の宣揚と別方面若しくは別方向のものではなく、根本に於いて一なる優强者出現若しくは産出の合致作用だ。

五、自己の主張若しくは擴張は、また、同類意識若しくは共同利害觀念と對立するものではない。近代の一般的倫理から云つても、自己は擴張されて同類の意識や共同の觀念になるものだ。まして僕等の優强者の道德では、國民に同類若しくは共同の觀念の起るのは優强者たる『自己』の勢力である。ただその自己が時と場合とに於いて内部的に變動推移してゐるので、洞察力なき形式論者等には分りかねるだけのことだ。國際聯盟でも職業組合でも、決して自己の犠牲や拘束を意味してゐるのではなく、全く自己の充實、優强者の實現を來たす爲めのものである。

然るに大山氏は以上僕の指摘した舊式の對照論法を以つて『學國一致』と云ふことを——内容的に見ず——單に數量的に解釋し、弱者を多數に數へる所謂民衆政治に走り、それ以外をすべて專制政治に見てしまつた。僕等でも、民衆に根據なき政治は如何にこれを善政主義と辯じて、または哲人政治と呼んでも、無意義なことを知つてゐる。が、民衆に根據を置くと云ふことは僕等には民衆を優强者

が征服吸收することであつて、決して民衆の愚論と愚情とを大山氏の如き民衆主義者と共に——如何に輿論と稱しても——そのままに勘定してはならぬのである。ここに僕が十數年來の主張たる優强者の哲學、國家說、並に政治論が成立してゐる。近頃云ふ哲人政治の概念などは、田中王堂氏のも、茅原華山氏のも、はたまた惠美氏の國民評論のでも、すべてこれから出て、而もここまでの内觀洞察に達してゐないものだ。(大正六年二月)

斷片語 (三)

▽ドクトルオヴノイロソフイ帆足理一郎氏が(『太陽』世界再造號に於いて)『傳統哲學』と云ふのは形而上學的傾向の哲學で、『新哲學』とはその反對なる事實的、經驗的な哲學のことである。『現實の經驗』事相すら容易に知悉し難いものを、況んや此經驗の背後にある相對的實在を——これを以つて哲學の職分とするなど云ふが如きは、寧ろ狂氣の沙汰としか思へぬ』とは、京都の「山博士等の形而上學者一派にはよく當つてゐるし。科學は主として記述的であるが、哲學は寧ろ解釋的である」とは、また、西田氏に對して立つた田中王堂氏の科學萬能的哲學の愚見に反省を與へるものだし『嚴格な意味に於て人間の思考は皆主觀的である』とか、『肉體も精神も同じ生命の運行を助くる二個の異つた機部であつて、精神と肉體とを截然區別するが如きは全く不可能である』とか云ふに於いて岩野泡鳴の新哲學

なる肉靈合致説に接近してゐるし。兎に角、帆足氏が舊式な哲學思想の打破に新しい傾向を攫まうとしてゐるのには僕も賛成である。けれども哲學を方法論や論理主義にとどめてゐるのが田中氏や東京帝大の桑木博士の一大缺點であると同時に、帆足氏もまだこれを脱してゐないのではないか知らんと思はれるふしがある。乃ち、『絶對的完全の實在は……人間の理想として前方にある、將來にある』と。これでは、渠の所謂新哲學も矢ツ張り無制限の論理か、天に向つてかけたはしごの如き方法論かにとどまるのである。僕の新哲學なる刹那哲學では、實在を理想化しないで、飽くまでその刹那の緊張に於いて體得、體現すべきものだとする。これは論理でなく直覺であり、方法よりも寧ろ實行である。若し理想化された實在的思想を實行しようなどと云ふ、それこそ『狂氣の沙汰』に及ぶならば、帆足氏もかの慶應大學の鹿子木氏のやうに新理想哲學などと云つてプラトンまで舊式化してしまふより仕かたがなからう。

▽谷本博士のデモクラシ論が無國家的精神を發表してゐるのであることは、本誌前々號に於いて木村氏が十分に指摘してある。ところで、六月の中外を見ると、博士はそのデモクラシを『新たにソリダリテーデモクラチクと名づけて』その意譯を『自由平等連帶義務の社會』と爲し、この實施は(一)決して戰爭に國家を弱くしないこと、並に(二)戰爭防遏上に最も有力なことを論じた。一國が民主主義の爲めに戰爭に強くなつて、他國からは挑戦して來られぬから戰爭防遏になると云ふのなら、思想も論

理も一貫するわけだ。が、渠はこの二考察に於いて無反省な矛盾を示してゐる。渠の戰爭防遏とは僕等直接の實想に基づいて云ふのではなく、あり來たりの各人平等とか萬國平和とか云ふ夢想から出てゐるのだが、萬國平和なんぞは世界の統一と同様實想的考察の條件になるべきことではない。若し世界の統一が行はれたら、各國の獨立がなくなる時、若し『國家の強迫などは大方はその跡を絶つ』ところのデモクラシが實現したら、無國家となる時であらう。かかる民主主義がどうして國家を強くしようぞ？軍國主義や警察政治に對する渠の反抗心が直ちにそんなものに馳せたには、渠がいまだにスベンスサなどの單純な社會思想に停止してゐる所以のみを自證してゐるに過ぎない。

▽或新聞の社説に、『現今の戰爭は國と國との間の戰爭とのみ觀るべからず。道理と不道理との間の戰爭の意味あるを知らざるべからず』とあつた。けれども僕等は新哲學の立ち場からして客觀的に道理の存在すると云ふことをも疑ふものである。まして何が道理であるかと云ふことは、自己若しくは自國の利害を考へに入れてでなければ、大きくも小さくも考へられないものだ。たとへば、米國大統領の提唱する道理が若し果して英佛露に共通の性質を帯びてゐてもわが國が日英同盟に縛られてゐなかつたら、それを尤もだと云つて受けてゐられようか？まして米國も道理はまた米國の都合のいい時に米國に都合のいいやうに提唱されたに於てをやだ。この場合、『私は小にして公は大なり』と云ふやうな考へで米國に就くのは、直ちにわが國をわれから米國の屬國と見做してゐることにならう。かかる無

反省な觀念を所謂『世界の日本』が持つべきことにして、これを『心ざし高大』なりとし、然らざるを『偏狭』と爲すが如きは、自國の存在を忘れたものであらう。問題は加藤高明氏が單に日本の利益を基礎として出兵の得失を判断したことに起つてゐるのだが、僕等に西比利亞出兵の如き時事問題を離れても、世界の日本とは世界に支配される日本ではなく世界を相手として自國の利益と福音とを發展させる日本のことであるを確かめてゐるのである。

▽新渡戸博士が(新日本に於いて)抑壓主義の官僚政治を頻りに攻撃してゐるのは、渠の官歴から考へて見ると滑稽なほどに面白くないことはない。が、わが國在來の官僚政治と外國流に考察された民主主義との間には、なほ大きな間隙があつて、決して一方の否定が直ちに他方の肯定となるわけのものではない。動かすべからざる國體とか、共和國と君主國との相違とか云ふことなどは別にしても、なほいろんな問題が横はつてゐるのである。前項に云つた如き一國の利害を離れて客觀的な道理はないと云ふことも重大な問題だ。今、この點から云つても、渠は事實的な洞察をしてゐないことが分らう。渠が『國家的より國際的へ』轉換すると云ふ政治主義の樞機は、『公平無私』とか『眞正の行爲』とかである。そして米國參戰の動機を渠は——『米國事情に就ては好く解したつもりである』所以を以つて——間違ひなく義侠であり、人道的犠牲であるとした。これ、さきに僕が攻撃した姉崎博士の議論と同一の愚論である。一體、この兩博士は一方に米國のお雇ひ同情者となつてゐるやうな傾向のある人

人だ。それが米國人等のおもて向きをそのまま僕等に傳言するには少しも不思議はないが、米國人その物が蓋しその行爲を眞正としたり、公平無私だと云つたりする自判の標準はどこに在ると思つてゐるのだらう？敵に對しては既に無私ではない上に、味方一般にも——その參戰の後れた所以を考へると——必ずしも共通の道理からではなかつた。して見ると米人等の所謂公平とか犠牲とか云ふのはその自國の利害を修飾した言葉に過ぎないのだ。これが傳言者なる新渡戸氏等は、國家なる物を外部から見てゐる點に於いては、渠が攻撃する官僚政治家どもと大した相違がないのである。僕等は本誌本號掲載の木村氏の議論と同様で、國際主義を直ちに非國家的非愛國的などとは云はない。が、新渡戸氏等の國際主義は——大きく云へば日蓮の知つてた世界主義的傾向の如く——結局、國家を「永遠の勝利」とか客觀的眞理とか云ふ空想の爲めに犠牲にするものであるに於いて、僕等はこれを非國家的と見做すのだ。

▽或雜誌の抜き書きにチャルズランドンの言として、『音樂は世界語である。言葉にあらはす道が絶えたとときそこに音樂の力が顯はれる』とあつた。いつもながら、音樂最上藝術論から來た愚論たることは免れない。かのプラトンでさへ一國の音樂が變遷すればその國の精神も變遷すると云つたではないか？如何に國語の伴はない器樂だつても、その旋律や調子にはその國人でなければ分らないことが多い。我長唄の名人が或時西洋樂を聴いた時の感想を質問され、何となく賑やかな心持がしたと答へ

たが、何ぞ知らんそれは實際に葬式の哀歌であつた。また、或西洋音楽家がわが國のカツボレを聴いて、快活よりも寧ろ悲哀の感じを得たと云ふ。言語的制限がないのを見て直ちに音楽を世界語的など云ふのは最も皮相の見解である。言語のよりもツと不自由なテクニクに音楽は縛られてゐる。だからあべこべに、音楽でも云ひ現はし得ないところを一國の言語は現はすものだ云ふ方が一層内部的な考察の道であらう。萩原朔太郎氏が『詩と音楽との關係』(早稲田文學六月號)に就いて僕が十年以前に既に説いて置いた意味を解釋し、且『私共の詩の中にある戀しいといふ言葉は、戀しいと云ふ日常語の表情やアクセントで發音し、しかもそこに内部的な韻律や音楽を感知せしめるものであつて、必しも音楽的の旋律によつて唱歌すべきものではない』と云つたのは、音楽から獨立して詩の立ち場を能く云ひ現はしてゐる。が、この意味で嚴密に云へば、言葉の音律は音楽の音律とは根本から違ふのだから、これを渠が『言葉の音楽』、『内部的な……音楽』などと云ふのにさへ僕等は渠の所謂『耳を借すな』と注意したい。何となれば、かかる發想は甚だまぎらはしいことの一つであつて、昔、繪畫を無聲の詩、詩を有聲の畫と云つたと同様の比喩に過ぎないからである。

▽西宮藤朝氏に今一度言葉の費さねばならぬ。渠は讀賣新聞に於いて僕の認識論排斥を『全く無暴な考へである』と云つた。が、僕は僕の『法學士の大蔵』に作者の個性が遺憾なく現はれてゐると云ふやうな全く見當違ひの批評をする程の如き初學者にも認識論は不必要だなどとは云はなかつたのであ

る。一般の初學者には認識論も形而上學と共に一應は覚えさせる必要があると僕だつても知つてゐる。そして僕が認識論の不必要を知らせたのは、新哲學の見地からして、形而上學者並にその傾向ある舊式哲學研究者等に對してであつた。だから、僕が西宮氏を以つて渠等の連中に加へた考へでゐたのさへ、今となつては買ひ被りであつたことを渠の答へで知ることができた。僕等の世界は渠が教科書で覺えた哲學などよりははずと進んでる筈だ。(大正七年七月)

▽土田杏村氏の『わが思想界の現状を論ず』(雄辯七月號)を讀んで少し云つて置くべきことができた。渠がアカデメヤ派の一人を以つて任ずる爲めにいくらでもその誇學ぶりを演ずるのは勝手であらう。が、非アカデメヤ派なる僕等を以つて直ちに通俗思想家と見做したのは片腹いたいことだらうと思ふ。わが國現代の諸大學の學風ほど、僕等から見れば通俗なものはないのである。プラトンに行かうが、カントに行かうが、はたまたラセルやフサルに行かうが、その傾向は學問の新らしい意味から云つて餘り通俗な系統を引いてゐるではないか？ラセルの所謂『宇宙の市民』とは言葉が多少新らしいだけであつて、その概念は永恒の、云ひ換へれば固定の、眞理なる物があると見ての、その體現者たることを空想してゐるに過ぎないではないか？また、如何にフサルが『一時の爲めに永遠を破るな』と云つたとて、新哲學では、殊に僕の利那哲學では、永遠は初めから一時の爲めに破れてゐるところが渠の哲學思想では分らなかつたのだ。

そこにかかる舊式俗悪な、然し土田氏には非通俗と見えた人々を後援として、氏が僕等に就いて云つたことを調べて見ようが——三井や木村氏は別に答へるだらうから、ここには僕だけの範囲で云ふ。僕の現實主義は肉なる靈の直覺に立脚してゐるのだから、この哲學では肉と靈との別々若しくは異質を認めない。従つて、その合致とはいつとも同一だと云ふことで、渠の解したやうな合致點などが別に割り出されてはならぬ。僕等の直覺に於ける肉なる靈その物が却つて實體であつて、僕等の刹那的充實生活と共に起滅する。そしてこれ以外に人生の實體はない。かかる實體若しくは生命が形而上學で固定されるやうな永遠的概念に決定されよう筈はない。ここに世界の新哲學がわが國に既に十年前から起つてゐるのだが、ラセルやフサルを新らしがつてゐる土田氏の如き通俗な事大主義者にはそれがまだ分つてないのだ。

それから、ついでになほ二つのことを辯じて置きたい。その一は、僕等は決して論理や概念を徒らに『排斥』してゐるのではない。一般形而上學的にらく／＼とまた無制限に引き出せる論理や概念を具體化力に乏しいとするものである。たとへば、論者が『宇宙の市民』と云ふことに雷同したり、『現實的事實は毫も批判の根據となることがない』と云つたりしたに於いて、少しも限りある人間の具體力を考へに入れてゐない。事實に反してゐることは現實の主觀者には直ちにいけないと批判できるではないか？次に、渠は『象徴的言表と言ふものについて可成りに周到な研究を試みた』が、『文法學

と言語哲學の幼稚な我が國ではこれを述べることに餘りに専門的に過ぎる』とえらさうに云つた。が、幼稚なのは恐らく渠自身の思想であらう。思想が圓熟すれば、既成の文法學や言語哲學などを借らないで、自由に文法や言語はこれを獨創的に驅使することができるものだ。殊に、その象徴的言表（恐らく僕の度々云ふ表象的發想と同じ意だらう）の場合に於いてはだ。

▽雜誌中外に於ける今井三郎氏の米國精神と民主主義との紹介を見ると姉崎新渡戸兩博士の外にまた一人米國の大代辯者が増えたわけである。渠は民主主義を米國に於いて充分研究して來た人と云はれる。そして同主義の精神は神と相對する心持ちにならねば實際に完全に行はれるものではないと云ふ宗教的民主主義者である。そしてその云ふところを摘要すると、民主主義は世界の大勢である。日本もさうならねばならぬ。ところで、この主義の完全に行はれてゐるのは米國で、米國人の精神は實に宗教的にまで民主的である、と云ふのだ。これほど露骨にわが日本を侮辱した議論は少なからう。米國人の宗教は耶蘇教である。其民主主義 共和主義的である。之が世界の大勢だから、日本もさうなれと云ふのだ。僕は渠に一言日本人は米國人でないと言へば足りよう。（大正七年八月）

▽本誌前々號の所論に對してドクトル帆足理一郎氏から答辯が來たので本誌に掲載することにしたが、ここになほ少し云ひ添へて置きたい。

渠の答辯は丁度西田博士が田中氏に答へたのと同じやうなものである。西田氏は田中氏に向つてお

それは經驗論者ではないぞ、プラグマチストでもないぞと云つただけだ。これでは答辯にならぬ。若しまたこれを答辯としたら逃げを張つた消極的答辯である。帆足氏も亦僕に對して刹那主義者ではない、充實論者ではないと答へたに過ぎない。僕の與へた注意の要點を逸してゐる。お互ひの立ち場は、渠には突然の攻撃でまだ分つてないやうだが、僕には十分に分つてゐる。僕が分つてゐる上で攻撃的注意を渠に與へたには、お互ひの立ち場の善悪當否問題である。これを避ける人は、避けるで勝手だが、攻撃者には再び被攻撃者の立ち場説明などは無用である。直ちに僕の論據を突いて貰ひたい。

然し僕は渠のを答辯と見ず、ただ辯解として受け取つて置くことにする。が、その辯解の仕かたにまだ僕は不満である。渠が哲學上の經驗論者若しくは現實主義者として、『實在として實在する』理想を排去したのはいいが、なほ要望としての理想を假定するのはまだ舊式思索の餘風を脱してゐないと僕は云ふのである。まだ新しい經驗論、現實主義の哲學の眞底に達してゐないのだ。たとへば要望としても理想を現實から分離させて考へ出すのはまだ遊戯分子がまじつてゐるのである。僕等は理想などと云つて分離を許すことのできないほど緊張充實した刹那の生存威力を如實に認めてゐる。そこで渠の如きまだ舊式な經驗的理想論者をもあざ笑つて、直ちにかかる現實主義的刹那哲學に來たれと叫ぶのである。

次に、渠はかかる刹那哲學を僕の獨得で世界に創設した新哲理であると氣が付いてゐないから『刹

那の感興に生くる』とか、『個人々々の刹那の享樂』とか云ふことに受け取つてゐる。それが淺薄通俗な思ひ違ひであることは、僕がこの哲理に據つて日本主義を唱道するに見ても直ちに推察されることだと思ふ。そしてこれは『久遠の進化』と云ふ科學的空想に流れたり、『兄弟的博愛』と云ふ世界主義的傾向の凡俗宗教に行きつゝものではなく、飽くまで對抗意志發表の實想であり、優強個人主義的獨存國家の征服愛の宣傳である。

▽文學士桑田芳藏氏の『國家より人類へ』(丁酉倫理七月號)は國家的並に人類的意識の發達を心理學上の材料から説明しようとした物である。が、それが心理的説明であらうが無からうが、考へかたに間違ひがあらば取るに足りないのである。

人群から種族、種族から國家と發達したのであるから、國家からまたそれを離れた人類的若しくは世界的團體に行くだらうとは、ただ計量的にうか／＼考へてゐるものには誰しも思ひ至ることであらう。が、人群や種族の意識にはまだ緊張充實を要する餘地があつたら、それに代つて國家が實現したのだけでも、國家の意識となると、もう人間はこれに離れられないところの制限、乃ち緊張力にぶつかつてゐるのである。ここまで來ると、人間は國家を没却するのは、直ちに人間の破滅である。渠も『國の區別とか人種の區別とか云ふものは凡て没却して』の世界的意識などは『此地球上の全人類が、例へば火星に於ける人間以上の動物……と戦争でも開いた時分に初めて……實現される』と軽く見て

あながら、『兎に角此世界的の意識が……國家的の意識と相並んでゐる』のを事實とした。

けれども、この兩者は決して並行してはゐない。世界的意識によつて人道とか正義とか云はれてゐるものは、今日まで空理上の名分であつて、實際は國家發展の手段として不正直な主權者が利用して來たに過ぎぬ。その上、桑田氏が引例にしたアレクサンドロスや羅馬の世界的帝國は國家その物の擴張であつて、決して世界意識の爲めに國家意識が少しでも縮小したのではない。然るに、これをも世界意識のうちに數へるなら、これが『日本の歴史をすつと昔から大正の今日まで通覽して見ると、どこに……現はれて居るか』と否定したのは渠の研究の貧弱を示めしたばかりである。眼を開いて見よ、太古は天祖の詔勅から明治大帝の日露開戦の宣言に至るまで、その精神は善い意味にも悪い意味にも日本の世界的征服心がびく／＼と活躍してゐるではないか。そして清濁共に吞吐しつつこの意識を國家的に發展させるのが日本主義の偉大な政治でも宗教でもあるのである。

『全世界の文明に貢献しようといふ意識はなか／＼日本人には起り難い』などは、神經遲鈍學者が無研究の獨斷だ。文明の世界的貢献とは、僕等には、僕等の持つてゐるこの福音を國家的に押し廣めるより外に道がないのである。

▽國字の單純化問題が國語の單純化になつてはならぬことは分り切つてゐるが、このことに連れて西宮藤朝氏は東方時論(八月號)に於いてをかきなことを云つてゐる。一は漢字の精神化、今一つは文章體辯

護である。渠は『漢字の中でも、言語そのもののやうに、吾々の精神の一部となつてゐるもの』があると云つたが、僕等に精神化してゐるのは矢張り文字の運ぶ言葉ばかりであつて、どんな字でも字その物ではない。

それから『嚴肅な氣持を表はさうとする……場合には口語體よりも文章體』がいいこともあるとは時代錯誤である。雅文若くは漢語口調の文章體を嚴肅だと思ふ人は、その精神が現代に住んでゐないのだから、現代の文章を云爲する資格がないのである。現代に於ける文體の變化は口語脈の範圍に於いて論すべきもので、それを越えた變化は無用の變化である。そしてこの場合の用不用は渠の所謂利用萬能ではなく、僕等の生活上必然の歸結だ。

▽田山花袋氏の主觀なる感傷心のます／＼見ツともなく現はれたのは『Dの詩集』と云ふ小説(文章世界八月號)に於いてである。Dとは國木田獨歩のことだが、獨歩が『僕は人間である、(自然)主義ではない』と云つたのを渠は追想して、『人間の魂を深く見たものにして始めて言へる言葉』だと見た。そして『渠の年輩でここまで達して行くことは容易なことではなかつた』などと賞めてゐるが、主義の確立しない人間は魂がまだきまつてないのも同然だから、深いところへは這入つてなかつたのだ。年輩を問題にしたいのなら、寧ろあの年までもにがい經驗がありながら主義を無自覺でゐたのを責むべきであらう。田山氏は作者としての主觀のたがも緩んでるやうに受け取れる。さればこそ、輕薄な

七五の調子につれてころげ出た詩句の間に『不朽の戀』などを獨り合點で觀じたのであらう。對者を失つてまでも猶その對者を愛するやうな戀をしたものはあるであらうか』とは、餘りに見識が落ちてゐる。消極的には誰れでもあれ位なことは云ふものだ。そしてあの當時の詩人どもは——殊に、獨歩や宮崎湖處子の連中は——消極的な感情をいいことにしてあツさりと歌つたのである。決して深い根底からではなかつた。(大正七年九月)

一三三 現大戰氣分と考察

現大戰の氣分と考察

歐洲に於ける現大戰の實景若しくは實際の氣ぶんを簡單にまとめたものがあらば見たいと兼ねて思つてたが、寡聞にして得られなかつた。ところが、ふと、エドワードカペンタの昨年十月に公にしたと云ふ冊子『決して再び』(新社會掲載、石川三四郎氏譯)を讀んで、これが可なりよく僕の註文に應じてゐることを發見した。カペンタ自身はその根本に非戰主義的傾向の世界主義を以つて書いたのだが、そんな主義の根據は、直ちにこれを根據として、これをうち破ることが出来るから、兎に角論駁はあとまわしにして置くが——僕の見たい得たいと思つたのは必ずしも戰爭を残忍な武器を以つて仕合つてゐる實景ではない。然し、現場に於ける戰爭状態の全部若しくは一部に發揮されてゐる實際の氣ぶんをだ。戰爭に於いて敵と味方とが如何に緊張してゐても、四六時中絶えず大砲のたまを投げ合つてゐるのではない。一回の渡り合ひで勝負を決するやうな場合には、無論何晝夜でもつづけざまのこともあらうが、現に三年にも渡つての長戰爭である。前陣後陣の交替もしなければならぬ。陣地の變換もしなければならぬ。對陣してもどちらからも戦ひを初めにくいこともある。また、食事もしなければ

ばならぬ。かかる場合は緊張中の餘裕である。そして餘裕がある時は、人間だから、矢ツ張り、その時相應の遊戯性も現はれる。親切心も出る。平和になつた後の状態もさながら浮ぶ。これらのことも亦戦争の氣ぶんの一部に數へ入れることが出来る。

カペンタはおもにさう云ふ方面の材料を以つて書いた。そしてそれが、一見しては、愛國的犠牲の精神など——或條件のもとに——讚美してゐるところよりも、一層人間に眞實らしく見える。敵對兩軍の兵士達が、諧謔の中に朝の挨拶と唱歌とを交換したる（北部佛國の塹壕中に於いて、又東方の戦線に於いてさへ、幾度傳へられたか分らない）兵士達が一朝、一語の命令が下るや否や、彼等は直ちに相射撃せねばならぬとは『すべてこれ明かに狂氣の沙汰で決して再びこの様なことが起つてはならぬと云つてゐる。或英國兵士の談話を引いて、『私共はその向ふ側の塹壕中のバベリヤ兵と親友となり、若し今是れと對するとせば、どうしても互に相戦ふことは出来ぬと思はれる程になりました。然し、勿論、この事が分つたので、他の方面へ回されました。』

また渠が書いてゐる所によると、獨逸兵の塹壕からたび／＼『憎惡の歌』と云ふのが聽えて來た。すると、英國兵はこれに密かに毎日耳を傾け、その文句とふしとをすツかり覚えてしまひ、全曲を聽きおぼえに完成した上で、全隊でこれを合唱して向ふの獨兵を驚かせた。そして終りになると、『神よ、英國を罰し給へ』と祈禱するやうに叫び、最後に『洪笑の一大咆哮を以つてした』そして渠の解釋に

よると、敵も『多分命令せられ強制せられて歌ふのであらう』からこちらも『素より獨逸の憎惡を眞面目には取らないのだ。』

ちよつと話がそれるが、日露戦争の時、旅順の或谷を隔てて日露兵が對陣した時、露兵が圓いしるしを眞中に書いた板を壁上にかかげたので、撃つて見よと云ふのだらうと思つて我兵がさうした。それがうまく當ると、今度はもツと小丸をのこした板を出した。それをも打ち當ると、また小丸の板が出て、今度は一士官がそれと共に壁上にあがつて、何かこちらに向つて語つた。これならとても撃てまいとでも云つてゐるやうなので、こちらでも一士官がからだを現はしてまたうまく撃ち當てた。賞讃の聲ウラーが向ふから起つた。これに似た話をカペンタも書いてある。ここに文句通り引用する。

『ある日のこと、三十或は五十ヤードかなたの塹壕中にありしサクソン兵は「英國人は馬鹿だ」と書いた黑板を高く建てた。その黑板は勿論無数の銃丸を受けて、やがて倒れた。次いで再び建てられたのは「佛國人は馬鹿だ」と書いてあつた。それが再び可成りの射撃を受けて倒されると、今度は「露西亞人は馬鹿だ」と云ふのが建てられた。又同様のあしひがあつた。されど第四回目に現はれて同一黑板に書かれたのは、實に「埃國人は馬鹿だ」であつた。更らに第五回目に「獨逸人は馬鹿だ」が現れ、第六回目に「われらは悉く馬鹿だ」とあつた。』

これからそろ／＼批評に入るが、渠はさう云ふ戦中逸話をすべて人間の非戦論的傾向に持つて行つて、『政府なる物の狂亂せる政策がおよそ前に記せし如き良民を驅つて之を殄滅に委することに思ひ及べと云つた。武者小路氏などはこのやうな口調を真似て、一層呑気に『悪魔がその人の心を異常な状態に持ち去らない内は——休戦の時や、談判しに行く時や、兩軍の死骸を片付ける時の話をききましたが、お互に煙草の火をやりとりしたり、仲よく笑つて話したりするのですね、その時は又特別の愛を感じるらしいのですね』など云つた。然もこの場合、それを特別な愛などと感ずるのは、少しくつろいだ時の遊戯分子をそれだけ別に切り放して、固定的に鑑賞したことである。

人間の生活中には遊戯もあるが、遊戯だけを決して獨立させて考へる事は出来ぬ。或程度の緊張に引ツ張られてゐてこそそれも生活中のものである。そして戦争は——その如何なる形に於いても、乃ち、實戦でも平和戦でも——最も緊張した生活である。この緊張中にも遊戯が出るのは少し矛盾だと思ふものがあらうが、それは小海にも大海にも浪は立つことを知らぬものだ。浪は海のゆるんだ時の皺であつて、海がなければ存しない。人間の生活と親切な遊戯分子との關係もそれで、かかる逸話が出ればこそ、戦争も悪魔の仕わざではなく、まことに人間その物のいい本性から生ずることを證明してゐるのだ。カペントはわが日露戦役中にもあつたと同じ事實により、『互に狂亂して傷け合ふたる此等の敵が——僅かに數分の後——非常な喜びを以つて互ひの創傷を繙帯し、壘中の水の最後の一杯を

相分つたと云ふ事實が幾度行はれたか知れぬ』と云つた。が、ここに必ずしも平和論若しくは非戦論の證明を得て來ることは出来ぬ。蓋しこれは遊戯と緊張とが最小程度に合致した心持ちで、どうせ死ぬなら一緒に死なう、若しくはどうせ受傷したのなら直つてから改めて戦はう、と云ふのだ。これも決して戦の心持ちを離れたのではない。同じ事實が日露戦役にもありながら、それが僕等一般には非戦論の根據にはならず、何故にカペント等ばかりの利用するところとなるのか？非戦論者又は人道主義者に云はせれば、渠自身の先入見などは忘れて、僕等にばかり高尚な微妙な教養がないことになるのだらう。然し如何に高尚や微妙と形容されても、實生活を放れた教養などは僕等にはあつて欲しくない。渠は自國の『軍人達が眞衷心に於て些かも敵に對して悪意を懷かぬのみか』と云つたが、それは誇張か空想であつて、恐らく事實ではなからう。英國人のうちでは軍人どころか、商人どもが——軍人よりも多數な筈の商人どもが——而も自國の強みと人種の相違とを頼んで、敵人どころか、同盟國、聯合國なる日本の國人を却つて目のかたきにしてゐる事實はどうか？渠はそれにまた、一方では『常に彼等が（彼等の十中九まで）その如何なる意味に於いても實際自己のものとは言ひかぬる國家の爲めにわが生ける血を捧げてゐること』を、自家撞着にも、『英國兵の善良なる、丹心なる、素樸なる、如何なる讃辭も以て之を賞するに足らず』と讃めた。

更らに佛蘭西人に就いては渠は『ゼルマン群衆の侵入を防がん爲め全人民は、——藝術家、文學者、

その他すべては——喜び勇んで死に赴いた」と云ひ、「聞かずや、ペリカアル少尉の一條を。ポアブリユレに於ける屍滿てる塹壕中に彼は突然恍惚となりて「死兵ら起て」と大聲叱呼した。かくて彼の兵士等はその死せる戦友らの心霊に圍繞せられ、戦勝の鼓吹を受けた」と。この少尉の事實は、僕が曾て書いた『戦話』と云ふ小説の主人公なる軍曹が、その屬する聯隊の全滅にも拘らず、獨り生き残つたので聯隊長の格になり、いつもの口癖なる『沈着にやれ、沈着にやれ』を以つて死兵どもに命令し、狂亂の幻影中に進み行き、旅順ビイ砲臺に誰れよりも近く迫つて戦死してゐた事實とよく似てゐる。

然し戦争の氣ぶんの事は、もう、十分になつたとして——英國人の多くがその國家を自己のものとして云ひかねるなら、その國家の強みを背負つて戦争に参加したのは果して單にアスキスやロイドジョージ等ばかりの仕事か？この戦争がすめば、再びマンチエスタの製造品の達するところでは、必らず日本商品の官憲的に排斥される恐れがあるのを見ても分る通り、商業的にも敵國なる獨逸に對して英國人民がまさかそんな單純なことではなかつたらう。また佛蘭西を以つて渠は『この戦争よりして一變せる國家となつた』とし、『一八七〇年に、國家がなほ抵當として占領せらるるに當り、淫蕩なる詩を作り、嘲笑的歌を唱つた人民は最早存在しない。而して佛蘭西はその前途に横はる大事業——歐洲最初の民主國を建立し、將來の歐洲聯邦の首石たらんとする——に向つて斷乎として眞面目に歩を進む』とある。

渠は佛蘭西に對しては渠自身の偏見若しくは虚偽な斷定を與へず——これは最初の被害者で、敵に最も手近い受け味となつてゐるからでもあらう——『自國なる語は佛人に於いて英人に於けるよりも眞意義あり』とし、『佛國兵が顯揚せし(愛國的)精神の如何に偉大にして如何に稱讃すべかりしか』を云つた。そして獨逸人のことを『祖國を救はん爲めに戦ふのだと稱せられる。されど吾等の實證せられし處によれば、彼等が如何に虚偽なる教育を受け來りしか……疑ふべくもない』と云つた。渠が佛蘭西を讚め、獨逸をけなすには、なほ一つの偏見がある。乃ち、渠はどうしても共和政體民主主義を行かなければならぬと云ふ人だ。獨逸は無論まだ立君獨裁を脱せぬ國であるので、民主的若しくは民主的傾向は英國や佛國のそれほどには行つてないだらう。

然しそれだからその君主が侵略的になり、その人民が心にもない侵略的教育を受けたとは云へぬ。英國を肩に着て、さきにはクライプやヘスチングが印度に、最近ではシムローツなどが南アフリカに一般の帝王よりも一層甚しい侵略を行つたのはどうか？共和國なる佛蘭西が亞細亞に於いてまでなほ占領地を有してゐるのはどうか？侵略的發展に於いては佛蘭西は獨逸よりもさきがけをした。そして英國に至つては、もはや發展の餘地もない程に世界をわが物がほにしてゐる。三國の間で一番立ち後れをしてゐた獨逸も、他の二國に初めからあやかたかつたのである。この精神は獨逸としては帝王たると人民たるとに變りがなかつた。これがビスマルクの政策となり、トライチケの卓見となり、

今のカイザルの實行となり、人民もその氣になつて苦戦するのが、どうして虚偽の教育の結果であらう？たとへ敵に對する友情や逸話的事實が『大抵先づ獨逸がはより仕向けらるる』と云つても、それは緊張中にも無邪氣な餘裕、乃ち、遊戯分子があることを示した態度でこそあれ、決して渠等が教育の結果を裏切つてゐるのではない。

開戦の當初には獨逸にも英國にも目算の當て外れがあつた。前者にはまさか後者が敵がたに参加しまいと思はれた。後者はまた露佛以と聯合すれば前者などを何でもなくやツつけられると考へた。それが實際ではどちらも豫想外であつた。こんな誤算の故を以つて、渠が若し『國家の政策及び外交の指導は最早これを少數華胄外交家(多くは現代世界の實狀に無智なる)の手に委すべきに非ず、寧ろこれを大多數人民及びその代表者等の最嚴密なる調査監督に附すべきこと』であると云つたのなら、まだしも領けるのである。が、さうすれば全く戦争がなくなると思つては間違ひだ。渠等は勝つても負けても、また勝負なしに終つても、矢ツ張り形を換へて戦ふのが事實だ。

『勇氣や、思想に對する献身や、祖國に對する愛や、僚友に對する信義や、實力や、冒險の敢行や、組織の精確や、凡そこの種の諸徳は、過去に於ては軍職をして偉大ならしめ光榮あらしむる所以なりしも、是れ寧ろ、凡そ未來に於いて、偉大自由なる産業軍の爲めに要求せられ、鼓吹せらるべき性質なること』を了解してもいい。が、渠の所謂産業とその結果なる貿易とは、その内容に於いて渠の所

謂『狂的戦争』の氣ぶんとどこに違ふところがあらう？渠は産業を解放すれば、人は『嫌惡すべき非人情的事物は斷じて之を再現してはならぬ』と叫ぶやうになると云つた。然し、如何に解放された産業をでも、かの翻譯的人道主義者が人道を見るやうに固定的に考へては空想若しくは不用であらう。産業の解放は産業の進歩發展を一しほ意味してゐなければならぬ。従つて、その所産のはけ口をも一しほ發展させねばならぬ。そこに個人と個人との間に於けるが如く、一國と一國との間にも争ひは絶えないではないか？

個人として富むのは或は人爲的に制限する事が出来るかも知れぬが、一團體若しくは一國家として富みの進むことは制限出来ぬ。また、國際上に軍備の制限は或程度まで約束されなくてもなからうが産業及び貿易の發展は、一國一國の生活であるから、これを妨げる何等の約束の理由もない。然し一國のかかる發展を他國が競争、制止若しくは妨害する自然的實際的理由は國境と勢力範圍とである。そしてこれをも解放して全く個人と個人との競争にまかせるとして見たところで、それがたとへ同國人若しくは同人種であつても、兩方からの持たせ合ひの遊戯分子を含む戦争の状態である。ましてそれが他國人同士であるとすれば、如何に會て同じ塹壕で互の負傷を助け合つた仲でも、どツちかが勝たう若しくは負けまいとすれば、どうしてもその自國人の力を借り、また問題が大きくなればクライブやローズの如くおのづから自由の保護を仰ぐのである。そしてそれが兩方の國と國との問題に

なれば、相變らずその戦争に彈丸硝煙の花が咲くのだ。

斯う云ふ場合を豫期して、少しでも悲惨の事を減少させる爲め、軍備の制限や中止的傾向を互ひに約束するとする。これただ第二の白耳義を澤山作り出すやうなものだ。どうせかかる約束は人性の自然——精神的にも物質的にも——に反する偽善行爲であるから、その約束にそむいて、たとへば獨逸のやうに私かに苦心して戦備をしてゐたとしても、悪い意味に取る方では暴を以つて暴に報いたに過ぎぬ。若しまたいい方に取れば、却つて正直で且卓見だつたのだ。徒らに中立國となつて安易に貧窮爲め、軍備を怠つてた白耳義の如きが、それと利害關係ある英佛と共になつて獨逸に對して不正義を叫んだとて、今更ら卑劣な手段でしか無い。それをも知らぬふりで渠は取り澄まし、『國際的結合の花——是れは既にその蕾を形成し初めてゐる——全世界に共通なる自由労働及び人道の大義——が必ず實現せらるる』爲めには、『先づかの四方四國、乃ち、英佛伊白の諸國が二三中立國と結んでここに最初の歐洲聯邦を構成するかも知れぬ』と云つて、これにはやがて獨逸をも眞の『共和的政體』にしてから引き入れてやれと。この意味を押し詰めれば、君主若しくは少數爲政家の勢力が減じて、人民若しくは労働者の政治になれば、國と國とは段々戦ふやうなことがなくなると云ふに在る。

渠もあの論文では、兎に角はツきりと非戦論や軍備撤廢を唱へてはゐない。が、渠は民主主義者であると同時に例の淺薄な空想的社會主義者、世界主義者である爲めに、矢張り非戰的、軍備撤廢的傾

向を以つて終結に近づき、渠の所謂『歐洲聯邦』が『確然組織せられた時と雖も、なほ歐洲以外の危険に備へる爲めに、一種の軍制が長く繼續保存せられるかも知れぬ』が、『その軍備は小規模にして且第二義に屬するであらう』とある。然し戦争肯定論者から見ても、英國の海軍、獨逸の陸軍、またわが日本の海陸軍も、それ自身では初めから第二義的な物だ。その國、その民の生活として防禦、發展並に征服の精神若しくは努力が添へばこそ、軍備がそこに攝取されて生きてゐるのだ。この生きだま、生き力は、如何に人民の政治になつても、一國が存立してゐる以上は、内容として無くてはならぬものだ。そしてさきにも述べた通り、個人若しくは國家の内容生活を制限するものはないから、その内容に伴ふ軍備もおのづから規模を小にするには及ばぬ。で、渠が『既に彼の労働問題、商業、科學、流行、財政、慈善、文學、美術、音樂等を支配する(泡鳴曰く、それもなか／＼疑問であるのみならず、恐らく歐洲でも熟考すべし)』と云ふ、その渠の世界主義は、遂には政治上にも認定せらるべきものと云ふ、その渠の世界主義は、渠の所謂『各國各民族が各自由にその特性を發揮して之を全世界の爲めに寄與し』と云ふのとつじつまが合はぬ。各國民が衝突もしないで出来るやう特性發揮では、恐らく煮え切れないもの、活氣のないものであらう。渠の意では、或は最後に軍備撤廢と共に内部的な國家制限もなくなつた時のやうな状態を夢想してゐるのかも知れぬが、そんなことは、トルストイの無抵抗主義と同様、何萬年さきにか人間が地球上に絶滅した上で行はれる理想であらう。

人間の生活その物が既に發展であり、征服である。だから、この發展と征服との爲めに動く戦争や軍備を——強者にせよ、弱者にせよ——避けようとするのは、生活その物を避けようとするのである。そして獨逸人並に獨逸國の生活が世界に向つて野心的、掠奪的に見えるのは、ただ英佛露の諸國が既に或程度まで世界的に征服の立派な(と云はしめよ)精神を満足させてるので、その點では聯合諸國の方が受け味になつてゐるからである。

斯う根本的に考察して來ると、カベントが豫言者らしく『同盟諸國をしてあらゆる方法を以つて獨逸の世界的野心と世界的掠奪とを責めしめよ。獨逸國民をして普漏西貴族を責めしめよ。——されどなほ各國をして自己の衷心に省みて自ら責めしめよ』などと叫ぶのは、無駄なことを獨り演説してゐるやうな者だ。皆の責むべきは十九世紀の初めから芽ざした、僕の所謂翻譯的人道主義、世界主義の空想と不緊張とに(たとへば、白耳義の如く)安易を貪らうとした傾向をではないか？

渠は愛と憎とを區別して『愛——憎に非らず——は最後に世界を救済すべき力なること』を信ぜよと云つたが、これも人間の生活の遊戯分子を固定的に引き放した上の机上論であつて——生きた人道ではない。愛は増せば憎みとなり、憎も亦合すれば愛となる。これ皆征服の充實的作用である。従つて征服的生活ほど愛の實現し充實する働きは外にないのだ。これを最もよく實行して來て、將來にもますます實行する自覺を得たのはわが日本民族である。が、獨逸人等も亦、どツちかと云へばその考へか

たに於いて僕等の方に近い。そこが今は敵のやうでも他日は同盟しかねまじき共鳴がある所以だ。

然し同じ同盟中の國人と國人とでも、決して固定的に親愛が存在してゐるものではなく、その間にも亦愛憎と征服との働きが行きかひつつあることは、今の日本と英國との關係に於いて有形的に實證されてゐる、されば、同盟や協商、聯合や仲裁で、如何に世界の均勢が保てたり、優劣の度が定つたりしても、なほ且、内容的に見た戦争の止むことはないのである。

して見ると、——これで僕はこの論駁文の終りを告げたいのだが、——渠の小冊子の表題でもありまた渠の度々の繰返し文句でもあるところの、『決して再び』こんなことが起つてはならぬと云ふことは、その場で聴き棄てにされる性質のものである。丁度若いものが喧嘩をしてゐるのに行き合はせた老人が、年寄り甲斐に仲裁には這入つて見たものの、兩方の相手が何喰はぬ顔をしてゐるので、おもて向きだけは體よく言葉を嚴肅にして『喧嘩なんかするもんぢやアない』とばかり、ヤツとその場を切り抜けて行くやうなものだ。

瑞々しい人生は相變らず争ひと征服をつづける。

日本に於ける亞細亞主義の勃興

一 消極的亞細亞主義

近頃の新聞雑誌に於いていろ／＼の形容詞を附した亞細亞主義の唱へられたことは、近來になかつたところの一つの現象である。

そのうちで小松緑氏の『興亞主義』は國民新聞に現はれた。僕はこれを残念にも見落してしまつたが、讀賣新聞社説子の賛成解釋するところに據ると、『近頃亞細亞民族同盟して白人東漸の勢力に對抗するの必要を説くものあれども、零は幾つ集めても零なる如く、無氣力懦弱にして進取の氣風を缺ける民族は數多團結するも依然無氣力なるが故に、天は自ら助くるものを助くの理に従ひ、印度支那人自ら奮起するを要すと云ふが小松氏所論の要領』である。これでは抽象の上からは如何にも尤もに聽えるけれども、餘り消極的にして僕等の問題にはなつて來ない。

それでも讀賣の社説に於ける〇生はこれに賛成して、小松氏以外の汎亞細亞主義者若しくは東亞モンロー主義者等を「美名を借りて侵略の野心を充たさんとする』ものとし、『乃ち、今日、日本が侵略を企つるもその目的を達する能はざるを思ひて、茲に東亞モンロー主義なるものを備ひ來り、他の極東の弱邦を自己の傘下に集めんとする』に過ぎぬと憤慨した。そしてその憤慨の理由は、『獨に汎獨主義なるものあり……未だ會て併合、侵略を口にせしことなきに係らず——「聯邦」の美名は併呑の包蓋に過ぎざること明かなる』が如く、『日本のモンロー主義者中には實際此の如き推定を受くべきもの少からざるに於いて……反つて隣邦の猜疑を招き、印度人を誤解せしめ、徒らに民族鬭争の傾向を助

長するに過ぎざる』に在る。これ、目前の外交關係を知つて、永久の方針を忘れた言論であらう。

西力の東漸は民族の名稱によるに非ずして實力の優劣に原因したことは分つてゐる。然し實力を引き出す爲めの主張も出來るし、また實力を引き出す爲めの主張が出來るまでに或程度の實力を體現することもある。そしてわが國に於いて積極的な亞細亞主義を唱へるものはその孰れかに起因してゐると見ることが出来るのである。そしてまた孰れにせよ實力を主にしてゐる以上は、防禦と共に進取侵略の軍國主義が、最少限度で云つても、氣ぶんとして伴つてゐないわけには行かぬのだ。この點に於いて澤柳博士の『文化的汎亞細亞主義』(新日本)にも僕等は満足しない。渠が軍國主義的用意をすべて無反省にもあたまから排斥した所以は、萬國が現大戰に懲りて今後は戦争の恐れがないかの如く思ひ做したに在る。そして萬國平和會議とか、仲裁條約とか、下つては交換教授とか云ふことを過重し、今後西洋人と東洋人との間には平和がつづくが文化の上で『東洋人はいつまでもその(西洋人の)背後に屈服して止むものではない。乃ち、西洋人に對して東洋文明の光輝を發揚し、若しくは東西兩文明を打して一丸となし、一新文明を産出せんと勉むべき』であるとした。そして『かかる主義を奉じて結束し活躍する事の、吾人日本帝國國民に取つて甚だ必要なる』を以つて、『その中には(少くとも)支那だけは……益々相提携して立つべく』と。これ、日支提携論としては北氏の指摘した通り月並みであり、亞細亞主義としてはまた讀賣社説のと同様まことに消極的である。

二 對米か對英か

次に、大谷光瑞氏の『帝國の危機』（中央公論）に包まれた亞細亞主義若しくは大亞細亞主義と稱するものである。渠の文章が空飾粗策であることなどは今更ら指摘するには及ぶまい。ただ、その空疎の間から僕等の捕へ得る輪廓によつて見ると、渠が『内憂を治すべく』と云ふ所の軍國主義は『治に在つて亂を忘れしめざる』ものであると同時に、渠の『以つて外患を治すべし』と云ふ亞細亞主義は支那と『真正の親善』を以つて西洋諸國の侵凌暴虐を禦ぎ、そして互ひの『領土侵略を排す』るに在る。

この侵略排斥の點から見れば、渠のよかの消極的亞細亞主義の外交的辭令や日支親善論やと大した相違のないやうにも見えよう。が、後者が餘りに辭令の爲めに曖昧であり、餘りに吞氣の爲めに月並みであるに比べては、渠のは多少の定見があり、多少特殊の實質を持つてゐると云へる。軍國主義を肯定し、また『今日に於いて最も我國の患たるは米と支那なり』と云つてゐるでも分る通りだ。けれども、渠は何故に軍國主義を内治の方面にばかり限るやうなことを云つたのであらうか？他國の領土を侵略しないことが必ずしも軍國主義を内治的にする所以にはならぬのである。侵略には領土占領が最後の結果にならうが、場合によつてはそこまで行はないで勢力若しくは特權の占領とそれに伴ふ

文化の普及にとどめて置くことが出来る。そしてこれをも僕等は氣ぶん上から進取とも侵略とも征服とも云ふ。言葉は露骨であるが、事實はどうしてもさう云はせるのである。

見給へ、渠は支那に對して『我若し干與せずは他強之に干與す』と云つてゐるではないか？他國に干與する以上は、たとへその國を獨立させるが目的であつても、勢力上の事實では征服若しくは侵略であつて、軍國主義を内治から外交に向けたわけにならう。これを以つて見れば、渠がその軍國主義と亞細亞主義とを内憂と外患とに當てはめた如きはほんの文章上の下らぬ綾であつて、結局は同一のものであらう。そして渠は支那の獨立保證と日支親善とを以つて僕等を積極的にどの西洋國に當らしめようとしてゐるか云ふに、米國にである。『我國の四境、國多し。特に米國の如きは公然我を敵國となせり』とか、『是に假すに十年を以てせば、我帝國は當然米の侵凌を免れざるべし』とか云つてゐる。

この對米的亞細亞主義に對して異論を立てたのは、若宮卯之助氏の『大亞細亞主義とは何ぞや』（中央公論）である。渠は『我が大亞細亞主義は今やその胎生期にある。その乾坤的展開を遂げんとして、亞細亞新人の思想の裡に混沌的狀態を保つのである。今日に於いて認むべきはその朦朧なる輪廓だけで……外的には、西洋主義に對抗すべき東洋主義の改造である』とし、この主義の建立を促す『間接の原因は西洋文明の甚だ恃むに足らざる事、言ひ換へれば、その一面に於て貪慾を性となし、掠奪を

主義となしてゐる西洋文明の現實暴露である』し『直接の原因は言ふまでもなく、西洋勢力の亞細亞に對する不法なる包圍攻撃である。』ここに至つては、『大西洋主義に降服するか、大亞細亞主義を實現するか。今やこの二つの外に亞細亞の運命がない』と云ふのが渠の本論である。

渠はこの主義を先づどの外國にさし向けるべきかに至つて、大谷氏とは正反對の親米排英の方針を取つてゐる。渠は『移民問題に於ける大谷氏の初心は、更らに進むで米國の軍備擴張に關する大谷氏の初心となつた』とし、大谷氏を以つて他の米國を解しない多くの日本人と同様、米國の軍備が對亞細亞若しくは對日本のものではなく、對南米であることを知らない者だとあざけつてゐる。なほ進んで曰く、『假すに十年を以てするも、二十年を以てするも、米國はこの英國の亞細亞なる太平洋のなたに來りて、その威力を擅にするの機會を得るものでない。』

渠は今の状態では『英國の亞細亞』であると云ふのである。そしてこの世界的大戰の結末が付いて『若し英國にして波斯灣に續いた一切の土耳其領を得たならば、而して尙亞刺比亞をその保護國としたならば、所謂英國保障の平和の亞細亞は益々英國的平和の保障を仰がざるを得ないやうになつて』どこにも亞細亞の擴張すべき自由とその芽を吹くべき理想とがあらうぞ？『日支離間の常習的陰謀者たる英人の亞細亞よりの退却を見ずに、どこに斷金的日支提携の可能性がある』と叫んでゐる。

これ、對英的亞細亞主義ではないか？そしてこの主義實現の豫備條件として若宮氏は『印度の管轄

換へ』を必要だとした。

三 亞細亞主義の地理的範圍

小松氏や讀賣子の如く日本を離れて亞細亞中の獨立不獨立の各國を見ようとするのでは張り合ひがないが、苟も僕等が積極的にかかる議論を立てれば、必ずわが國を中心としてしなければ無駄である。苟も責任あり、實行の氣ぶんある僕等の亞細亞主義はどうしてもそうなつて來べきである。乃ち若宮氏も云つた通り、『日本は西洋なしに或は生活するを得る。而も亞細亞なしに到底生活するを得ない。』この點では澤柳氏の文化的、大谷氏の對米的、若しくは若宮氏の對英的なる亞細亞主義は皆一致してゐる。北吟吉氏もその『亞細亞主義の眞諦を論ず』(新小説)に於いて澤柳氏の『文化的汎亞細亞主義は、文化的大日本主義の別名に外ならない』と云つた。渠はまた『モンロー主義は假裝せる合衆國主義である』如く、『亞細亞モンロー主義もその實質に於いては假裝せる大日本主義であらねばならぬ』とした。

ところで、かかるいろ／＼な日本中心の亞細亞主義の地理的範圍を究めて置くのも一つの必要であらうと思ふ。小松氏の興亞主義では印度の自力的獨立が日あてであつたらしいが、澤柳氏は『汎亞細亞主義といふと、その中心には印度から波斯、更らに南洋の一部に屬する暹羅、安南をまで含むらう

になるが、それは餘りに包括の範圍が廣漠に失するから暫く擱くとするも支那だけは古來歴史上、地理上、人種上、人文上、日本に密接の關係がある所だから、將來は益々相提携して……所謂モンロー主義の精神をここに發揮すべきである」と云つた。大谷氏のも専らわが國と支那とが問題である。若宮氏になつて初めて支那から印度までも關係を有して來て、而も小松氏や讀賣子の如き悲觀じみた消極的ではない。

北氏も亦『日本の存立を確保し日本の文化を發展せしむる爲めには亞細亞に於いて優勢なる地歩を占めなければならぬ』と云ふ點に於いて、日本主義は直ちに亞細亞モンロー主義となり、又實に軍國主義と提携しなければならぬ』と云ふ立ち場から、『日本は國力の發展に應じて自國の擴張の爲め歐米各國の（亞細亞に於ける）或種の既得權を侵害するもの蓋し止むを得まい』とし、『支那に於いて優勢を占むるのみならず、臺灣海峡以南に國防の根據地を占め、且つ濠洲を開きて移民問題を解決し、印度の寶庫を開いて日本の商業的活動を自由ならしむるを要する』と云つた。

かう云ふ考へをすべて一般人の所謂理想と云ふ言葉で概括することは出来ようが、これは最早や僕等には空想ではないほど僕等の實力が充實しつつあるのを忘れてはならぬ。

四 回々教徒の亞細亞主義

ところが、ここに一つ地理的でもあり又宗教的でもある『汎黃主義』（新日本）の問題が川村狂堂氏に依つて提供された。西は摩洛哥より東は滿洲蒙古に亘つて蟠居せる四億有餘の回々教徒』の一部として『隨唐以來一千二百年の歴史を有する支那に於ける回々教徒……今や……その數約五千萬』を疎外して亞細亞主義を唱へてゐられるかどうかと云ふのだ。渠等の宗教的中心なるオトマン帝國民は今や獨逸と提携してゐるが、僕等が見ても、どうせ他の有色人種と同様に白人からは飽くまで虐遇される運命に在るのである。亞細亞主義をサツと廣げれば、無論土耳其は有力な味方である。川村氏によると、『一千九百八年、伊土戰爭に於いて土耳其が悲しき敗北の結果を見るに至るや、同じく回教徒たる印度、阿剌比亞、波斯、阿弗利加、阿富汗斯坦、土耳其斯坦等の諸國民は大にその神經を刺戟し、……東西相呼應して……亞細亞は亞細亞人の亞細亞にして白人の亞細亞にあらずと絶叫し……大陰謀の企てを見るに至』つた。『一千八百五十七年、在印度英國人全部を虐殺し盡さんとする大陰謀の企て』も、『同國に於ける回々教徒の企劃』であつた。

僕等は然しそこまで考へず、支那だけで云つても、かの成吉思汗の率ゐた兵士の大半は回々教徒であつたし、支那第三革命に於て雲南の兵士が武勇を示めたのも回教徒が半ばを占めてゐた爲めだと云ふ。それが五千萬、各省に亘つて宗教的聯絡を保つてゐるのである。ところが、渠等は各方面から露獨、英諸國の利己的政策に懷柔されつつある。これを殆ど知らないのはわが國ばかりだとは、僕も兼

てから聴いてるところだ。そして南洋でやがては僕等の物になるらしいジャバやスマタラにはこの教徒の勢力は支那人と共にはびこつてるとも云ふ。川村氏は單獨、隻腕にして同教徒間に這入つた實際から、亞細亞主義や對支提携の『具體的腹案』に渠等のことが考へてないでは駄目だと主張してゐる。

渠の論法には大谷氏のそれに於ける如き粗大の缺點——これ讀賣子が外交的にだが最も嫌つたところ——があるけれども、亞細亞主義の勃興にはどうしても考へ入れねばならぬ事實問題を提供したのである。一般佛教の如き緩漫不緊張な宗教氣分を以つて緊張嚴格の回々教徒を支那や南洋で僕等が同化出来るや否やは、既に有識者間の問題になつてゐるのである。

五 亞細亞主義の内容

對米と云ひ、對英と云ひ、日支親善と云ひ、印度の獨立と云ひ、すべてこれ亞細亞主義の形の各方面である。若しこれが一時の政策なら、或はそれだけの標榜でいいかも知れぬが、内容的に永續すべきものとするには必ず一定の思想を以つて貫かねばならぬ。この點で不十分ながらも僕等に近いのは北氏の解釋である。渠は澤柳氏の日支親善論を『月並み』と見た理由として『日支兩國に世界に對して誇示すべき高貴なる文明があることを指摘し』ないことを指摘し、『既に東洋文明の發揮と云へ

ば、それが佛教的精神なるか儒教的精神なるかの問題に觸れなければならぬ』と云つた。そして若し前者なら印度をも包括すべきだが、本來の佛教的精神は亞細亞モンロー主義の如き獨占的思想と兩立せず、若し後者としても儒教のみでは一切の西洋思想に對抗するだけのものはないとし、『果して然らば、吾人は吾人の努力の目標として日本化せられたる佛教と儒教とを掲ぐる（これ光瑞師の大乗佛教主義である）の外ない』と云つた。

渠と僕との間に異論があらば、この『日本化』を主義とする度合に於いてであらう。渠等のはおもに道元や親鸞や日蓮の宗教をそのまま云ふのだらうが、僕等はその宗教や儒教が日本化されてゐる日本の根據に執して云ふのだ。渠等には恐らくその云ふところの宗教や儒教に着かないでは文明の日本的なものも東洋的のものなからうが、僕等にはそれを離れてもなほ日本ばかりで文化文明の基礎がある。乃ち、これまでも度々他で述べた通り、わが國の固有性として發達して來た征服的宗教である。現世的『人間神』の哲理である。これは回々教徒の『右に劍、左りに聖書』とも殆ど同じやうな行き方であるから、若し同教徒に向つて親しんで行くには、佛教や儒教を同化したよりも容易だと思はれる。

われにまつろふものはこれを平和にし、まつろはぬものはこれを撃ち平らげると云ふ我國の固有宗教・傳來の國是——これに伴ふ軍國主義は、一時の手段ではなく、永續の思想であり、實質である。

その代り、現世を疎んじたり手段視したりする諸教理とは違ひ、來たれ、汝等を現世の奮闘に最も確實深刻に生かしてやるからと云ふのであるから、一種特別な慈悲の熱に燃えてゐる。そこへ同化され吸収されて來るものは——征服されるのであるけれども——必ずしも領土を僕等に献上しないでも済むことがあらう。そこにこれが亞細亞主義として日支の親善、印度の獨立、黃人同盟等の考へを實際的に取り入れる餘地がある。そしてこの餘地をまだ空想まで廣げれば世界主義にも出來ようが、空想に存在を與へぬのが僕等の内的生活であり、また僕等の着實な思想なり文明なりである。

斯うして僕等の亞細亞主義の内容は北氏等のそれよりもまた一層日本的になり、一層日本主義になるのである。他の亞細亞國から亞細亞主義が唱へ出されるならいざ知らず、苟も日本人として僕等がこれを提供するには——この提供が忠實であり、責任感がありする以上——どうしても斯うならねばうそだ。(大正六年五月十三日)

佐藤中將の軍事思想論

陸軍中將佐藤鋼次郎氏は國民新聞の月曜論壇(九月廿四日)に於いてわが國にまだ軍事思想の普及が足りないことを論じた。大體から云へば、軍事思想もいやが上に普及してゐる方がゐないよりも結構には相違ない。然しそれには他の各方面の思想も同じやうに普及してゐることを條件として見なければならぬ。

若し政治上、經濟上、教育上、藝術上等の思想になほ多くの缺點があつても、これはさし置いて軍事上の思想のみ先づ普及させよと云ふのでは論者の職業から來た專斷的希望に過ぎないのである。

僕等が世界の新時代に處する日本主義者として、世に既に古びたと云はれる帝國主義を撤廢しないで而もこれが内部化を主張する所以は、決して軍事専門の、殊に陸軍専門のことではない。否、軍事その物は寧ろおもて向きの問題ではなく、軍事などもおのづから附き随つて振ひ起る等の内部的發展が主である、これには軍事よりもずつと深みあるところの思想問題、經濟問題、政治問題が取り扱はれなければならぬ。そこに必要に應じて軍事の問題も伴つて來るに過ぎぬ。

『わが政治家中には陸海軍の服制すら之を知らざるもの』が多い(渠に従へば)と云ふのと、わが軍人や政治家中には新發展を唱道し實際に工夫しつつある思想家どものあることを知らないものが多い(僕が云はうとして)と云ふのと、孰れが重大な缺陷であるかと云はば、無論、後者である。新時代に添はない舊式な政治思想や軍事思想は普及されて却つてその國の爲めに困るのである。有害でこそあれ、利益にはならぬ。して見ると、渠の議論の當否は結局渠が新時代を如何に理解してゐるかと思ふことであらう。今、それを少し調べて見よう。

(第一)、渠は『現代の軍事に對しては我國民は全く沒交渉にして眞の門外漢なり』と云つた。これ

は國民の罪ではなく、軍事當局者が歴史的に悪かつたのである。従來の軍事當局者はおのれ等のみが忠義や愛國心を占有してゐるかの如き態度を以つて國民に臨んだ。殊に徴兵の受験者並に入營中の兵士どもに對してさうであつた。段々と考へて來た國民が心中に『何を云つてやがる』と云ふ反感を持つのは當り前のことだ。

その上、論者は『現代の軍事必ずしも盡く秘密に屬すべきものにあらざ』と體よく云つてゐるものの、軍事當局者が堂々たる帝國議會に於いても官僚式をいいことにして何でも秘密々々で意張つて來たのは事實だ。かかることがすべて國民一般に影響して軍事的興味を遠ざからしめ、その結果が渠の指摘する通り雑誌上の畫家や編輯者も『軍事に全く盲目にして、たとへ不合理の繪畫を見るも何等感ぜを惹き起さざる』に至らしめたのだ。軍事當局者並に専門軍人どもにしてその舊式な、獨占的な、獨りよがりの態度を改めない以上、今日の國民は戦争でも勃發しない限り決して軍事に興味を持つ筈がない。國民はそれぞれ國家乃ち自己の爲めに他の仕事に多忙であるのだから。

(第二)、論者は『我青年の規律と體力との教育に於ける一大缺陷』を痛歎すべきだと云つた。そして規律の缺陷には早大の紛擾を一例として擧げた。乃ち、『理非曲直の何れに在るやを知らずと雖も……衆力を頼みて規律を破壊せんとする』ものだからと云ふのだが、理と直との外に規律のあらう筈はないのだ。規律を維持するものはその存する一團體若しくは一國家を統轄する者の威力だ。これが多少

壓制的に來てゐるにせよ、自由放任主義であるにせよ、理直の存する間は無事だが、その理直が缺けるとそのままにはなつてゐない。日本國家の規律も内存的であるから國民に生命があるのだが、軍人どもはいつもあまりに外存的規律を夢見てゐる。そして渠、論者もそんな舊式な、それこそ不合理な見解で今の進歩した國民や青年を見るから、眞の規律のあるところにもそれがないと云ふやうな見當違ひの觀察を下だすのだらう。渠の所謂『無智の勞働者』も『常識ある學生』も、今日では段々内部的に共鳴するところの理非曲直が普及して來たことを知らねばならぬ。

青年の體格に於いても、『近來身體強健なる壯丁の漸減』と『文弱』とが果して渠の云ふほどにひどいと見ても、これは人間生活の世界的新發展の努力と共に生じたことであつて、軍人ばらの獨り勝手に左右できる事實ではない。努力には疲勞と衰弱とが必然的に伴ふけれども、必然の衰弱を避ける國民は乃ち發展を避ける國民だ。今一步讓歩して、渠の云ふ通り『彼我(東西)の懸隔の餘りに甚だしきに驚き、速かに彼に追及せんと焦慮するの餘り』に出た一時的現象であるとしても、追及を殆ど完了した今日以後の努力は二十年前の如き呑氣な努力ではない。従つて、また文弱の度もそれだけ進む。然しこれは世界共通の勢ひであつて、わが國ばかりの問題ではない。

かかる趨勢を一方に止むを得ず是認しながら而も、他方に、そのうちから一種の強力健全な奮發を促してゐるのは今日の思想文學、自然主義系統の小説である。これをも然し論者は『墮落文學』のう

ちに數へて排斥するやうな口吻を——簡略にだが——漏らしてゐるのは、今の政治家が陸海軍の服制すら知らぬと云はれるのと好一對の、軍人がはに於ける不覺であらう。

(第三)、論者の婦人に對する非難である。「現今に於ける我婦人の状態を見るに、遺憾ながら強健なる生兒を増加し得べしと認むるを得ず」と云ふが、今の年若い婦人どもは女學校に於ける體操の結果段々姿勢が直立的になり、段々活潑にもなつて來た。が、それが家庭の人となつてから萎縮する傾きがまだ見えるのは、軍人の家庭に於いてもよく見る通り、舊式な型にはめてしまはれるからである。

「渠等が歐米婦人の如く活動し得べくもあらざる」は活動の習慣を與へないからである。「恰、國家と沒交渉にして唯家事に屈託するのみ」なのも、渠等にもツと餘裕を有せしめない爲めだ。商買的に賢母良妻を標榜する學校よりも、寧ろこれは姑息な家庭の罪だ。だから、かかる主張を——もう、空論の時代ではないから——少しでも發表する論者自身からして、先づ、その妻や娘を社會に解放し、多少の犠牲は覺悟の上で將來の國家的利益に寄與すべきである。

(第四)、歐洲大戰亂勃發の少し前に、佛國の議政壇上に佛國陸軍の大缺陷を暴露したウンベルトをさもえらい者の如く云つて、論者は政治家どもと挑戦する口吻を漏らした。これ論者自身のから氣焔に過ぎぬ。佛蘭西だからそんなこともできるのであつて、若しわが國であれば、また陸海軍は軍人でなければ大臣にせぬと云ふやうな今日、政治家はウンベルトだけの秘密を握れる機會もなく、また握

つたにしてもこれを暴露すれば一も二もなく國賊にされてしまふ。それだけの決心と用意とは今日では寧ろ身を輕んずる軍人中の特殊者に適當な仕事であつて、他の方面から國家的用向きある政治家のすべきことではない。

聽くところによれば、軍人中でも海軍の人々は比較的に新しいあたまを持つてゐるが、陸軍にはそんな人が殆どないさうだ。曾て僕は大庭中將の時代後れた婦人談を批評したことがあるが、佐藤陸軍中將今回の議論にも以上の如くまだ——新時代を理解してゐない點が多い。わが國民間に於ける軍事思想を云爲するに先き立つて、先づ從來の軍事當局者の思想並に軍人間の思想を改革すべきではあるまいか？(大正六年九月)

中産農民の漸減と高等遊民の勞働

『最近發表の農事調査統計表中より、耕地所有の區狭に依り區別したる地主戸數を摘載すれば左の如し。』

耕地所有地主戸數

明治四十一年

大正五年

五段未滿

二、二七八、三一七戸

二、三六二、一一三戸

日本主義

五段以上	一、二八七、九七七	一、一九二、一〇三
一町以上	九二一、九三〇	八八四、九四三
三町以上	二七九、一〇〇	二五四、四六〇
五町以上	一一三、一二五	一一〇、三四六
十町以上	三九、七四六	四一、三八二
五十町以上	二、五七四	三、四八二
合計	四、九三六、七六九	四、八五八、八一九

この表に據るに最近九箇年間耕地所有戸数は七萬七千九百餘戸を減ぜり。是れ農業者の數が漸次減退せるを示せる者にして、喜ぶべき現象にあらざるなり。更に其内容を見るに、五段歩未満の所有者即ち貧民は十萬餘戸を増加し、同時に十町歩以上の所有者は千六百餘戸、五十町歩以上の所有者は九百餘戸を増加せるに反し、五段歩以上所有より五町歩以上所有者に至る所謂中産階級の戸數は何れも著しく減退せるを見る。是れ即ち土地の兼併盛んに行はれ、中産階級の漸次衰運に向ひつつあるを證明するものなり。耕地所有者以外の富者貧者の増減は、統計の徵すべきものなきため之を知るに由なきも。全國總戸數九百八十九萬餘戸の内四百八十五萬餘戸を占むる耕地所有者の消長叙上の如しとせば、其他は推して知り得べきにあらずや。我國に於ては、耕地所有者即ち農業者は、國民の大部分を

占め、比較的最も健全なる思想を有すと稱せられ、事實に於ても亦然り。此健全分子の數が漸次減退し、反對に富者貧者の數は益々増加して、國民の經濟状態は年と共に偏傾しつつあること斯くの如くなるは、國家のため返すくも悲しむべき現象たりと言はざる可からず。』

以上は東京日々新聞に出た記事であるが、かかる現象を以つて直ちに空想的な共産主義に走るべき論據とするが如きは、同新聞の記者と共に僕等の賛成しないところである。けれども、これを事實として考究して見ると、兎に角、少數のすばしいものが中産農民の土地を併合し、その併合土地を離れた農民どもは段々とただの小作人に落ちて行くのである。渠等がその見じめな状態に於いてもそこに生れた故を以つて満足してゐればまだしもよからうが、段々ともツと儲かる仕事を求めて必らず都會に出て来る。そして都會に出たもの等の殆ど全部は工場その他の労働者になるより仕かたない。その結果、都會に労働者があり餘つてその賃銀が下落するばかりでなく、地方に於ける少數の大耕地所有者は自己の土地を耕作して呉れる小作人が拂底して困るのである。この兩方の行き詰りが兩方に於いて理解されると、共産主義などへ飛ばないでも或程度に調和のできる道がある。富有な農民はここまで考へて置いて貧しい小作人どもを取り扱つてやらなければならぬ。

農業的労働者どもはその労働をその郷土にとどまつてすることを厭はない方だから、これを取り扱ふもの等にとつても比較的始末がよかつた。が、この頃のやうに移住殖民に關する智識が行き渡つ

て來たり、地方に於いても鑛山地などにはずつと割合のいい賃銀仕事ができたりして見ると、少しでも生活を高めようとする考へあるもの等はどうしてもそんな方に出て行つてしまふ。米國や滿洲移住のことは別にしても、九州の鑛山地方では勞働の賃銀が日に十圓や二十圓になることも稀れではないと云ふではないか？北海道最近の景氣を報じた新聞によると、旭川の荷馬車を驅る御者は日に十七圓から二十圓を儲ける。そして上川倉庫の馬子はもとの一ヶ月分の給金をたつた一時間で得ると云ふ。また、山形縣の如き最近に鑛山が開けて來たところに於いても、その地方人に言によると、鑛夫になれば必らず日に少くとも五圓や六圓にはなるさうだ。但し斯うなつて來ると、ただに無學な農民や工夫ばかりの問題ではないと思はれる中學程度の教育あるものを初めとして、高等教育を受けたもので、その受けた教育を看板に安月給で官廳や會社へ通勤しながら、うちや／＼子供を拵らへて生活難を訴へてゐるのは最も愚なことであらう。

中産階級の漸減若しくは生活難は決して農民社會ばかりではないのである。教育ある都會的中産者流はその學校教育や貧弱な經歷やに徒らに執着して、今日では、却つて發展の見込み乏しく、見す見す貧苦に沈んでゐるのだ。甚だしきに至つては、文學士や法學士の學位を持つてゐる獨り者でありながら、會社や學校へ二十圓でも十五圓でもいいから使つて呉れると頼んで行くのが稀れにはあるさうだ。學んだ學問に融通の利かなくところがあるのに苦しみつつも、なほ且手足の勞働を卑しむ結果、はない

か？高等教育の卒業者が不見識にも十五圓や二十圓で使つて呉れるとあたまを下げて行くだけの思ひ切りを以つて、渠等はなぜ大膽にはだか一貫になつて、鑛山なり工場なりの日給の高い勞働者にならないのだらう？さうして金を十分に儲けながら、自分等の學力をそこに段々と發揮して行くこともできようし、また貯めるだけ金を貯めてそれから別に學力の向ふところへ發展し直しても遅くはないではないか？

正式な學歴のあるなしに拘らず、かの多くの文藝志願者どもが——これも一種の都會的高等遊民として——いまだ物に成らざる文藝的趣味や思想に徒らに感溺し、ただそれが爲めに一定のしつかりした生活の道を得ず、心ならぬ原稿などを書いて實は心中にぐらつきながら、口では大きな不平を云ひまわつてゐる如きを見ても、僕は殊に渠等の回響的姑息を指摘しないではゐられないのである。渠等が思ひ切つて、たとへば賃銀の高い鑛山工夫に住み込んだとして見給へ。他日の文藝材料として立派な實驗が澤山得られる上にも、心がけ一つでは、數年ならずして可なりの獨立生活ができるだけの資金を以つて山を出ることができよう。渠等にして眞に文藝的見込みのあつたものなら、この出山は實に釋迦の出山と同じ價值を有するのである。これはひとり文藝志願者に限らず、すべての高等遊民がやがては必らず行ふに至る唯一の道であらうと僕には思はれるのだ。

世の中産階級の漸減を防ぐ方法の如きは、別にこれを研究する經濟學者があり、これを調査する社

會政策家がある。僕がここで考へたのは、生活難に苦しむ中産階級と職業を得てもこの階級にとどまらざるべき高等遊民との爲めに、不見識な因襲生活をするよりもすん／＼思ひ切つて労働に行けと云ふことである。歐米の労働界に多くの事件や危険思想の發生するのは労働者間に既に有教育のものが多く爲めであるが、危険の發生と有教育者の労働との間には、大耕地所有者と小作人との間に於けると同様の調和政策的餘地がある。ただ労働に行くそのものから云へば、この餘地のあるなしは問題ではない。

兎に角、中産農民の漸減と小作人の離背移住とは、やがて、わが國にも高等遊民の労働者化をも來たすのである。この形勢を看破して早くこれに就くものが多くなるほど、わが國民の生活は充實をも早めるのだ。そしてこの形勢を迎へるだけのことは今日の鑛山や工場の發達が準備しつつあると思ふ。(大正七年三月十五日)

労働界の事大主義

支那では米國を眞似て排日熱を鼓吹するものがあるに當つて、わが國の労働界にも事大主義が現はれたのを僕は一般に注意したい。労働協議會で筋肉労働者が破れば米國のゴンバスに報告して労働大使の仕事を邪魔してやると云ふ一派の考への日本人として不都合であることなどは既に、その會で

でも攻撃があつたやうだから、ここに繰り返すにも及ばない。

如何に労働問題でも、それを世界に持ち出すには、國家的制限の力に裏づけられて緊張してゐなければとても權威があらう筈はないところが、鎌田氏の一行にこの權威あらしめる爲めに、一行がまだきまらないうちに討議をいくら激烈にやつてもいいが、一たびきまつた以上、多少の不満足はあつても、それを——國民の體面と權威とを忘れて——外國なる米國へ訴へてまで何とかして貫はうとするのは獨斷個人主義としか見えない。ゴンバスその人でさへ『自分は國際主義者たる前に米國人たるを忘れない』と斷言したのに。

つまり、あの一派は大きなものに手頼つてただ自分等個人々々の意志をとほしたいと云ふに過ぎなくならう。そしてその結果は、國家として他國からその都度それに應ずる利益的蠶食をされることにならう。

ほんの、字づらから見て、國家主義よりは世界主義の方が思想の規模が(却つて貧弱なのに)大きいなど考へてゐては、ヤツと發展しかかつたわが労働界を思想上朝鮮や支那の状態にしてしまふわけである。

僕等は以上の理由で鈴木氏一派並に労働本位論者の反省を促して置く。

スコト氏の『日本、英國及び世界』

ジエダブリュロバトソンスコト氏の小冊子『日本、英國及び世界』を送られたので読んで見た感想をここにちよつと述べて見たい。條約上のこまかい事は略したいし、またかかる問題を時事問題的に論ずることは本誌に許されていないしから、どうせ大體の根本的事實にしか觸れることが出来ぬ。が、先づ著者に尋ねて見たいのは、渠が僕等日本人にもツとおとなしくしろ、もツと理解しろ、もツと同情を持てなどと云つてゐるのは、僕等を英國人よりも一段下だつたもの等として見てか、どうか？ どうも渠には、正直に云はせれば、さうだと云ふに相違ない口調が全般に渡つて現はれてゐる。それでは、渠から僕等は何等の忠告をも聽くには及ばないのである。白人の文明と耶蘇教の人道とが世界一般の標準になると思ふのは白人ばかりの考へであつて、僕等は別に標準があつて、東洋殊に日本の文明と日本人としての宗教心とで以つて發展して來たし、また世界的に發展しようとしてゐる。西洋文明を取捨吸収するのもそれが爲めだ。

もツと實際的に云へば、著者は帝國主義を以つて『舊思想でありますのに……日本の新進人物の間に於て大なる渴仰を受けてゐる』と云つた。が、英國は國として、もう、領地、貿易その他が廣がりやうのないほど廣がつたのであるから、——悪く云へば、退歩老衰の時期が來たのであるから、——

發展的帝國主義の必要もなく、却つてその領地を成るべく寛大に解放してむほんさせぬやうにするのが一大事になつたが、僕等の國はこれからは發展して行かねばならぬ。恐らく英國の退くべきところへ日本は進むべき運命を持つてゐるのだらう。それにはこの主義以外、他に主義のありやうがないではないか？

この實際的を一層進めて云へば、『日本ではその英國に對しても未だ沿岸貿易を許して居らぬ』のは事實だが、『英國が印度の沿岸貿易を日本に許した』のはこの事實とは格式が違ふ。もと／＼他人の國へ英國が僕等を許したのではないか？そしてかかる許可をするだけ、英國は寛大若しくは自由とも云へようが、遠慮なく云へば、その實、國力の衰退を意味して來たのだ。そして一方には、僕等の帝國主義的發展を是認する證據だ。支那に於いても、『英國々旗の下に在る地方に於いては、直接にも間接にも未だ會て英人以外の商人を排除したことは無いのに、日本人が勢力を得るやうになると、非日本人の企業に對して成るだけ均等の機會を與へぬやうにする』と云ふ英國商人等の不平も、この道理若しくは意氣込みからであるが、また一つには、本誌前々號に出した『船中の日英戰』の如き外人殊に英人横暴の事實があるからである。

次に、著者は日本が獨逸を信頼若しくは相談相手にすることに反對した。が、僕等はさう信頼もせず、さう相談相手にもしてゐない。僕等は獨逸の長所を取るのには英人の長所を取るのと等しく、獨

逸の短所を捨てるのは英人の短所を捨てるのと同じだ。だが、今のところ、英國の老紳士の退嬰状態よりも獨逸の多少は蠻的な世界征服の精神の方が僕等従來の又將來の征服的態度に叶ふのである。そしてこの態度をスコト氏が『獸化』と云つてゐるなら、それでもいい。歐米人が耶蘇教徒以外の人類を侵略したこと、並にそのあと始末をも『人道』とか『世界の同情』とか云へるなら、日本民族の精神並に文明が日本民族以外のもの等をこれから征服して行くのも、僕等の『人道』であり『世界の同情』であるべきである。

然し僕等は必らずしも日英協約を直ちに破棄せよとは云はぬ。若しその効力が實際に僕等の方で片務的になるやうであれば、それだけの部分を他で補ひを付けることも出来る。若し、また、一時世界の評判にのぼつた英米仲裁々判の如き條約が實現すれば、その時は、僕等も亦それに相應する約束を露國なり何國なりと結んで行けばいいのだ。

つまり、僕等の間に日英協約をかれこれ云ふものがあるのも、一方では英人等が僕等の征服的精神の勃發を餘りに理解しない爲め、また一方では、かかる精神ある自國を標準にしないで英國の外交にばかり従はうとする外交家どもがわが國に少くはない爲めだ。

なほ僕等の詳しいことは、本誌本號から連載する佐藤信淵論でも分るだらうと思ふ。

僕等の要求に對する實力

東京朝日の鐵筆欄に『喧嘩の對手』と題して愛秋生と云ふ人が面白いことを書いた。それを抜萃して見ると、

『今度の世界の大戦亂は其初め塊地利亞と塞爾比亞の喧嘩であつた。それが一轉して露佛英獨の喧嘩となり、再轉して英獨の戦ひとなつた。……今では二十餘國の間の戦ひとなつて來たが斯う關係國の数が多くなると、自然一括した對手の名が欲しくなる。』

『ここに於いて英佛ではこれを以てラテン民族とチウトン民族との争ひだと云ひ出した。……そのうち誰れいふとなく此戦ひは軍國主義と文明との戦ひであるとなつた。又獨逸の潜航艇戦が暴戻を極むるやうになつてからは、いつしか、戦争は人道と非人道との戦ひのやうに言ひなされた。』

『それが近頃又もや相手が變つて、今度は民主主義と專制主義との戦ひといふやうな事になつた。……ラテンとチウトンの争ひとせられた時でも日本はちよつと宙に迷つたが、民主と專制の争ひとなつても日本はちよつと宙に迷ふ』云々。

蓋し迷ふのは各國同じであらう。

まことに宣戰布告の抽象的に最も堂々たるものであつたのは米國大統領ウイルソン氏の正義人道の

爲めに無併合無賠償主義で戦ふと云ふ言葉だ。が、米國はフィリピン群島をさへ場合によれば棄てるかも知らないほどの國柄で、他の領土を併合する必要などないと云つてもいい。おまけに金の上では中立の時から既に現大戰の爲めにおほ儲けをした上に、宣戦後はそれがまた何層倍かになつて行くのである。これでは、日露戦役の時にやりそこねた革命を今回やつと成就した新露國では——革命の成就が既に満足と與へるから——かまはないかも知れぬが、佛國は決して満足しないだらう。

現に佛國首相リボウ氏の聲明(七月六日)によると『無賠償とは何ぞや……賠償を要求するは正義なり』とあつて、『アルサスローレン二州を恢復し……損害賠償を得、普國軍權主義に對する保障を收め』その上にて『佛國が世界に紹介したる榮譽を有する民主的精神の名を以つて平和同盟を締結すべきなり』と。ところで、これには『歐洲に』と云ふ制限を附してあるから、少くともその場では、米國も日本と共に忘れられてゐたのである。

また、英國首相ロイドジョウジ氏が獨逸首相反駁の演説(七月二十日)によると、『民主主義は主義それ自身が平和の保障なり』とある。が、然し獨逸並にこれに加擔する國々がたま／＼專制的であるから、如何にもそれが尤もらしいやうだが、實際には、英國自身を初めとして、米や佛でも斯う云ふことをしらしらしく云へないだらう。蓋し專制國ならぬ英米佛もこれまでにいろ／＼な口實を設けて他を侵略したではないか、また民主主義の完成國とも云ふべき米國は、中立にしておほ儲けをしてゐた

のが、獨逸の潜航艇の爲めにうまく行かなくなつたからつて正義人道をふりかざして戦ひに参加すべきでもなかつたのだ。若し少しもやましいところがなく民主主義を平和の保障だと云へる國がありとすれば、今の農民並に勞働者どもの社會主義者並に非戰論者を中心として見た露西亞一國であらう。その代り、單獨媾和もしかねまいのだ。

さきに露國からわが國に戦争を吹ツかけたのは同國の官僚であつた如く、今日、同國で單獨媾和を否定してゐるのはケレンスキを初め、農民並に勞働者の頭梁どもである。そして渠等はみな民主主義者だ。これによつて見るも、敵味方を問はず、また民主と專制とを論せず、戦争を主張するのはその國その國を思ふ偉人どもでカイザルとキルソンとは五十歩百歩の相違に過ぎぬ。どの國の人民も成るべく戦争はしたくない。が、戦争をする方がその國の存在上並に發展上利益あることを教へられたのである。この教へる者が初めからカイザルの如く武斷派であると、ロイドジョウジの如くあとで一種の武斷派になるとは、大した問題でない。國としては獨逸が専ら陸軍と野砲とを用意してゐた如く英國も軍艦を他の二國標準で維持して來たのだ。世界の勢力均齊に最も自由な而も飄輕な地位に在つた米國でさへ、近來は戦争のすつと以前から軍備を擴張し出してゐた。英國首相が『戦争は今や民主主義の自由國民の一團と武斷貴族派に由つて統御さるる國民の一團との争鬭となれり』と云つた如きは、ほんのその場の挨拶に過ぎぬ。

以上の如く、世界の關係各國は互に得手勝手な理由や目的を現大戰に附加してゐるのである。僕等はいつもこれを看破してゐなければならぬ露西亞が共和國になつたり、獨逸にカイザルの權力を制限する方法が採用されたりするを見てわが國にも何かこれに似た變化ができていいやうな議論をするものがあつたからだらう。高橋作衛氏は貴族院に於いて『聯合諸國は屢々民主政體の爲めにと云ふ言語を使用し居れるが、我が帝國も民主政體の爲めに努力するものなるか』と云ふ皮肉な質問を發した。これには見當違ひの答へがあつたのみだけれども、僕等ならそんなことはわが國には問題でないと答へただらう。

わが國には、現今、露國政府の如き壓迫や獨逸の如き專制がない。従つて、かかる壓迫や專制に對する反動の來たりやうもない。同時に、僕等は米國が新露西亞を共和國となつたが爲めに助けると云ふやうなおせつかいをしてない。また、チウトン人種が勝たうがラテン民族が勝たうがそんなことも問題でない。僕等が戰爭に参加したのは、ただ日英同盟の條文を重んじてだ。そしてそのおのづからの報酬として今までに青島を取り、南洋諸島の一部を占領し、負債國が債權國となり、また十億足らずの預金(然し米國に比しては何十分の一にも満たぬ)を得た。賠償が正義なら、報酬もそれである。

印度の亡命客某が最近に配布した小冊『國際間に於ける日本の孤立』を讀むと、戰爭に於ける英米の大々的の同盟が今から見えてゐる。そして青島の問題はさし置いても、南洋の日本領をこのまま僕等

が有して行くことは、英國には濠洲を危険にする爲め、米國にはフィリピンとの連絡を絶たれる爲め共に反對者がある。これが爲めには佛蘭西をも向ふへまわすと見て、あらかじめ英國に對しては日獨露、米國に對しては日獨墨の同盟を作る準備をせよと云ふ。そしてその結局の目的は成るべく早く支那印度をも獨立させて全亞細亞主義を實行するに在るので。

亞細亞主義がわが國としては日本主義であることはさきに僕が論じた通りだ。そして實際に現今、わが國をさし置いて他に亞細亞の覇を握れるものはない。ところで平和克復後の世界の貿易的問題の中心となるのは支那である。従つて、支那に對して最大の權力と便利とを有するわが國が各國から羨望と嫉視恐迫とを以つて迎へられるのは寧ろ當り前だ。

今の戦がいつか平和になつても、平和の戰爭は矢ツ張り止む時はない。そして現戰爭中にも前述の如くその目的若しくは相手がくる／＼と變つて來たのであるから、平和と共に或は一大變轉があつて世界が僕等ばかりを相手にして來るかも知れぬことは、前以つて覺悟してゐなければならぬ。遼東還附の二の前を演じないやうにする爲めには、豫じめ日獨露の同盟をでも準備すべきか？それとも、なほ日英同盟を骨子として繼續し、而も南洋の占領地に口ばしを入れしめないやうにすべきか？僕等は今からして緊張の感じを以つて當局者の外交的手腕と國民の實力との發展を望んでゐるのである。

征服的精神に於いては——それがいい方にせよ、悪い方にせよ——僕等は決して獨逸のにも英國の

にも劣らないのだ。ただその依つてかかるところは僕等の手腕と實力とに在る。

日本と露西亞と

フランスの『露西亞印象記』が中澤臨川氏に依つて譯された。讀んで見ると、譯文もよく消化されてゐて、こだわりのあるやうな所は少しもない。この書は露國の文學を研究するに必要であると同時に、その國情に親しむに最も簡便な道である。

今、それから得たり、それから思ひ出させられたりした智識を以て、わが國と露西亞とを比較して見たい。露西亞の面積がだだツ廣く、風景が單調であるに反して、わが國はきちんとして、狭い範圍に山水の變化がある。前者に住する民が全体に憂鬱性を帶び、後者の住民が一般に快活であるのは當り前だ。

それには、今一つ天然の理由がある。乃ち、氣候で——領土が寒暖の兩極に廣がつてゐるのは、わが國も露國も同じだが、わが國が寒暖の中帯を標準にしてゐるに對し、露國の標準は嚴寒にある。之がまた万事に暗い色を染るのである。憂鬱は偉大を呼び、快活は優美に親しむ。それが建築の上に及んで、我國人は多く設計の美を目的とするに反し、露國では材料其他の宏壯と豊富とを執つてゐる。

露西亞の國家をフランスに従ひ家族制の擴大した物だと云へば、わが國のと同じやうに思はれる

かも知れないが、前者の家族制度には家長の無限權力と子孫の財産共有との二特色がある。こんな物は、わが國の現在では、飛驒の白川郷へでも行かなければ見ることが出来ない。且、家長の無限權力がザアの專制權となり、子孫の財産共有が土地共有自治區なる物になつたが、わが國はそのどちらをも持つてゐない。

わが國は幕府時代に絶對の專制國であつたが、明治になつてから國民は自由になつた。之に反し、露國では、もとは可なり自由を許されてゐたが、十九世紀になつてから全くの壓制國になつてしまつた。今の露の國民は嚴寒と壓制との爲めに苦められてゐる。生活の絶望でなければ、絶對的服従で——この兩極端より外に道がないのも尤もだ。

かの恐るべき實行的虛無主義の如きは露國だから生れるのであつて、わが國のやうな萬事中庸を得て、大抵は物が無事に納まる國柄では、決して生れる氣づかひはない。一八八七年に、獨逸と戰爭が起りかけた時、苟くも自由を愛する露國人はすべて自國の敗北を望んでゐた。日露戰爭の最中にも、それを望んだ露人は少くはなかつた。わが國柄はそれほど大改革を必要とする程壓制の病毒が染み込んでゐない。

その代り、ただ調和力に富んだ八方美人主義の故伊藤公の如きがわが國での大人物だ。桂公も、侯西園寺も、ただ渠の跡を追つてゐるに過ぎない。帝王が他國へ出て船大工の仕事の研究したり、王妃

の子の太公が自由主義の平會合に臨んだり、またクロボトキン公の如く主義の爲めに職工と共に働いたりするやうな、實行的熱烈の氣分を發揮した人物は今までには乏しい。

お大名はゐながらにして事が済む、そこにわが國民の平和性が今も對照される。然し帝王でも身づから手を下さなければならぬ所に、露國民の危険と死に物狂ひとが反映してゐる。教育の問題だけで考へて見ても、『民を愚にして治めよう』とする傾向は、兩國の政治家にはどうしても、脱し切れぬ缺點のやうだが、露國の當局者は學問を恐れることが甚しく、何かと云へば、大學を閉鎖する。わが國の高級學生には、それほどに恐れられる氣力——と云つては、語弊があるだらうが、——そんな必要が迫つてゐない。

わが國の政治や社會組織では、國民は平時死に物狂ひにならないで済むが、露國民はいつもさうなつてゐる。露西亞文學が、わが國の下層には今でもあり勝な遊戯的餘裕を存しないで、飽くまでも深い現實主義に立つてゐるのはそれが爲めだ。ブランドスが『新現實主義と新神祕主義との母體』を以て露國の未來を推し、露國民も亦それと同じやうな見識を掲げてゐるのも、そんな所を認めるからである。

然しわが國民も亦深い傾向を有する現實主義である。その生活にまだ餘裕があると云ふのは、露國民のやうな政治的、社會的革命を経る必要がないだけのことだ。後者の奮闘でも、その最終の目的は自己の發展である。それをやるには、順序として、政治的、社會的革命をしなければならぬ。然し現代のわが國民は直ちに自己の發展に向つてゐる。この點に於ては、露國民よりも一層直接な死に物狂ひである。現實主義、實行主義の國民が思索力を缺くと云ふのは、今日までの兩國に徴しても事實であるが、今や、その思索的方面も、兩國に加はつて來た。して見ると、最終の必要に早く達するのは、寧ろわが國民であるのを覺悟しなければならぬ。然しわが最も大なる缺點を云へば、露國民とは違ひ淺薄な中庸に安んじてしまふやうな一面があることだ。

最後に一つ、つけ加へて置くが、一般官吏に無學者の多いのはわが國も露西亞も變つたことがないかして、尤もこれはブランドスの印象記に書いてあるのではないが、革命、乃ち、レポリュションに關する政治書は入國禁止だからと云つて、露國々境の税關吏が『地球のレポリュション(回轉)』と云ふ天文學の書物までを禁止したことがある。わが國でも、昨年、社會主義書を檢學した時、巡査が古本屋の店頭から『昆蟲社會』と云ふ昆蟲學の書を沒收して行つた。(明治四十五年三月)

平和論者との對話

(主人) 君は平和論者だつて、ね。

(客) 無論です。

(主人) では、聴くが、ね、その平和論と云ふのは、米國のブライアン氏のやうな程度のものか、ね？と云ふのでは少し分るまいが、開戦になるきはまで平和主義を唱へて、さ、いよ／＼開戦になると、手を返したやうにけりりとして従軍の志願までするのだが――。

(客) そんな見え透いたやうな輕薄なのは――僕は――。

(主人) まあ、聴き給へ。如何にブライアンだつて、國務卿の地位を投げうつてまで平和主義の政策の爲めに奔走したのだから、一概に輕薄とは云つてしまへないよ。けれども、開戦した以上は飽くまで自分も人に劣らず戦つて見せると云ふやうな氣の出るところの餘地ある主張などは、寧ろ初めからやるべきものではなかつたのぢやアあるまいか？

(客) だから、輕薄だと云ふわけぢやアないでしやうか？

(主人) それやア、輕薄ではない、ね。然し見識が不足であつたのだ。

(客) どつちだつておんなじでしやう。僕のはもつと徹底してゐるつもりです。

(主人) ぢやア、輕薄でもなく、不見識でもなく、そのもつと徹底してゐると云ふ君の平和論はどんなのだ――第一、何の必要があつてそんなことを唱へるのだ？

(客) 軍國主義を打破する爲めです。

(主人) さうすると、何か――何でも平和主義に反対なものは軍國主義だと云ふのか、ね？

(客) さうでしやう――早い話が獨逸を御覽なさい。世界の平和を攪亂したのは獨逸ではありませんか？

(主人) いや、公平に云へばさうではない。が、そのことはあとまわしにして置いて、たとへ世界の平和を最近に攪亂した者は獨逸だとしても、その攪亂の原因は何であつたと思ふ？

(客) 原因は無論獨逸の軍國主義です。

(主人) 違ふだらう、ね。たとへ獨逸を軍國主義だとしてしまつても、獨逸がその軍國主義にならねばならぬ理由があつたのだ。分るか、ね？

(客) それは――カイザルに對するビスマアクやトライチカの影響でしやう。

(主人) いや、もつと遠くさう云ふ影響やカイザルの出現やを必要とした理由だ。

(客) 國家と云ふ形に潜在する利己主義でしやう。

(主人) なら、まあ、そんな單純な概念で片づけてしまふだらうが、ね、國家にいい意味の利己主義がないのは、個人に同じのがないのと同様、その生活の退歩若しくは滅亡だぞ。英國が世界的に領地を広げたのも、米國が隆々として發展して來るのも、皆、國家的利己主義が活動するからであるのだ。

(客) それが然し餘り露骨では困ります。

(主人) 馬鹿を言ひ給ふな、露骨だから、悪となり敵となり、露骨でないから善となり味かたとなるなどツて、そんなことだから國際間に偽善の正義や人道が時を得がほにはびこつて來るのぢやないか——そしてわが國の新米外交官などはその偽善を生眞面目に受けなければならぬかの如く考へて、却つて不見識な外國文明の眞似ぶりをやつてるのだ。一國が一國の爲めを計るのは他國の爲めを計ると同様で、少しも耻づべきことでもなく、こつそりすべきことでもない。公明正大のことだ。

(客) 大分手厳しくなつて來ましたが——さうしますと？

(主人) 君が月並の愚論を吐くから、さ、ね——僕は國家同志の利己主義などは少しも否定しないよ。獨逸が利己主義なら、英、米、佛も皆それだ。個人も争ふべきが當前であると共に國家も相争ふが當前だ。世界の各國は自國發展の努力の爲めに世界の平和を常に攪亂してゐるものである。そして『協商』とか『同盟』とか、『勢力の平均』なるものはたゞこの攪亂の一變形たるに過ぎぬ。そしてこの變形的平均を現大戰の當初に於いて隱謀的に破らせたのは獨逸であるとしても、獨逸がはをしてこれを破らせたのはまた決して獨逸ではなかつた。

(客) と申しますと——？

(主人) 露西亞王朝と英國、さ。

(客) けれども、露國や英國が參戰するやうになつたのは、順序から云つて奥國や獨逸が立つたからではありませんか？

(主人) そりやア、うわツつらのこと、さ、ね。もツと考へて見給へ。獨逸の國勢は由來何とか國外へ發展して行かなければならなくなつてゐたのだ。丁度、わが國が滿韓や南洋に發展しなければならぬやうに。英國がその領地に太陽の没することがないほど發展したと同じ理由で、——露西亞が段々とシペリヤを浦鹽まで出たと同じ理由で、——獨逸も後れ馳せながら何とか發展しなければならなかつた。この發展は、少したとへが下劣だが、人間が必然物を排泄するほどに避け難いことであつて、これをとめられると獨逸の膀胱が破裂するより仕方がない。英國や露國のかかる場合には幸ひにもこれをとめられるものも、法度もなかつたからよかつたが、獨逸の場合には、立ち後れの爲めに、さきに排泄をすませたもの等が邪魔をした。ここを獨逸の方から云へば、然し、武士は相互ひだと思つて貰ひたかつた。また露西亞や英國にしても、眞に平和主義を云ふつもりなら、お互ひのことだとして獨逸のバルカン南下を許してやればよかつた。獨逸の軍國主義はトライチカやピスマアクに起原するとしても、この南下を英露が妨害するにきまつてると云ふ豫想に對する用意であつた。どうだ、斯う云ふ風に觀察して來れば？

(客) その觀察を假りに間違ひのないものとするれば、無論、平和攪亂の遠因は寧ろ露國に在りましよ

うけれども——。

(主人) そこでだ、君の所謂平和論に立ち歸つて、これを問題として云へば、ブライアンの開戦に至るまでを實際の形勢に目をつぶつての平和論であり、英米の参戦の理由は軍國主義を包み隠しての平和論だ。そして獨逸は向き出しの軍國主義と云つても、その生活並に發展に空想や偽善を加へてないだけのことだ。その主義が通れば必らずしも軍國主義一天張りでないのは分つてゐる。斯うなると、君は理論上どれを採用した方がいいと思ふ？

(客) 獨逸のが勿論男らしくていいと思ひますが——。

(主人) 男らしいとか男らしくないとか云ふ感情的なことはこんな場合に云ふべきではなからう。女が男の品定めをしてゐるのぢやアあるまいし。

(客) ふ、ふん！

(主人) なアに、國と國とは男同士のことだと思ひ給へ。

(客) ぢやア、日本は今からでも裏返つた方がいいと云ふんですか？

(主人) おい、冗談ぢやアない。わが國は獨逸に對して長年の恨みがあつたのは分つてゐることぢやアないか？こんな時でなくば、この恨みは晴らせまい。丁度アルサスローレンを取り返すのはこの時だと佛蘭西が思つたのと同様に。けれども、この参戦の理由を西洋偽善文明の口實に倣つて正

義人道の爲めだなどとは云ふ必要がないのだ。わが國に軍國主義的、侵略主義的などところがあると云ふものがあらば、それに向つて、そりやア米國や英國にもそれがある通りだと答へてやればいゝ。一國が他國に向つて軍國主義、侵略的精神のないとは——苟も進歩しつゝある國なら——うそのことである。ただその主義、精神を亂用せず、自然の勢ひと共に進めて行くか行かぬところに、僅かに平和の餘地があるだけだらう。獨逸だつて、止むを得ずに侵略的になつたのは既に云つた通りだ。そしてわが國も止むを得ずに獨逸にぶつかるとだ。つまり、國際的な男と男とのぶつかり合ひだ。

(客) 僕はさうは思ひません、な。萬國がすべてかの永久的中立國のやうなものになつたら——

(主人) そりやア面白い空想だが——一體、永久的中立國などをその國人が設ける精神が既に間違つてゐる。戦争に死にたくない、戦争などに金を費やしたくない。ただ安樂にして金儲けだけをした。そんな虫のいいことが永久にできたら、人間は手あしを附けて生れて來るには及ばないのだ。戦争の覺悟はその國その民の實生活的覺悟だ。この覺悟がないのはお人よしか情民であらう。見給へ。白耳義は最小の一王國ながら世界の一大資本國ではあつたが、一朝歐洲の均勢が破れたら、直ぐ中立も破れて、今や亡國のありさまではないか？瑞西だつて、今少し獨逸がこの戦に形勢を進めると、世界の安樂な遊覽地たることはできなくなるかも知れない。

(客) それはまだ周囲に多くの尙武國があるからです。それらの尙武國も皆軍備を撤廢して、互ひに他の國を侵し合はぬと云ふことになつたら——。

(主人) ちよつと云つて置くが、ね、永久中立國だつて中立を侵されぬだけの軍備はしてゐたのだぜ。

(客) だから、それは他に侵略國があるのを豫想してゐたのでしよう。その侵略國が全くなつたら、お互ひに戦争もせず、平和に行くにきまつてます。

(主人) 成る程、それが君の所謂徹底的平和論か？最も空想的だ、ね。社會主義の共產主義と大して違ひはないよ。今の露國一般人民に過激派が勢力を得たのは共產主義を標榜した爲めだが、たとへこの主義が一時一般に實行されたとしても、それで社會は發達しまし、やがてはぶち毀られてしまふだらう。君の軍備撤廢の平和論も一時假りに萬國の承諾するところとなつても、甲の國民と乙の國民とは、否、第三國第四國等もごつちやになつて、矢ツ張り、何かの方法で争ふよ。そしてその争ひがひどくなると、また別な軍備をするよ。大砲でなければ銃劍を、銃劍でなければ弓矢を、弓矢でなくば腕力を。そして戦争にもと／＼通りにぶり返して行く。

(客) 然しさうさせないやうにするのです。

(主人) 誰れがする？何物がする？今更ら古びた宗教や神の力は持つて來られまい？

(客) 仲裁々判もあります。國際議會もあります。

(主人) その判決に應じなければ？

(客) 皆で壓迫します。

(主人) ふん、應じないほどの國なら、きツと壓迫は覺悟の前で立つ、さ。

(客) やがてはその國、國家と云ふ組織までも撤廢できましよう。

(主人) 空想の極だ、ね。よしんば空想の範圍にしても、世界中を一國家にすると云ふ考へなら、まだしも理窟だけは立つが。

(客) それでもかまひません。

(主人) 然しそれにはどの國家か一番強大なのが他の國家をすべて統一すると云ふ順序があるよ。

(客) 無論でしよう。

(主人) 獨逸もそんな考へだらうが、わが國は殊に建國のそも／＼からそのつもりで發展したのだ。ところが、ね、統一する國家に屬する人類はその順序にでも満足するだらうが、統一される方はたとへ小弱國でもなか／＼喜んではゐないよ。そして必らず他の國々と聯合でもしてその被統一を避けようとしよう。乃ち、矢ツ張り、同盟がはもできれば協商がわもできる。

(客) そんなやつは自己の利益になることを避けるのだから、馬鹿な國家です。

(主人) ちやア、過激派の露國が獨逸に殆ど無條件で統一されかけながら、自國は一旦亡んでも獨逸の勞働社會と一致して今度は獨逸の國家組織をうち滅ぼさうなどとほざいてるのを利口だと云ふのか？

(客) それでもいいでしょう、人類としての遠大な目的を持つて、さうやるなら。

(主人) 目的を分離させて考へるのが既に空想の初めだ。人間の目的は現下に在るものだ。否、無目的の充實の人生が國家の内容であるのだ。

(客) それはほんの哲學論でしょう。

(主人) いいや、哲理的思想にまで徹して人生や國家を考へないから、君のやうな空想的平和論などが出るのだ。

(客) まア、それだけ伺へばもう澤山です。

(主人) 僕もこれ以上に云ふ必要はない。(大正七年三月十四日)

斷片語 (四)

▽國民思想の統一と云ふことは大體二つの誤解があると思ふ。一つは形而下に於いて形式的命令の種類を以つて統一できるとするもの。今一つは形而上の純理を以つて統一しようとするもの。前者は臨

時教育會議の連中の考へであつて、後者は無制限論理で達し得られることを事實の一部に考へ込んでる徒——たとへば、阿部次郎氏の如き——だ。空論であり、また自己のできないことを人に強ひようと云ふ偽善的議論であるに於いては共にかはりはない。前者は國家の爲めには自己を犠牲にせよと云ふ傾向だけでも、さう云ふ人々が既に全くの犠牲心に生きてゐられるか？後者はまた正しい眞理の爲めには個人や國家の利己主義を捨てよと云ふのだけでも、個人や國家に自己存在の爲めに必要な利己主義がなければ既に個人も國家もない時であるではないか？阿部氏が思潮終刊號で述べた如きでは、その所謂眞理は個人若しくは國家の外に別存してゐるものだ。そんなものに國民の思想が統一される時があるとするれば、國家解體の時であらう。『國家が國家としての利己主義』はこれ『を捨て』るべきものでも、これ『を征服す』べきものでもなく、却つて國家存在の必要上から、並にその實際論理上からありのままに攝取養成すべきである。眞理とは空理であつてはならぬ、個人なり國家なりの存在内に推論できる範圍に限るべきである。云ひかへれば、内存的に解釋された利己主義は個人にも國家にも眞理であつて、そこに却つて正道のまことに踏むべきところが生じてゐるのである。

▽現内閣に對して望みを屬すべきもの一つは中橋文相の教育に關する事業らしい。六箇年度の繼續事業として高等教育の機關擴張も悪いことはない。けれども、それがいくらか完成してもなほ教育の容れ物ができたに過ぎぬ。それに容れる教師や學生のあたまを今から改善して行かなければならぬ。そ

してこの改善の中心問題は誰れにでも外國のことよりも先づ自國のことを研究知得させることである。現今の状態では小學から中學に渡つて、國文、國史、日本地理等は、英語、西洋史、外國地理等のお伴に過ぎない。そして前者はその教師までが輕蔑され、後者はその學校でえらい者が受け持つ傾向になつてゐる。外國崇拜の弊害がそこまで達してゐるのである。これを精神的に改めさせることが文相として學校建設よりもずつと急務であらう。今一つ文相に腕があらば望んで置く、渠はわが國多年の宿題なる宗教法案を見合はせしめたと云ふが、その考へには信教の自由と布教の自由とをこつちやにしてゐる嫌ひがある。たとへば、トルストイ的無國家主義の宗教が團體となつて布教されるとした場合、それも自由だとしてわが國家がうつつちやつて置けようか？だから、僕等にはもう外國のおもはくなどを心配するには當らないとしての具體案がある。今までいぢくられてゐた宗教法案を全く作り直して、國體的神道を國教と定め、これは動かせないものとし、別に俗間神道、佛教、並に耶蘇教を従として、そこには成るべく寛大な制限を附してしまふのだ。そこまで行かなければ、わが國の思想的發展方針は確立しない。

▽牧野伸顯男がわが國の媾和使節として桑港に於いてした演説の一部に曰く、『五十年前日本は國際團體に加はり、今日列國と共に人道に對する事業に加はるに至れるを光榮とす。』わが國が國際團體に加はつてからまだ五十年にしかならぬのは事實だが人道に對する事業は、然し、これをわが國は建國以

來やつて來たのである。『まつろふものを和し、まつろはぬものを平らげる』とは、乃ち、わが國古來の精神なる征服愛の福音に於ける平和主義的人道である。これは他の列國が一緒にならないでも、わが國ばかりで實行することができるのだ。決して五十年の前後には關係がない。外國標準で物を云ふ人は誰れでも兎角、人道までも外國からをそはつた物のやうに考へ易いが、決してさうではない。

▽原首相は『力は正義なり』の考へを以つて『謬れる信念だ』と云つた。思想に乏しい政黨者流の言としては或はそれでもいいかも知れぬが、これからの政治は深い思想の根本からやつて行かねばならぬのである。これには、そんな淺薄な通り一遍の云ひかたでは困る。力と云ふのが若し果してわが官僚や獨逸やの考へた單に侵略の爲めに用意する力のことならそれを正義と見做すのは昔から謬つてゐることで、今更ら喋々するにも及ばないが、獨逸と戦つた英米の資本的侵略主義も力を正義としてゐるのである。また、ウヰルソンが米國の現戦争に都合よく優越した立ち場から媾和や國際聯盟を殆どわが儘に斡旋してゐるのも、その實、力が正義人道を云はせてゐるのだ。これを要するに、力でない正義などは信念としても實際には存してゐない。そしてわが國だけが實存もしない正義、空想的雷同の正義などをおつき合ひにも云ふ必要などがどこにあらう？僕等は日本の力に依れる正義人道に従ふべきだ。(大正八年七月)

▽徳川家康は少し無神經のやうで島國的より大陸的であつたと云ふ説がある。豊太閤を日本的だと云

ふ標準から云へば、そんな説も立つか知れない。が、わが國には昔から潤達にして性急な秀吉型と隱忍で最後の勝利を待つ家康型とがあるのである。そして明治年代からのわが國外交は不斷に於いては家康型で以つて通されて來たのだ。今回の講和會議に於いても、巴里へ派遣されたわが委員どものやり口を聽いて見ると、はたからはどうしても公憤を催さないではゐられないほどに隱忍過ぎてゐた。けれども、それが矢張り家康的であつたではないか？手ぬるいとか、ぼけてゐるとか、屈辱的だとか云はれたものの、その結果から見れば、さう損もしなかつた。さう不成績でもなかつた。日本は日本だけのことをやり得たではないか？人種問題の如きはたとへ無事に通過したとしても、どうせそれだけでは解決のつき兼ねるものだ。山東問題に残つたごとくも高くとまつてれば獨り手の方のつくものだ。わが國がこれからますます歐米の嫉視と威嚇とのまとなるのは、同じことで、それだけ國力の進歩した所以ではないか？

▽斯う云ふ事實がある——僕は曾て在學したことがある或宣教學校が火事で焼けてしまつた。焼けた建て物は三十萬圓の物であつたが、今度立て直すやうすると、同じだけのにでも少くとも五十萬圓を要する。ところが、わが國や米國の時勢が變はつてしまつて、その費用はとも米國からもとの通り得られる見込みがない。その校長は米國宣教師だが、その前任校長であつた人は今は支那へ行つて傳道をしてゐる。その方へは今でもらくにどしどし金は集まるが、現任校長の方へはその見込みがな

い。どうしたわけかと云つて見給へ。米國耶蘇教の善男善女どもが、云ひ換へれば、愚夫愚婦どもまでが、もう、日本と云ふ國を耶蘇教では救ひ切れぬことを悟つたのだ。どうせ、もう、同教の必要がないと見限つたのだ。つまり、獨立の文明國として嫉みや競争心まで促して來たのだ。その代り、まだ野蠻だともとの日本に對しての如く報告される支那の方へ全力をそそぐやうになつた。僕等としては却つて面目を施せたのであつてありがたいわけだが、それが爲めに米國人の排日熱が一層盛んになると云ふ心理作用を僕等は見のがしてはならぬ。

▽米國留學から歸つて來た本邦人は殆どすべて米國崇拜家になつてゐる。が、わが國から歸つて行く支那留學生はすべて排日家であるらしい。これはまたどうしたことだ？第一に、邦人が米國へ行つても人種や習慣が餘り違つるので缺點を見ないうちに向ふの物に雷同するに反して、支那人がわが國へ來ると、割り合に早く見當が付くので、雷同よりも批判を早く得る爲めだらう。第二に、米國は國性がぼんやりしてゐるだけに抱擁力が強いが、わが國は隅々までもまとまつて必然の排外性が鋭敏に動いてゐる。これが邦人の米國留學生に雷同の安心を得せしめ、本邦留學の支那人には直ぐ反感を與へる所以だらう。第三に、邦人の米國へ行くものには耶蘇教は知つても、日本の教養を殆どまだ受けなかつたものが多いに反して、支那人の本邦へ來るものは大抵相當の教育を受けてからのことである。たとへば、割り合に最近の米國歸朝者で名の知られて來ながら、殆ど全く自國を知らない帆足理一郎

の如きは、少し支那人に辱ちてよからうと思はれる。

▽途上見聞によると、近ごろ子供の遊びにデモクラシ遊びと云ふのがある。お前はキルソンになれ、お前はクレマンソウ、またはロイドヂョウジになれと云ふやうなことがあつて、何でも——よくは分らなかつたが——持つてる物を分配するのだ。巴里の辯和會議と社會主義の共產説とを一緒くたにしたやうなこらししい。時勢はおそろしいもので、僕等はおそろしくしてゐられないと思はれた。けれども、一方には、ほんのただ子供の遊びに過ぎないやうな無反省な態度で——たとへば吉野博士や木村(久一)學士のやうに——デモクラシや社會主義をいじくつてる學者どもも少くはない。また僕は或ところで子供の喧嘩をしてゐるのを見ると、何だ、お前はカイザルではないか、無茶苦茶に自分の兵隊まで殺してと云ふに對して、ぢやア、あのうそ付きのキルソンがえらいのか、正義人道なんてうわつづらなことをぬかしやアがつてと答へてゐた。これには僕は日本もなか／＼頼母しくなつて來たと思へた。

▽床次内相が戦後の民力涵養に對する實行方法として各府縣に内示した五大要綱と云ふのを見ると、從來の官僚思想と同様、少しも内觀的新味が添つてゐない。内部から固定の觀念を押し付けようとするに過ぎない。それでは、丁度從來の諸學校で無やみに忠君愛國を押し付けられた反感を今の中年者どもが實社會に於いて私かに漏らしてゐるのと同じ結果にならう。忠愛主義がいけなかつたのではな

いが、それを壓制的に吹き込まうとした仕かたが悪かつた。今の當局者もそんなやりかたしか知らないのである。情けないではないか？たとへば、國家觀念を養成すると云つたところで、その觀念を固定させて提供するのでは再び反對をこそ起させようが、所期の實効は擧らないのである。國家も決して固定のものではない。國民の生活中にその民族的、傳統的精神を以つて日に日に創造されつつあるものである。さう云ふ生活を初めとして教へてかからねばならないのだ。それをしなければ、決して健全なものではなく、立國の大義も分らなければ、國體の精華も分らない。いや、今の時代に分らせやうがないのだ。

▽それに、犠牲の精神と云つたとてその言葉で運ばれて來た思想はまことに貧弱なものである。舊い考へでは、犠牲若しくは誠實と云ふことはおのれを空くして人の爲めにあることである。けれども、今一步退いて考へて見給へ。自分を空くしてしまへば、自分からはつぽではないか？人の爲めになる物もないわけだ。だから、僕等の新しい考へでは、却つてその反對で、至誠の表示は自分を最も充實することである。自分を全人的に活かすことである。さうなつてると、何事をしてでも決してそれを手段にはしない。その次ぎに若しくはその裏に目的があるのだと云ふやうないつわり若しくはゆるみを生じない。そこで自分としても最も正眞であり、人の爲めにも十分の力になるのだ。公共心も、自治の觀念も、立憲思想も、つまり、そこから獨り手に割り出させることができる。

▽今一つ、勤儉と生産とは一緒だと並べることができない。寧ろ反対である場合が多いのである。一家の主人がその家庭にばかりなじむやうになつた時は、それが老衰のしるしである如く、勤儉に注意するやうになつた社會は生産に縮少して來たのである。成り金のおほ浮かれを見れば、そりやア誰れでもちよつとおぞけを振ふかも知れない。が、生産は必らずしも金錢に勘定してしまはねばならぬものではない。福田博士が云つたやうに、勞働を慾望化して貨幣に見つまつてしまふから、それが乾燥無味で苦痛にばかりなるが、衝動若しくは本能(このことに就いては別にまた新潮八月號で云ふ)に解放して見れば、もつと熱や面白味が出る。生産もその通り實際に於いては人間の意氣であり、感激である。だから、さう物質的經濟化の標準に規定してしまへないのだ。鯨が海岸に子を産み付ける時には、海中が一面に白水と化するほどその精液を濫費する。生産を盛んにするにもそれ相當の金錢や精力の濫費が必要である。この實際を無視して、全く別に勤儉を固定的に持ち出すのは却つて亡國退歩の徴であらう。(大正八年八月)

▽先月の旅行中に、或地方の用水騒ぎにぶつかつたのである。これは早魃の時にはどの地方にもよくあることで、田へ引いてある水をその途中の村で少しでも多く横取りしてしまはうとするのだ。それをさうさせまいとして、あとの村の人々が順番に徹夜までして防禦する。ひどいになると、兩村の竹槍騒動にまでなるものだが、多少の騒ぎがあつたとて警察の干渉などは却つて兩方の爲めに邪魔

なるばかりで、少しも解決の爲めにはならぬ、そこをよく呑み込んでゐる有志があつて、今云ふ村では前以つて警察が手を出さないやうにさせた。それと同様、勞働者と資本家とのあひだの掛引きも或程度までは無干渉で當事者間の強い者勝ちにまかせて置く方がいいと思はれる。不自然な干渉などは干渉好きな官僚趣味の人々のやることに過ぎない。ところで、不自然の干渉と云へば、前内閣時代にあつた臨時教育會議に於ける民心統一調査決議の諸要領ほど不自然な例はなかつたらう。その一つを云へば、『俗歌俗謡の改良を計ること』と云ふことだ。俗歌俗謡の作者は教育會議に列したやうな政治家や教育家ではない。その作者でもないものらがたとへ百人、千人集つて議論したからつて、その作の改良をしようがないではないか？よしんば、文部省お雇ひの俗謡作者なるものを拵らへたとしても、そんなものの作つた不自然な歌が——どうせこと更らに作つたものだから——一般に流行しやうもない。そして流行してゐないのは俗歌でも俗謡でもない。蓋し俗謡とはその作者も分らずに一般人民の生活から生まれて來るものだ。それに悪いのが出たら、時の政治や教育が悪いのである。根本を忘れて枝葉を考へるのは、官僚思想の餘風に過ぎない。

▽京都帝大の教授中島玉吉博士は歐米各大學の視察に遣はされた人ださうだが、その視察の結果を見ると、下の如きだ、『米國大學は實習に重きを置き、歐洲の制度は法則を教授する、吾人はこの兩方を折衷せんと欲す』と。そんなことは視察に行かないでも大抵の人の知つてゐることではないか？わざわざ

ざ大枚の官金を使つて調べて来るまでもないことだらう。殊に、最後の折衷論の如きは愚斷と云はねばならぬ。大學だつて、これからはいろんな種類のがあつた方がいいのだから、授業の方法に於いては米國流のも歐洲流のもあつて少しも差し支へがない。要はただ根本に於いてどの大學も日本の教養を忘れないに在る。わが國は明治時代からして餘りに日本の教養を缺いて來た。現代のわが國ほど恐らく自國的教養の不足な有識者どもの多いところはなからう。一も外國、二も模倣。學制觀察の外國行きに限らず、東京大都市制を考案するに先づ人を外國に遣はすべしと云ふやうな不見識な意見を發表するものが社會の上位に立つてゐるのだから。

▽上海日本人基督教青年會が中國基督教青年會の排日的行動に抗議した公文書を見ると、『本來の精神を忘れて國家の利害關係を目的とする勢力擴張の機關となり』と云ふことがあつた。これを文意通りに云ひ換へて見ると、本來精神の機關となり、國家の利害を忘れよう云ふことにならう。これでは排日行爲その物に反對した意味だけとはほるが、その意味に理由づけられた基督教の精神が間違つてゐる。渠等は『社會同胞は一家族なる事を地方的に實現するのみならず、同時に國際關係にも及ぼさずとんす』と云ふ。そしてそれが國家の利害を忘れることになるのだ。愚劣な傳習無國家的世界主義をも無條件に取り入れてる耶穌教家どもの云ひ條としては、これほど正直な公文もないだらう。が、僕等から見れば愚劣の極はみだ。米國が他國に強ひようとする正義人道もそれと同じ理由だが、その理由を

以つて他國が米國に強ひるとすれば、米國はそれで承知するだらうか？いや、米國が承知しないばかりでなく、わが國も他國からそんな愚劣な世界主義を強ひられては承知しないにきまつてゐる。偽善に過ぎないからである。そしてそんな偽善的理由若しくは精神を以つてひとり耶穌教家どもが——あつかましく、若しくは無反省の香氣にも——他國や自國に強ひてゐるのは、下だらない傳習の餘勢としか云へないのである。

▽今回全權大使としてシベリヤへ行く加藤恒忠氏の談(時事新報七月三十日)によると、『米國上院に於いて山東問題で日本を誤解せる者が尠くはない、また日本の支那に對する態度に疑惑の目を注げるは獨り支那人のみならず、歐洲人多數も亦然り』だから、『國民一致して列國の誤解を受けざる様努力するの要あり』と。割り合に官僚趣味が抜けてると云はれる渠でさへこんな有り振れた恐外消極的外交しか知らないものであらうか？わざとにも誤解をするのは他國の嫉妬や策略からである。これに對抗するのは必らず積極自主的外交でなければならぬ。早い話が今回の一等車廢止に就いて、外人乗客がわが二等客に對する忌避の申し出の如きは、人の土地へ來て無禮も亦甚だしいものだ。僕等は先づ渠等の無禮を責めてから、そして僕等のあひだの無作法をも多少いましめればいいのだ。外人どもが僕等を無作法と云ふには、渠等と風俗習慣の相違をもそのまま無作法の中へ數へてゐるのであるから。

▽デモクラシの世界的趨勢は僕等の民族的卓越性を失はしめて、個人的卓越性ばかりを高調するもの

のやうに考へてゐる向きが少くはないやうだけれども、度々云ふ通り、たとへどんなにデモクラシが廣まつても、民族並びに國家を離れての個人などは實存し得ないのだから、そんな個人の卓越もあり得ないのである。或個人が卓越してゐるのは、民族若しくは國家を何かの意味で代表若しくは體現してゐるからでなければならぬ。トルストイが露國を離れて無國家の人類の個人としてえらかつたやうに云はれてゐるのは間違ひであつて、實際に渠のえらい點は露國人としての人類の鬱忿や不平を十分に發揮したところにあつた。だから、わが國にトルストイが出ないのは、露國に豊太閤や明治天皇が出ないのと互に相殺すべきことである。そして兩者の卓越如何は露國人としてのトルストイと日本人としての明治天皇との比較に在る。一方は個人的、他方は民族的な卓越だと云ふやうな區別が何で立てられようぞ？

▽米國上院では頻りにわが國との開戦を厭はないやうな議論を發表してゐるに對して、僕等も日米開戦論を主張して少くともわが國民を鼓舞する資に供することが許されないだらうか？（大正八年九月）

一四 日本主義と國語

羅馬字に對する僕の考へ

他日わが國の言葉が、漢字まじりの文字のやうなものではなく、もつと簡便の（たとへば、羅馬字に）なる時が來て、その文字に僕等の從來書いて來たものが書き改められるやうに成つても、矢張り、さう分り難くいやうなことはないと云ふ確信を以つて、詩なり、小説なり、議論なりを成るべく純粹の現代的日本語でやつてゐる人々は、まだ少いやうだ。然し僕はその少いうちの一人であることを私かに喜んでゐる。

現今の日本文字、乃ち、國家が早晩もつと簡便な文字にあらたまらねばならぬことは、多少の智識があるものの反對しないところである。そしてまた、改まる以上は、わざ／＼何か新しい文字を拵らへるよりも、現存してゐる羅馬字にする方が早や道なことも分つてゐる筈だ。が、然し、さうだからと云つても、僕等は僕等が思想家として、詩人として、若しくは小説家として、今日發想してゐるところのものを直ちに羅馬字論者等の羅馬字擴め用に供するには及ばぬのである。

羅馬字擴め論者等の努力により、他日羅馬字がわが國人等に一般に用ゐられる時が來たら、わが國

人等の發想、乃ち、エキスプレションには純粹の日本語が——英語に於けるイデオムの如く——十分に一般に活用されて来るだらう。そしてこれは、雅語、雅文、漢字、漢文くづし等の文章をうち破つて、言文一致に出た僕等の——そして殊に言語上にも日本主義たる僕の——就いて来た傾向である。と云ふのは、どの國でも、その國語の生命に最も深く觸れてゐるものは思想家並びに文學者だ。この立ち場から今の羅馬字論者の様子を見渡すに、——渠等には理學者や諸科學者の指導が多いからでもあらうが、——わが國語を餘りに數量的、打算的、又は物算的に取り扱つてゐる。便利と云ふことがわが國語の自由と解放とを意味しないで、ほんのただ書き易いとか、活字にし易いとか、外國人にも見易いとか云ふことになつたり、ただ一般人に分り易い云ひあらはしが出来ることになつたりしてゐる。その擴め時代にはそれでも濟むかも知れぬが、僕等にはそれだけでは困るのである。もつと深刻な考へ方を以つてやつて貰ひたい、羅馬字文としてわが國語の力をもつと活かしてだ！今の羅馬字論者等の文體では、その標準が普通一般者の普通一般事を書き記すにある。云はば、まア、帳面づけの文體に過ぎぬ。今一つ——日本式羅馬字擴め會の趣意書きを讀むと、國語と國字との區別をちやんとしてあつて、結構だと思ふが、この區別を混同したやうなことが、會では、文部省の國語調査會の條項中にも見えた。今の漢字存續論者等には勿論、羅馬字論者等の間にも——無論、羅馬字論に新米だからだらうが——國字を改めれば國語がどうかなくなつてしまふやうに思ふものがまだちよこゝある。また、それ

で無くとも、或新米の羅馬字論者は——僕が會で攻撃した通り——斯う云ふことを云つた、「日本語は發音が不完全で」と。但し、不完全なのは日本語その物ではなく、日本語を書き現はす國字がだ。そしてそれを補ふ爲めには、否、そんなことのないやうにするには、成るべく早く羅馬字を一般的に用ゐるやうにしなければならぬ。

ここ何十年かの間に、羅馬字擴め會の諸君のやうな人々の努力が或程度まで効を奏した時、政府が羅馬字を國字として採用の命令を發しさへすればいいと僕等は考へてゐる。(大正六年一月七日、羅馬字擴め會の爲めに)

羅馬字と國語上の自覺

今日は羅馬字に一種の日本的氣分を入れる書き方を發表する鳴海君の援助に呼び出されたやうな譯であります。鳴海君は今日まで殆どその半生を言葉の書き現はしかたについて考へて来た人なんです。羅馬字には——私は今日羅馬字ばかりの事をお話しするんぢアありませんが——羅馬字の書きかたには之までといふものは大体二つに別れてゐる。羅馬字ひろめ會の遣ひ方と、日本の羅馬字社の遣ひ方とがあつて、少し違つてゐる。そこへもつて来て、鳴海君がここで先程説明したやうな事をやり出した譯で、今度は第三種に屬する羅馬字綴り方が出来ようといふ、これが爲に鳴海君はなかく意

氣込んでゐる譯なんです。僕も結局はさういふ風に遣ふ事に賛成しなければならぬと思ふ。

これだけ云へば役は済むのですが、併しここで少し文字といふ事から思想の上に至るお話しをして見たいと思ふんです。滑稽なのは、羅馬字に賛成する以上、いつそのこと英語にして仕舞つたら宜いぢやないかといふ事をよく聞きます。多くは外國歸りの人が英語なり獨逸語なりで飯を食つてゐて、日本語といふものに——日本人でありながら——まるで素養のない人がよく云ひます。併しそれは言葉を現はすところの文字と言葉そのもの、つまり言語そのものとを混同してゐるのである。言語といふものが別にあつて、之れに對して書き現はす字が出来てその字は何う變つても言語は變化しない。その所の具合をよく間違つてゐる人が多いんです。露西亞には何んでも三十餘種類の種族がゐて、それが三十餘種類の言語を使つてゐる。それでも文字といへば、あの奇妙に英語のエムやダブリユウのひツ繰り返つてゐるやうなアルハベツトで書き現す事になつてゐる。支那でも西藏、蒙古では大分字も違つてゐるが、南北の言語に變りはあるつても文字は變つてゐない。字そのものは一緒で、その發音だとか、或はその意味だとかいふものは違つて、殆ど別種の言葉のやうになつてゐる。それが爲めに南北といふものは常に反目していくさ喧嘩までして、政治上に衝突を來すまでになつてゐる。

日本では何うかといふと、漢字といふものを使つてゐる。形象文字であります。これが何ういふんだといふと、もとは一つの字、一つの字に發音もあり、意味もあるんです。發音だけぢやアない、意味も現はれてゐるんです。さういふ文字は昔の埃及にはあつたけれども、後には支那より外にはなくなつた。外の國で使つてゐるのは皆アルハベツトといふやつで、言葉の發音を書き現はす爲に字がある。イロハとか、エー、ビー、シーとかいふものから出來てゐる。それで音を組立てて意味のある發音を現はす。それがもと支那では一つの字を以て來たれば音もあるし、同時に意味も遣入つてゐる。故に漢字といふものは常にそれが音ばかりぢやアない、字ばかりぢやアない意味が遣入つてゐるのでそれを廢すると意味がなくなると思つてゐる。然しさう思ふのは漢字ばかりに馴染んでゐる人々だ。よく考へて見ると、日本語に漢語が遣入つてゐるのは決して形象文字としてではない。矢張り、音からである。

たとへば、漢語といふ一つの日本語は形象文字でなく、漢と響く音と語と響く音との熱合してゐるのである。だから、それが日本の單語の一つとして用ゐられてゐる時には、形象文字ぢやアない。矢張り假名で書くべき音を漢字を借りて書いたといふに過ぎぬ。だから、之をかんごと假名にしたところで用ゐかたに違ひがないのです。所で、その假名をもう一つ羅馬字に變へた方がもつと完全にその意味ある發音が現はれるといふ事になつて來るんです。もう一つ羅馬字の事を云ひますが、羅馬字に反對するものを二種類に別つ事が出來ます。之れまで使つて來た假名なり、漢字なりが遣入り込んでうまく斯う假名とまじり合つてゐるのがあるのだから、一度に之を廢すると分らなくなる。直ぐに馴れ

がたくつて困る。また馴れるとした所で、態々あるものを廢する事はないぢやアないかといふ論者です。これは大した事はない、少し説明してやると分る論者です。ピスマルク等も、獨逸文字を英語などで使つてゐるやうな字にして仕舞へといふ問題が起つた時に、反對をして、何も外國の字に變へてしまはなくつても好いちやアないかと云つた。上ツ面の國粹保存論から反對をしたので、矢張り第一種の羅馬字反對論者がこれです。それから、もう一つの反對論者は、羅馬字を使へば日本の國語を棄すといふ事を考へてゐる人なんです。然し現に僕は新らしい意味の日本主義を唱へて、『日本主義といふ雜誌を發行して、この代表的運動をしてゐる一人なんです。國語の獨立と云ふことは日本主義の一條目です。夫にも拘らず羅馬字に賛成です。それは何も國語を危くするんぢやアない、寧ろ國語を書き現はす文字が簡便になり、もつと突ツ込んで書けると思ふからであります。

それから、賛成する人にも二つの種類がある。これも能く諸君は覺へて置かなければならぬ。一方の賛成をする人は、矢張り、之も少し分らない人なんです。日本語は不完全だから羅馬字を採用すると發表した人がある。とこでその名を云ふ必要はないが、日本語、乃ち、諸君が話す言葉は不完全だから羅馬字を採用するのだといふ。併し之は間違つてゐる。羅馬字は字であつて言葉ではないから、その字として採用したつて、矢張り、日本語が現はれて來なければ分りません。その上、日本語其ものは決して不完全でない。漢字と假名とを文字としては國語の發音を現はすのに不完全な所があるの

だ。よしんば羅馬字を使つた所で、日本語そのものが完全になる譯ぢやない。さういふ區別が分らなくつては不可ない。夫ぎの賛成論者はすべてよく分つて賛成する人だが、今日直ちに一般に羅馬字を使へば、間違つて仕舞ふから、或る準備をしようといふ。若し羅馬字を知らない人があつて、そこへ羅馬字で『明日の晝、御馳走をするからやつて來て呉れ』と書いた所で、その人には通じない。だから、そんな事ではお互ひに困りますが、兎に角或る間の用意をしてそのうちに皆が羅馬字で書き現はした國語を讀めるやうにしてしまつたら好いといふ賛成者です。僕もその一人です。

つまり、今日小説なり、議論なり、哲學なりを直ちに羅馬字で書いて見たところが讀んで呉れなければ困る。僕も常に自分の思想を世に發表するに忙がしい方の一人だが、これを一般に共通ではない文字に書いた所で早急の間に合はない。然しかう云ふ事だけはもとから心がけて言葉を使つて來た——自分の今日假名まじりで書いてるものが羅馬字に書き變へられても、その中の漢字が何のことだか分らないやうなことの無いやうにと。萬葉假名といふのがある。半ば漢字の意味と半ば漢語の音とを利用してできたイロハです。あれを用ひるやうになつたのにも二三百年を要した。あの時代に賛成したり、反對したりするものがあつて、二三百年の間といふものを、丁度、今の羅馬字に對する状態であつたのだ。が、段々とこれが一般に通じて讀めるやうになつた。それと同じく羅馬字も熱心家があつて、たとへば、鳴海君のやうな、また田丸氏や田中館氏や向軍治氏のやうな熱心家等があつて、二